

研 究 紀 要

45

愛知文教女子短期大学

2024.3

目 次

原著論文

- 5歳児の語り合い活動における科学的思考の芽生え
…………… 岩 間 直 美 市 川 沙也加 長 野 未 来
…………… 瀬 古 杏 南 上 田 敏 丈 …… 1
- 公立保育所における発達障害児への支援制度に関する実態調査……………上 島 遙 …… 13

研究ノート

- 給食管理実習 I における実習後の意識変化について……………有 尾 正 子 …… 27
- 生徒指導と教育相談
—生徒指導提要と学校現場での教育相談的取組— ……加 藤 幸 弘 …… 35

実践報告

- キャリアチャレンジ
—学生の夢を叶えるための新たな取り組み—
…………… 小 川 美 樹 朴 賢 晶 渡 辺 香 織
…………… 原 真由美 土 井 拓 郎 …… 45
- SDGs の視点で取り組む産学連携商品開発
—みんないっしょのプラントベース商品開発— ……奥 村 智 子 村 田 奈 央 …… 67
- 学内情報システムの更新における現状の報告と今後の方針
—学内アンケートによるユーザの意識調査結果を踏まえて—
…………… 砂 田 治 弥 桐 崎 香 子 小 川 美 樹 山 崎 宜 久 …… 79

- 人生すごろく『金の糸』
—キャリアチャレンジ 過去・現在・未来をつなぐ— ……土 井 拓 郎 小 川 美 樹 …… 89
- レシピコンテストへの取り組みが学生の学習能力向上に及ぼす影響について
—タニタレシピコンテストに参加して—
…………… 山 口 由 貴 渡 辺 香 織 鋤 柄 悦 子 中 村 寿 和 …… 103

原著論文

5 歳児の語り合い活動における科学的思考の芽生え

岩間 直美* 市川 沙也加** 長野 未来*** 瀬古 杏南*** 上田 敏文****

The budding of scientific thinking in 5-year-old children's dialogue

Naomi Iwama, Sayaka Ichikawa, Miku Nagano, Anna Seko, Harutomo Ueda

Abstract

The purpose of this study was to capture the "budding of scientific thinking" in the dialogue of 5-year-old children. In the dialogue, the toddlers were creative in their thinking and free in their comments, and they enjoyed the shaking and expansion of their own naive concepts. The fact that the toddlers were exposed to and explored science together in the dialogue revealed that the dialogue itself became a community of scientific inquiry, and that the knowledge and emotional memories cultivated through the activity strengthened their interest and conceptual retention. These dialogue, in which young children's thoughts and creativity were layered on top of each other, were the foundation for "independent, interactive, and deep learning," and demonstrated its effectiveness as a method of discovery science that can be experienced only in the early years of childhood.

要旨

本研究では、5 歳児の語り合い活動において「科学的思考の芽生え」を捉えることを目的に分析を行った。語り合いの中で幼児は、創造的な思考を巡らせ自由に発言をすることで、自身の素朴概念の揺らぎを感じ、その広がりを楽しんでいた。また、語り合いのなかで科学に触れ、ともに探求していく様子が見られたことから、語り合い活動自体が、科学探究のコミュニティとなり、そのなかで培った知識と感情の記憶が興味関心や概念の保持を強めていたことがわかった。これらの幼児の思いや創造性を重ねていく語り合いは「主体的・対話的で深い学び」の土台となっており、幼児期にこそ体験できる発見科学の一つの方法として有効性を示したものである。

Keywords : Thinking of Science, Dialogue, Proactive, Interactive, and Deep Learning,
5-Year-Old Class

キーワード : 科学的思考、語り合い活動、主体的・対話的で深い学び、5 歳児

* 愛知文教女子短期大学

** 南知多町立保育所

*** 名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程

**** 名古屋市立大学大学院人間文化研究科

I. 問題と目的

幼児期における「主体的・対話的で深い学び」は、資質・能力を育むうえで重要な概念であるといえる。特に「対話的な学び」に注目すると、子ども同士の協働、教職員や地域のひととの対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広め深める¹⁾ ことの実現が求められ、豊かな体験とともに人とのつながりをもって学びを深めていくことができるといえる。杉山らは、「話し合い活動」を「一定のテーマに基づいて意見を出し合い、合意形成や確認を行う活動」と定義している²⁾ が、本研究では合意形成を目的とする話し合いを分析対象としないということ、さらに「対話」が意味する成否を明確にすることを目的としないため、「一定のテーマに基づいて意見を出し合い話し合うこと」を「語り合い活動」と定義する。

話し合い研究は、これまでも多く議論されている^{3) 4)} が、中でも5歳児を対象とした研究が多く散見される。5歳児では、自分なりに考えて判断する力、自分の意見を表明する力、友達の意見を聞いて意見を交換したり調整したりしながら合意形成する力を培う時期であるとも言われる³⁾ が、特に5歳児の10月ごろは、話し合いが「問題解決」や「選択」、「決定」といった結論や正解のある内容から、互いの考えを重ね合わせる「思考的活動」へと変化していく時期といわれている⁵⁾。

「思考的活動」の充実において、近年、アクティブ・ラーニングの手法を用いた様々な取り組みがなされている。特に、文部科学省はSTEAM教育の推進を図り、実社会での問題発見・解決に活かしていくための「探究活動」の充実において、「主体的・対話的で深い学び」の実現が必要であると示している⁶⁾。小学校以降の理科学習における対話の取り組みでは、対話することで子どもの“わかり”が深まり、科学が子どもの内に蓄積されていくことや、科学概念を修正し、新しい知を獲得していく様子がうかがわれた^{7) 8)}。しかし、こうした科学にとっては「素直に感じる心」が大切であり、それらは乳幼児期に育まれるといわれている⁹⁾。幼児期においては「遊び」とおした「学び」を意識した「かがく遊び」¹⁰⁾ や、「科学する心」を育てる実践に取り組む保育¹¹⁾ が活発に行われており、そうした事物や現象の探究にまつわる保育者の解釈や子どもとの関わりについても検討がされている¹²⁾。しかし、これまでの先行研究において科学的な対話をする場面は散見されるが、語り合い活動における科学的思考に着目した研究は見られない。

また、幼児が生まれた後の経験を通して獲得される「素朴概念」には、素朴で科学的に正しくない点も含まれるが、幼児が自分の世界に対して独自のものの見方を持っており、一貫性を持っている¹³⁾ ことから、幼児の「科学的思考」を語り合い活動において表出することの有効性と可能性の広がりが予想される。

本研究では、「主体的・対話的で深い学び」である幼児の語り合い活動から、正誤を問わない対話が行われることがどのように幼児の思考に影響するのかを捉えることを目的とする。

II. 調査方法とインタビュー内容

1. 研究協力者と背景

A県にある公立保育所に通う5歳児クラス24名(男児16名、女児8名)と保育士2名

(B 保育士：担任・保育歴 12 年) (C 保育士：補助・保育歴 7 年) である。保育士は 2 名とも 4 歳児クラスから 5 歳児クラスにかけて持ち上がりで担当をしている。

語り合い活動は、朝の集まり後に行われ、特別な理由がない限りほぼ毎日実施された。幼児と保育士は円形にイスを並べて座り、全員が他児の表情や動きを見て発言できる環境が整えられている。1 回につき 20～40 分の語り合いが行われ、テーマは日によって様々である。

2. 研究時期とデータ収集

2020 年 9 月から 2021 年 3 月の期間において、全 79 回の語り合い活動を 360 度録画可能なビデオカメラで撮影をした。また研究者らが月に 2 回訪問し、語り合いの様子を見学するとともに、B 保育士に語り合いについてインタビューをした。録画データはすべて文字起こしをし、テーマをカテゴリー別に分類した。テーマは、ドッジボールのチーム分けや室内遊びについて語り合う「遊びに関するテーマ」、運動会や縄跳び大会、防火パレードについて語り合う「行事に関するテーマ」、小学校に行くことや休み期間中についての出来事について語り合う「生活的テーマ」、結婚とは、天国と地獄とはどこにあるのかなどについて語り合う「哲学的テーマ」、月や宇宙について語り合う「科学的テーマ」の 5 つに大別された¹⁴⁾。今回の研究対象となる科学的なテーマ（自然に属する諸対象を取り扱うもの）を扱った語り合いは、計 7 回であった。詳細は表 1 に示す。なお、テーマの分類は共同研究者 5 名と B 先生でトランスクリプトを確認し、整合性を図っている。

表 1 科学的テーマ一覧

テーマNo	月日	内容	語り合い時間
①	9 月 9 日 (水)	秋について・月の不思議	23 分
②	10 月 2 日 (金)	月について・宇宙について	28 分
③	10 月 6 日 (火)	火星について	26 分
④	1 月 8 日 (金)	氷について・氷を作ってみよう	16 分
⑤	1 月 14 日 (木)	なぜ氷ができなかったのか	24 分
⑥	1 月 21 日 (木)	どうしたら氷ができるのか	37 分
⑦	1 月 22 日 (金)	氷を作ってみよう第 2 弾	26 分

3. 分析方法

録画した映像データをもとに、以下の手順で分析を行った。①語り合いでの発言をすべて文字起こしし、トランスクリプトを作成した。②トランスクリプトをコーディングし、片山らの発話カテゴリー¹⁵⁾を参考に発話を分類（表 2）、考察した。③科学的概念と思われる発話コード（「経験」「考え」「説明」「問い」）や科学的な発見や驚きに対する幼児の共有する言葉や反応（「感情の共有」）を抜粋し、科学的概念の広がり語り合いマップとして可視化し（事例①）、考察した。

表2 科学的テーマにおける子どもの発話カテゴリー

発話カテゴリー	定義	コード数 (表1 テーマNo)						
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
経験	経験したことや事実を話す	21	21	3	18	20	11	10
考え (仮説)	自分の考えや意見を話す	13	28	4	24	41	45	14
説明	根拠や理由を話す	4	17	5	10	5	18	3
問い	疑問を尋ねる (問いを深める問いや、 みんなで考えたいという 思いを含む)	0	13	2	3	6	9	1
感情の共有	仲間と同じ言葉や反応を示す	2	0	1	2	0	13	22

Ⅲ. 倫理的配慮

A 保育所の所長および X 町の所轄部署に研究の内諾を得たのち、文書で許諾を得た。本研究の実施にあたっては、個人情報の保護を遵守するため、個人が特定されないようアルファベット表記としている。匿名化を前提に、研究発表を行うこと等について説明をし、許諾を得た。

Ⅳ. 結果と考察

1. 概念の揺らぎがさらなる興味関心を生起させる

事例① 月の話題から宇宙へ思いを馳せる

対象となる語り合い：①②③

秋について語り合ううちにお月見の話題となった。月について幼児が語り合った内容を図1に示す。科学概念と思われる語りをコーディングし、その対話の流れを表したものである。幼児が自身の考えを断定している語りを実線枠、確信を持っていない、または疑問に思っている語りを点線枠で示している。

幼児は月についての見た・聞いた経験とともに、自分なりの理論を持っている様子が見えてくる。例えば、月の形は変わらないという理論は、科学的には正しい。しかし、幼児はその正しい概念を知るのではなく、語り合いの中でいろいろな意見を聞いて自分の概念とのずれを感じている。どのように見えるかという問題は小学校以降の理科学習で学ぶであろうが、少なくともこの語り合いで月の概念についてさらなる興味関心を生起しているといえる。

また、2020年の十五夜は10月1日(木)であったため、①と②の語り合いの間の期間、幼児はそれぞれ月の形を観察することとした。幼児には自主的に観察をする姿が見られ、友達同士で知らせあうこともあった。保育室のカレンダーには月の形が書き入れられており、保育士が書き始めると、同じように幼児が月を描くようになった。これは、語り合いにおいて曖昧であった知識が自分たちの観察により少しずつ明確化していったといえる。

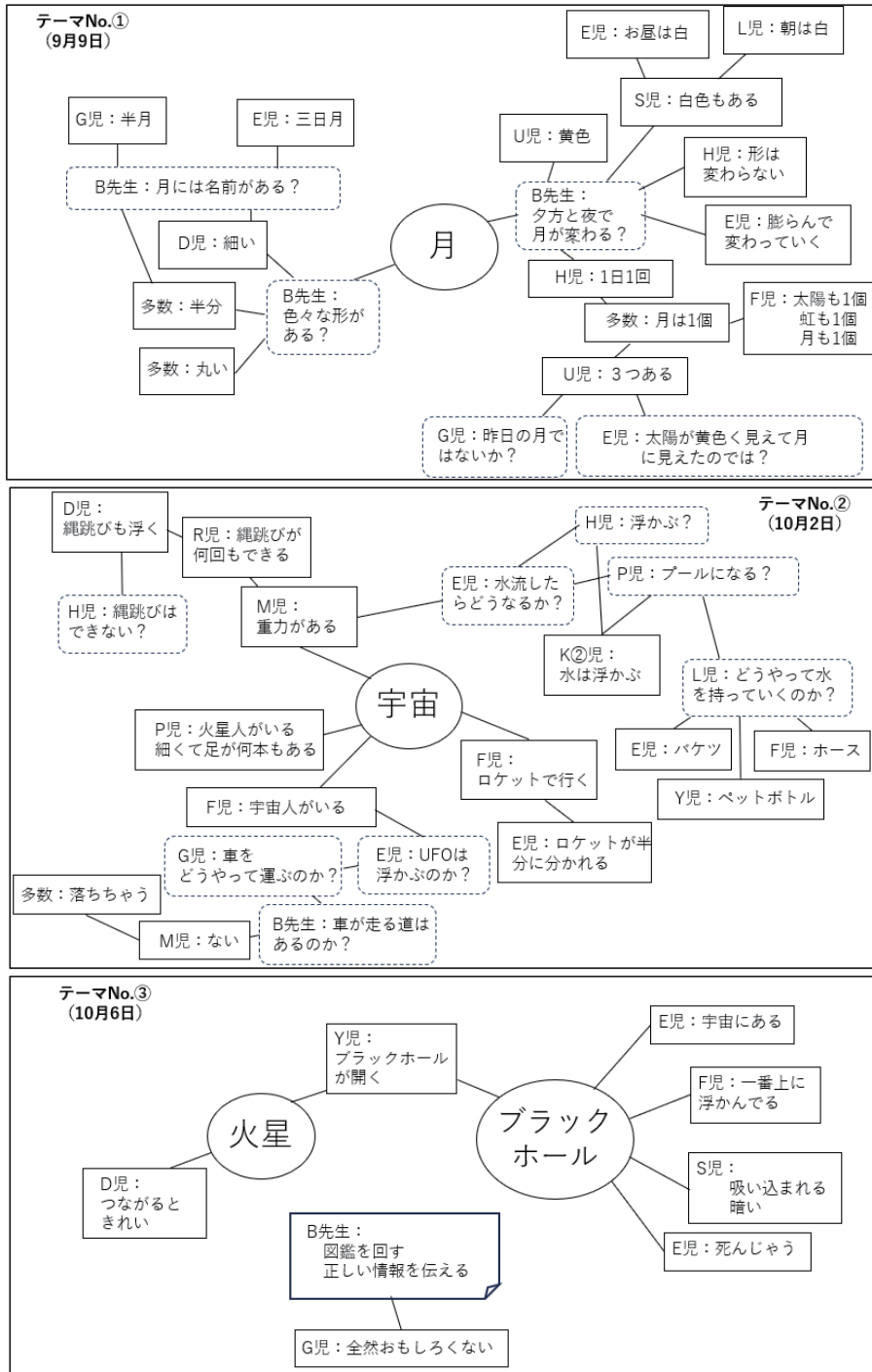


図1 語り合いマップ

2. 創造的な思考による自由な発言が語り合いのおもしろさを広げる

月をよく観察するうちに、宇宙について考えを巡らすようになっていった。その語り合いの一部を表3に示す。宇宙に関して想像を巡らせ、科学的概念を広げる発話カテゴリーについては科学的思考の芽生えと捉えることとし、下線を引いた。

この語り合いには、これまでの知識に加え、創造的な思考が多くみられる。表2のカテゴリー数においても新たな問いが多く発現した事例である。未知の世界に対して、自分なりの素朴理論があり、さらに願望のような創造性も含まれている。B先生が幼児の発言を受け止め、発信するファシリテーターとしての役割を担っていることで、その創造性は広がりを持ち、幼児の語り合いの楽しさを刺激しているといえる。保育士もクラスのコミュニティの中で積極的に参加し、幼児の探求を深めていく働きかけが必要である。幼児は主体的に宇宙についての図鑑を見る姿があり、この後の語り合い活動においても火星やブラックホールについて考えを対話するなど、自分を取り巻く世界についてより深く探求してみたいという自主的な取り組みと対話による発見を促し、継続的な「主体的・対話的で深い学び」につながっていった。ただ、幼児は対話の中の創造性を楽しんでおり、B先生が正解のある知を示すと、期待していた世界との異なりを感じ、「全然おもしろくない」との発言に至ったと考えられる。このことは、小谷がいう素朴概念が科学的に正しい「学校知」へと再構成していく必要な要素としてその矛盾を意識づける機会¹⁶⁾となったが、乳幼児においては自力での「知的な気づき」として気づけるような物的環境の設定を工夫する必要があると考えられる。しかしながら、この計3回の語り合いは、1年を通した語り合いの中で幼児自身が印象深かったと挙げていた事例でもあり、カテゴリー数(表2)においても新たな問いが多く発現しており、その問いを深める問いや、みんなで考えたいという思考の広がりや科学的なトピックを身近に感じるきっかけとなったといえる。

表3 宇宙についての語り合い(10月2日「月について・宇宙について」より)

E児： <u>宇宙でなわとびしたらふわふわ〜って</u> (考え)
I児： <u>宇宙でなわとびしたら何回もできる、ぶかぶかしてるからさ、何回もできるよ</u> (考え)
D児： <u>なわとびも浮いちゃう</u> (考え)
B先生：Dちゃんが縄跳びも浮いちゃうんじゃないって
H児： <u>ていうことはさ、宇宙になわとびしたらできないんじゃない？</u> (説明)
B先生：できないんじゃない？だって
E児： <u>あのさ、宇宙に水流したらどうなる？</u> (問い)
B先生：宇宙に水流したらか
H児： <u>浮かぶんじゃない？</u> (考え)
B先生：浮かぶんじゃないだって
M児： <u>プールになるんじゃない？</u> (考え)
B先生：プールになるのかな？Lちゃんが <u>どうやって水を持ってくの？</u> だって (問い)
E児： <u>バケツ</u> (考え)
M児： <u>こぼれちゃう</u> (考え)
J児： <u>宇宙に行ったらこぼれちゃうもん</u> (説明)
F児： <u>ホース</u> (考え)
R児： <u>ペットボトル</u> (考え)

3. 語り合いから始まる科学への期待と実践的関わり

事例② 生活経験と重ねて考える氷作り

対象となる語り合い：④⑤⑥⑦

計4回の語り合いとなった氷の事例は、語り合いの中で氷に関する実験を並行していたという特徴がある。この時の語り合いについて、B保育士のインタビューでの語りを表4に示す。幼児の生活経験から出た言葉や事象と思われるものに下線を引いた。

表4 B保育士の語り（1月19日インタビューより）

子どもが家の水槽に氷が張っていた、金魚の水槽に氷が張っていたという話から、毎年、氷作りもするのだけど、できそうだと、子どもたちがちょうどそういう話題を出してくれたから、それで、「ああ、そうなんだ。」と話をしていたら、「海は凍っていなかったか」、S児が「海は凍っていなかったかな。」というのを、話し合いの時間の前に私に話してきて、たまたまE児がいて、「海はね、凍っていなかったよ。僕ん家、海の前だからザブンザブンしていた。」、「ああ、海は凍っていなかったんだ。」と言って（中略）「じゃあ、氷作り、してみようか。来週、してみよう。」という話をしていた時に、「先生、塩を入れるといいんだよ。」と。「何で?」、「塩を入れると冷えるらしい。凍りやすいらしいよ。」それで、塩バージョンと水バージョンで、何か溶けにくいらしい、凍りやすいらしいみたいなの、漁師町だからなのかな分らないけど、「じゃあ、ちょっと試してみよう。塩と水でしてみよう。」となったら、「砂糖もしてみよう」と。同じ白い粉だからという感じよね。「塩と砂糖と3種類です?」となったら、「塩と砂糖も混ぜたら、どうだ?」みたいな、

子どもたちは、語り合いの中で氷についての様々なトピックを生活における事象と関連付けながら考えを深めていった。「どうしたら氷ができるのか」「海は凍るのか」「寒いと雪が降るのか」「雨が凍って雪になるのか」「水に塩を入れたら凍りやすいのか」「外のどこに置いたら凍りやすいのか」「何に入れたら凍りやすいのか」など、子どもたちの日常生活の文脈において考えが構成されていたという点が特徴であった。これらの自身の疑問や考えが語り合いの中では答えが見つからないからこそ、知りたい、やってみいたいという意欲へとつながっていることがわかる。語り合いで生じた興味関心に「氷をつくってみる」「氷がひもにくっつくか」といった実験を取り入れたことで、あいまいだった知識（概念）に具体性をもたらすことができているといえる。さらに、実験がうまくいかないという経験がさらに子どもたちの興味関心を底上げし、自分たちで考え実行していく力を育んだり、正解のある知へたどり着く過程を楽しんだりすることができている。日常生活における文脈を語り合いの中に落とし込み、自分たちで仮説を立て、実験を伴って検証しながら試行錯誤し、これまでの知（概念）を柔軟に変化させていくといった一連の流れが科学的思考を育んでいるといえる。語り合いはその科学的思考の土台となっていることがわかる。

4. 探究の語りが同じ目的を持つ共同世界を生成する

豊田は、子どもの哲学において対話形式での実践の中で他者と「ともに考える」力を育むことの重要性を提示しており、「探究の共同体」としての人間関係がつけられること

が可能であると示されている¹⁷⁾。長野らは「ともに考える」共同体となっていく対話には、幼児も保育者も正解を知っていて権威を独占するのではなく、権威が対話者それぞれに共有されることが「探究の共同体」に近づく要素だと示している¹⁸⁾。科学的なトピックに当てはめると、「探究」とは「もの (=物質)」や「こと (=現象)」に対する自らの課題意識に基づいて「問い」をつくり、その問いを解決するため「仮説 (予測)」を立てて実験 (観察) 等の「検証」を行い、問題解決を行うと定義され¹⁶⁾、幼児教育においては、幼児なりに好奇心や探究心を持ち、問題を見出したり、解決したりする力を育てることとして重要視されている。事例②では、実験【検証】を伴う語り合いであったため、これまで示した発話カテゴリーの「考え」を【仮説】と定義する。また、「探究の共同体」と思われる共感について、ともに楽しみ期待を持つ言葉や反応を【感情の共有】とした。

表5 氷の実験における語り合い (1月22日「実験第2弾」より)

B先生：はい、じゃあ今、Pちゃんの塩ができましたので、続いて	
D児：B先生が持ってきた砂糖	
B先生：今、くっつけました。このままやると？	問い
M児：くっついたよさっき	経験
B先生：でもすぐ落ちちゃったでしょ？	説明
S児：そうっとやれば？	【仮説】
B先生：そうっとやったよ、ほら	【検証】
F児：あれ？	<概念の揺らぎ>
B先生：あははは	
多数：あははは	【感情の共有】
D児：だから砂糖早くかけて。凍って、溶けちゃう溶けちゃう	
B先生：はい、じゃあ続いてお砂糖行きます。お砂糖ね、入れてきたもん、また。	
D児：ばらばらそおとかけて	【仮説】
F児：ぱっとかけて	【仮説】
B先生：わかった。はい、砂糖かけました。	
I児：落ちちゃうかもしないね	【仮説】
B先生：いい？	
F児：まだまだ	【仮説】
Q児：いっせいの一つで	
(くつつく)	【検証】
多数：おお～ (拍手)	【感情の共有】
B先生：ついた	
T児：すげえ	【感情の共有】
O児：みんな呼んでくる？	【感情の共有】
B先生：あはは、みんなって？じゃあ園長先生だけ呼んできてあげて	

氷の話題では、計4回のこれまでの語り合いが積み重なっていたことで、保育者も幼児もそれぞれが様々な情報に触れたり、試してみたり、必要な材料を園へ持ってきたりするなど

の姿が見られた。また、実験を伴う語り合いであったという点からも、考え（仮説）の発話カテゴリーが多く見られ（表2）、同じ目的に対して共に予測することを楽しんでおり、安心して共同世界の中で自分の考えを発言できていると考える。それらは小グループでの実験とは異なり、クラス全体で緊張感や喜びが共有されていることがわかる（表2・表5）。この語り合いの映像データには、クラス全員が氷の変化に注目し、その過程を楽しんでいる様子が記録されていた。

表5に示したように、幼児の体験において素直に感じる心や正解を求める意欲が語り合いに「探究の共同体」として表れている。これまで経験がなかったことや知らなかったことが、語り合いをすることで自他の思いや考えを重ねて共感【感情の共有】し、共同世界をつくっていく営みとなっていることがいえる。

V. 総合考察

本研究では、幼児の「主体的・対話的で深い学び」として、語り合い活動からの「科学的思考の芽生え」を捉えることを試み、以下の点が示唆された。

1 点目に、幼児は科学的なトピックにおける語り合いの中で、創造的な思考を楽しみ、生活経験をもとに仮説を立てたり、時には検証したりするなどし、その際の概念の揺れや期待・喜びといった感情を共有していくという遊びのなかに学びの土台があるということである。「主体的・対話的で深い学び」が重要な概念であるということは、科学的な思考を深める際にも同様であり、正しい情報を頭からやみくもに取り入れるだけでは不十分であるということである。深い学びにつなげるには、幼児が持つ素朴概念と科学的概念とのずれ、認知的葛藤を経験する必要がある。幼児期にそのような経験ができるよう幼児を導いていく必要があるが、今回のような語り合い活動を充実させることは、幼児の概念変化を促すために有効である。また、「創造的な思考活動」は、内省的な知能を使い、科学的なトピックに新しい関心と呼び起こす¹⁹⁾ということがまさに科学的思考の芽生えと捉えられる。今回の語り合いは、すでに持っていた素朴概念を柔軟に変化させるとともに、今まで関心を持っていなかった事項にも目を向け関心と呼び起こす活動となっていた。そして語り合いにはそのプロセスに遊び的要素が含まれる¹⁸⁾ことから、創造的な思考自体を遊びとして楽しむ姿があり、やりとりを通した生活経験との重なりや語り合いを通した遊びのなかの学びがあったといえる。

2 点目に、幼児期ならではのコミュニティと相互作用が協働的な学びとして語り合いに大きな役割を果たしているということである。これまでも保育者のファシリテーターとしての役割の必要性が提示されてきた^{20) 21)}が、科学的なトピックにおいても、それをつなぐ保育者といった大人の関わりがどう直接的・間接的に働きかけてやれるかが重要であるとされている⁹⁾。今回の科学的な思考を楽しむ語り合いでは、保育者は幼児の言葉を反復したり、マイノリティの声を拾ったりする役割を担い、幼児の問いを深める作用となっていた。何を言ってもいいというクラスの受容感と幼児の創造性を掻き立てるテーマは、クラス全員の活動への参加を可能とし、保育者も含めた科学探究のコミュニティの中で培った知識と感情の記憶が興味関心や概念の保持を強めていたといえる。さらにそうしたコミュニティ内での相互作用があつてこそ、幼児の概念変化を可能にしていたといえる。

さらに、これらの幼児自身が体や頭を使って、調べたり、問いかけたり、理由付けを

したり回答を発見したりする発見科学の経験は、就学前に体験することで、自然現象が持つ深遠で美的な要素が保ち続ける¹⁹⁾といわれるように、幼児期に主体的・対話的に体験することに大きな意味をもつといえる。こうした科学的なトピックについての学びは実際の体験と対話により学びを得ることができるといった「主体的・対話的で深い学び」が有効だが、幼児期においては今回のような語り合いにこそ「主体的・対話的で深い学び」の土台である重ねのコミュニケーションがあり、多様なものの見方、多様な語りの生成による幼児の科学的な思考の芽生えを表出させることが示唆された。

本研究においては、「主体的・対話的で深い学び」の土台としての語り合い活動から「科学的思考の芽生え」を捉え、その有効性を示すことができた。今後は、幼児が語り合い活動の中で科学的な思考の概念変化を達成させていくプロセスを丁寧につまみ、検討していく必要があると考える。

文献

- 1) 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」
- 2) 杉山弘子・野呂アイ (1997) 「幼児の話合い活動について一日課の中の話合い活動の位置づけ」『尚綱女学院短期大学研究報告 第44集』 pp. 29-37
- 3) 杉山弘子 (2016) 「5歳児クラスにおける合意形成のための多数決の使用」『尚綱学院大学紀要 72』 pp. 1-10.
- 4) 塚越奈美・荻原ひろみ・山名裕子 (2014) 「5歳児クラスの話し合いにおける論理的思考と直感的思考のゆらぎ：担任による実践記録からの分析」『教育実践学研究 (19)』 pp. 9-24
- 5) 大元千種・小林ゆり (2017) 「幼児期における話し合い活動の質的変容」『筑紫女学園大学研究紀要 12』 pp. 161-173
- 6) 文部科学省 (2023) 「STEAM教育等の教科横断的な学習の推進について」
- 7) 原科勇希 (2021) 「子どもが「科学する」理科学習—科学は誰のものか—」『信州大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻 (教職大学院) 実践研究報告書抄録集』 pp. 57-60
- 8) 貴志年秀・舟浴千晃・岩崎仁・岩崎朝蔵・岸本将宏・峯祐太郎 (2020) 「子どもがつなぎ・つくり・つながる理科学習の構築：対話的な学びから生まれる問題解決の力」『和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』 pp. 93-98
- 9) 小泉英明・秋田喜代美・山田敏之 (2007) 「幼児期に育つ「科学する心」」小学館
- 10) 小谷卓也 (2023) 「科学教育の視点から見た幼児期の「遊び」を通じた「学び」の構造モデルの提案」『大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要 (13)』 pp. 31-45
- 11) ソニー教育財団 (2023) 「科学する心を育てる」『ソニー幼児教育支援プログラム実践事例集 Vol. 20』
- 12) 滝口圭子 (2023) 「保育のなかの科学につながる探究場面の保育者の解釈」『日本乳幼児教育学会第33回大会研究発表論文集』 pp. 220-221
- 13) オズボーン, R, & フライバーグ, P (編) 森本信也・堀哲夫 (訳) (1988) 『子ども達はいかに科学理論を構成するか—理科の学習論』東洋館出版社
- 14) 上田敏丈・市川沙也加・岩間直美・長野未来・瀬古杏南 (2022) 「保育園における語り合う時間に基づく幼児の学び」『名古屋市立大学大学院人間科学部人間文化研究 37』 pp. 131-

138

- 1 5) 片山美香・星川知美 (2021) 「5 歳児の振り返りの時間における話し合い活動の発話分析」『岡山大学教師教育開発センター紀要 11』 pp. 101-115
- 1 6) 小谷卓也 (2021) 「乳幼児の探索に関する研究動向と乳幼児期の科学教育の視点から見た探索研究の方向性」『大阪大谷大学 STEAM Lab 紀要 (1)』 pp. 53-60
- 1 7) 豊田光世 (2012) 「子どもの哲学」の教育活動の理念と手法に関する研究：ハワイ州の取り組みを事例として」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告書 (14)』 pp. 41-50
- 1 8) 長野未来・市川沙也加・岩間直美・瀬古杏南・上田敏丈 (2023) 「年長児の哲学的対話にみられる「ともに考える」関係性の特徴」『国際幼児教育研究 Vol. 30』 pp. 51-65
- 1 9) J.D. ハーレン・M.S. リプキン (編) 深田昭三・隅田学 (訳) (2007) 『8 歳までに経験しておきたい科学』 北大路書房
- 2 0) 杉山弘子 (2013) 「4 歳児クラスでの合意形成のための話し合いにおける保育者の働きかけ」『尚絅学院大学紀要 66』 pp. 39-48
- 2 1) 瀬古杏南・長野未来・岩間直美・市川沙也加・上田敏丈 (2022) 「保育所における 5 歳児の語り合い活動の関する研究 - 行事を作り上げる過程に関わる保育者の特徴的役割に着目して - 」『日本発達心理学会第 33 回大会』

原著論文

公立保育所における発達障害児への支援制度に関する実態調査

上島 遥*

Survey on the Support System for Children with Developmental Disabilities
in Public Daycare Centers

Haruka Kamijima

Abstract

To understand the current status and issues of early support systems for children with developmental disabilities, a questionnaire was conducted among 287 daycare centers under the jurisdiction of local governments with a population of 100,000 or more. Responses were obtained from 144 municipalities.

Regarding the target of childcare for children with disabilities, almost half of the municipalities required "possession of a disability certificate." However, some municipalities emphasized the need for consultation with specialized institutions or the presence of daycare attendance, while others had criteria based on how the daycare center assesses the child's condition. It became evident that in some municipalities, support tailored to the child's actual situation was provided without necessarily requiring a disability certificate or diagnosis. The issue of support systems that deviate from the reality of childcare was highlighted, as multiple children with disabilities were often counted together in the allocation of additional childcare staff.

Based on these findings, this paper discusses the necessary support systems in public daycare centers that are expected to fulfill a public role.

要旨

自治体によって異なる発達障害児への早期支援制度の現状と課題を把握するため、人口10万人以上の自治体にある保育所所管課287カ所に対して質問紙調査を行い、144カ所の自治体より回答を得た。

障害児保育の対象については、半数近い自治体が「障害者手帳を有していること」を条件としていた。一方で、「専門機関への相談や通所の有無」といった支援を必要とする経緯を重視する自治体や、「子どもの様子を園側がどう判断するか」という基準を設けている自治体もあり、いくつかの自治体では必ずしも障害者手帳や診断を必要とせずに、子どもの実態に即した支援が行われていることが明らかとなった。加配保育

* 愛知文教女子短期大学

士配置基準については複数の障害児がまとめてカウントされ、保育の実態とはかけ離れた支援制度の課題が浮き彫りとなった。

これらの結果から、公的な役割を果たすことが求められる公立保育所における支援制度のあり方について考察した。

Keywords : Childcare for Children with Disabilities, Developmental Disabilities, Early Support, Daycare centers

キーワード：障害児保育、発達障害、早期支援、公立保育所

I. 研究の背景と目的

障害児支援においては特に、ライフステージに応じた切れ目の無い支援の推進（縦の連携）と関係者間のスムーズな連携の推進（横の連携）が求められており、都道府県と市町村によるそれぞれの役割分担に応じた連携と、身近な行政主体である市町村の存在が重要であるとされている¹⁾。女性の就業率の上昇に伴い保育所利用児童数が増加する中、障害児の保育所利用ニーズの高まりも予測されている²⁾。しかしながら、これまで公立保育所における障害児保育については、各自治体の考え方や市民運動の歴史により自治体に差が生じてきたことが指摘されており³⁾、障害児への支援体制が自治体によって異なっている現状が明らかとなっている⁴⁾。

加えて、保育所等では、障害の診断はないが行動やコミュニケーションなどの面で自閉症スペクトラム等の特徴を抱えた「気になる子」への対応が課題となっている。保育現場での子どもの行動やコミュニケーションの場面で、「言葉が出ない・遅い」「会話が成り立たない」「視線が合わない」「集団に入らない」等々のいわゆる自閉症スペクトラムや ADHD、LD 等の特性を抱えた子どもたちであること、さらには、保護者の精神的な病気や虐待された体験などのために生じた二次的な障害や問題行動を抱えた者も数多く含まれるとされている⁵⁾。

「気になる子」に関わる保育者の困り感としては、「保護者が理解してくれない」「対応方法がわからない」等が挙げられ⁶⁾、「人的資源や時間的余裕の問題」等を理由として全ての「気になる子」に対して支援が行われていない現状が明らかとなっている⁷⁾。各保育所等が受け入れている数は、障害児が平均で 3.73 人、「気になる子」は 23.01 人との報告もあり⁸⁾、「気になる子」を含めた発達障害児への対応は喫緊の課題である。

そこで本調査では、保育所における「気になる子」を含めた発達障害児への支援を必要十分なものとするため、まずは自治体によって異なる発達障害児および「気になる子」への支援制度の現状を明らかにする実態調査を行う必要があると考えた。全国の人口 10 万人以上の市区町村にある保育所所管課に対し、保育所における発達障害児および「気になる子」への支援制度に関する実態調査を行った。なお、私立保育所については各保育所所管課において把握している情報に偏りがあり有効な回答数を得ることが出来なかったため、調査結果を公立保育所に限定して示し、分析および考察を行った。

II. 調査方法

1. 調査対象

調査対象は、人口規模による社会資源の差による影響を考慮し、全国の人口 10 万人以上の自治体にある保育所所管課 287 カ所を対象とした。

2. 調査方法と調査期間

調査方法は、郵送による質問紙調査とした。

調査期間は 2019 年 11 月 11 日から 2019 年 11 月 29 日とした。

3. 調査内容

調査項目は、①保育所における障害児保育の対象児への支援制度についての項目（障害児保育の対象となる基準、支援内容、加配保育士の配置について）②発達障害児への支援制度の現状についての項目（支援内容、入園を断る場合の有無、入園を断る場合が「ある」理由）③診断はないがその傾向が見られ特別な支援を必要とする「気になる子」への支援制度の現状についての項目（支援内容、支援を受けるために必要な手続き）について設定した。調査項目の詳細な内容については、以下の表 1 の通りである。

表 1 調査項目の内容

障害児保育の対象児について	対象となる基準 (複数回答)	1. 障害者手帳を所有している 2. 特別児童扶養手当の対象児である 3. 診断書の提出を求める 4. その他(自由記述)	
	支援内容 (複数回答)	1. 加配保育士の配置 2. 個別療育 (OT、PT、ST等) の実施 3. 療育施設職員による巡回指導 4. 医師による巡回指導 5. 市の独自加算 6. 都道府県の独自加算 7. その他(自由記述)	
	加配保育士の配置 について (複数回答)	1. 対象	①障害者手帳を所有している ②障害の程度が重度 ③障害の程度が重度～中度 ④診断書を提出している ⑤対象となる障害児が複数在園している ⑥その他(自由記述)
		2. 申請に 必要な手続き	①保護者による申請 ②医師による診断書の提出 ③園長による所見 ④担当保育者による所見 ⑤その他(自由記述)
		3. 配置基準	①障害の程度や種別に関わらず 1 対 1 で配置 ②障害の程度や種別に関わらず 1 対 2 で配置 ③障害の程度や種別に関わらず 1 対 3 で配置 ④障害の程度や種別に関わらず 1 対 5 で配置 ⑤年齢による制限を設けている ⑥障害の程度や種別による基準を設けている ⑦その他(自由記述)
	「発達障害」と確定診断され ている園児への支援	支援内容 (複数回答)	1. 加配保育士の配置 2. 個別療育 (OT、PT、ST等) の実施 3. 療育施設職員による巡回指導 4. 医師による巡回指導 5. 市の独自加算 6. 都道府県の独自加算 7. その他(自由記述)
		入園を断る 場合があるか	1. ある 2. ない
		入園を断る場合が 「ある」理由	自由記述
	確定診断のない 「気になる子」への支援	支援内容(複数回答)	1. 加配保育士の配置 2. 個別療育 (OT、PT、ST等) の実施 3. 療育施設職員による巡回指導 4. 医師による巡回指導 5. 市の独自加算 6. 都道府県の独自加算 7. その他(自由記述)
		支援を受けるための 手続き	1. 保護者による申請が必要 2. 保護者による申請は必要ではない

なお、ここでいう「発達障害児」とは、「発達障害者支援法」に定義されている「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」とした。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮としては、愛知文教女子短期大学研究倫理規定に基づき実施した。本研究の結果を公表する際には、本調査で得た情報は数的に処理し、回答者等個人の氏名等プライバシーにかかわることは一切外部に漏れることのないように倫理的な配慮を十分に行うことを調査対象となる自治体へ参加について文書で説明し、同意を得た。

5. 分析方法

分析方法については、選択肢回答法から得られたデータについては Excel にて単純集計を行い、その割合を示した。自由記述については、主な内容をカテゴリーごとに分類して示した。

Ⅲ. 調査結果

回収数 144 件、回収率 50.2%であった。以下に調査結果を述べる。

1. 保育所における障害児保育の対象児への支援制度の現状について

障害児保育の対象とする基準については、「障害者手帳の所有」を48%と半数近くの自治体が基準としており、「診断書の提出」(34%)や「特別児童扶養手当の対象児である」(31%)という基準を設けていた。

一方で、「その他」の回答も多く「病院、保健所、児童発達支援機関への相談や通所の有無」といった『福祉サービスや相談支援等を受けている』ことを基準とする自治体や、「保護者からの申請はないが、保育所として気になる子に対する対応をしている」「体験保育を実施し支援が必要と判断された場合」といった『各園による判断』の基準を設けていることが明らかとなった。

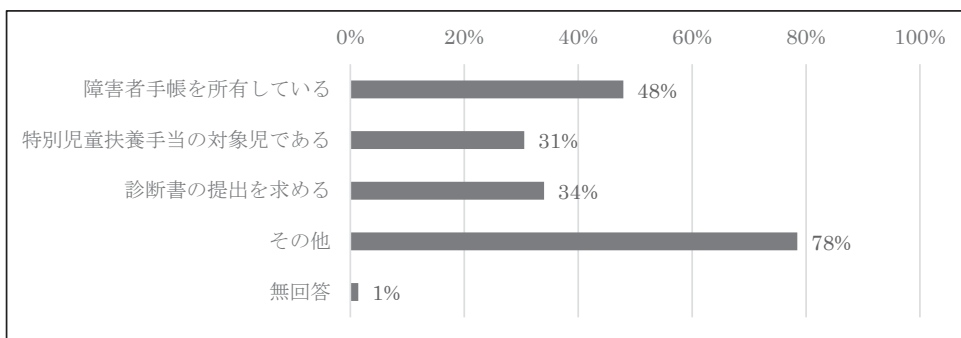


図 1 障害児保育の対象となる基準 (複数回答) n=144

表2 「その他」自由記述の内容

カテゴリー	具体的な内容
医療との連携がある	<ul style="list-style-type: none"> ・医師の所見が確認できる ・医師の意見書がある ・医療など他機関と連携が取れている ・市の相談機関にて小児精神科の診断を受けて加配が必要と診断されている
福祉サービスや相談支援等を受けている	<ul style="list-style-type: none"> ・児童発達支援施設に通所している ・療育施設併行通園、発達相談の対象者 ・受給者証の交付を受けている ・保健師が経過をみている
検査の結果による	<ul style="list-style-type: none"> ・KIDS、SDQにより支援を必要と認定された園児 ・検査の数値が75以下の児童 ・発達検査の結果を用いて市の基準で判断
市の独自基準を定めている	<ul style="list-style-type: none"> ・市の判定基準による ・市の実施要綱に準ずる ・市の専門機関による介護判定を受けての結果 ・園への観察訪問を実施し、基準表を用いて判断
各園による判断	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者からの申請はないが、保育所として気になる子に対しての対応をしている ・通常の職員配置人数で保育することが難しいと園長が判断した児童 ・体験保育を実施し支援が必要と判断された場合 ・所長の判断による ・現場判断
専門機関による判断や根拠資料を求める	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども家庭センターにおいて認められた児童 ・児相の判定書による ・専門機関の判定員が必要と認める ・発達相談機関からの意見書等により必要性を判断
確定診断を問わない	<ul style="list-style-type: none"> ・診断がなくても手厚い保育が望ましいと考えられる子が集団保育が可能な3歳から5歳児 ・明確な基準はなく安全に集団生活を送れるか否かで判断

障害児保育の対象児への支援内容は、「加配保育士の配置」が最も多く89%の自治体で実施されており、次いで「療育施設職員による巡回指導」(48%)が多かった。

加配保育士配置の対象となる基準については、「その他」(52%)が最も多く、次いで「障害者手帳を所有している」が40%、「診断書を提出している」が32%、と多かった。また、「対象となる障害児が複数在園している」ことを基準としている自治体が22%あった。

加配保育士配置に必要な手続きとしては、「保護者による申請」を必要とする自治体が44%であった。「園長による所見」44%、「担当保育者による所見」41%、に比べると「医師による診断書の提出」を求める自治体は29%と低かった。

加配保育士配置の基準については、「障害の程度や種別による基準を設けている」29%が最も多かった。

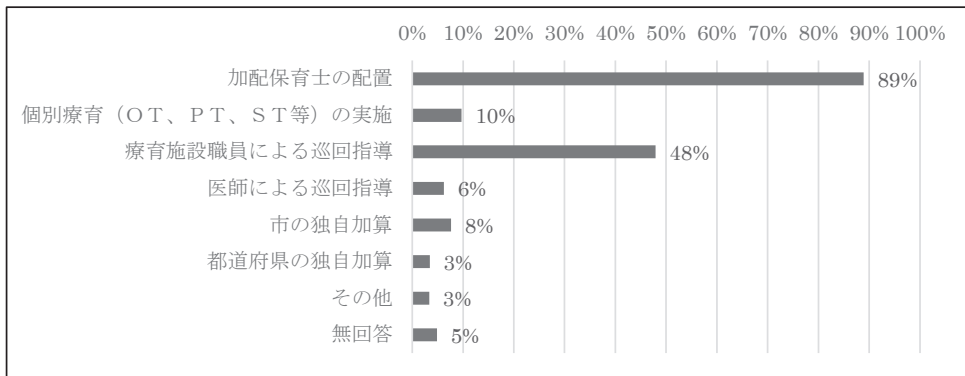


図2 障害児保育の対象児への支援内容（複数回答） n=144

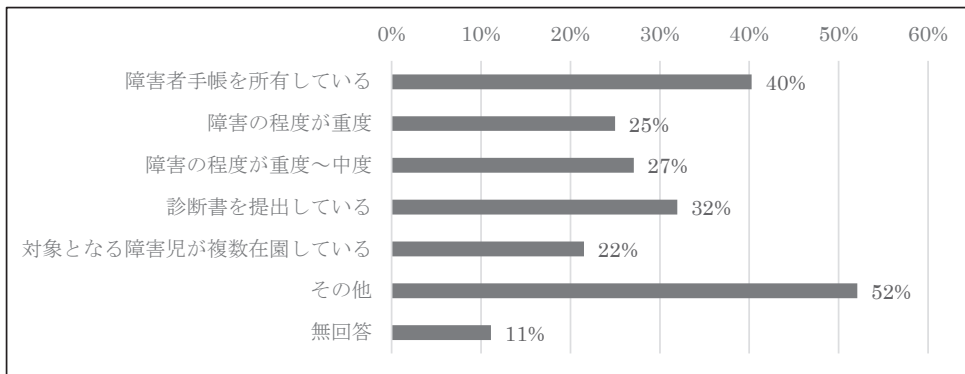


図3 加配保育士配置の対象となる基準（複数回答） n=144

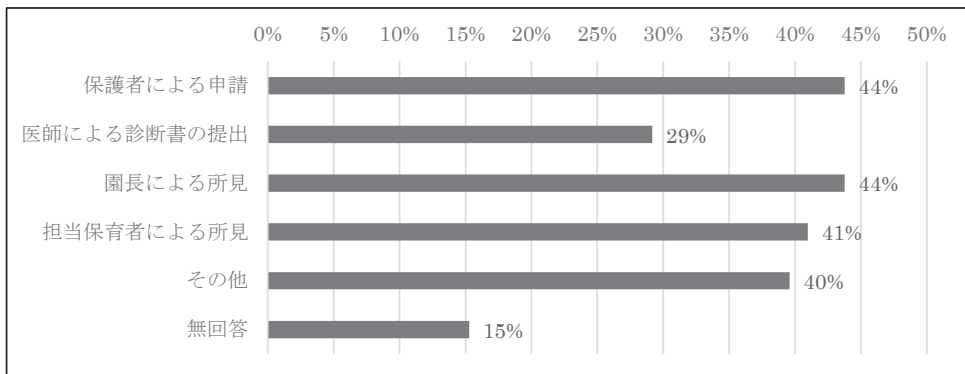


図4 加配保育士配置の申請に必要な手続き（複数回答） n=144

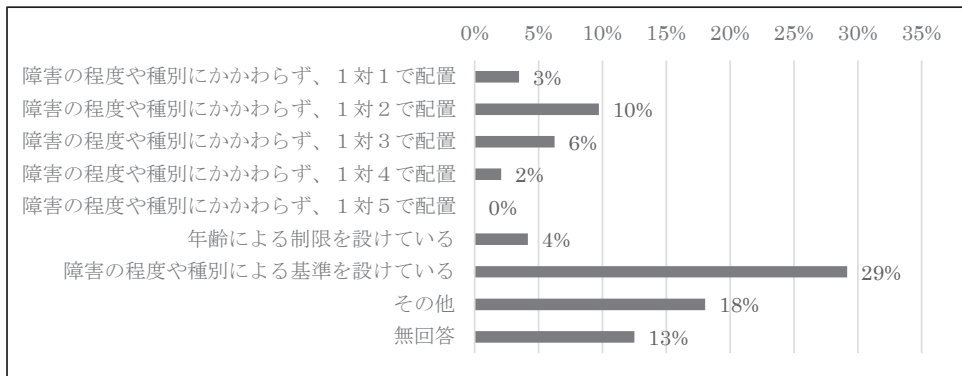


図5 加配保育士の配置基準（複数回答） n=144

2. 発達障害と確定診断されている園児への支援の現状について

入園時に発達障害が確定診断されている園児に対する支援は、「加配保育士の配置」が72%と最も多かった。

入園申請時に発達障害が確定診断されている園児について、入園を断る場合が「ある」が27%、「ない」が67%であった。入園を断る場合の理由としては、「発達障害と診断されているという理由でお断りをするのではないが、児童の様々な要素を総合的に見て、集団で教育・保育を行うことが適当でないと判断し、専門療育を勧めるケースの場合はお断りする」「基本的にはないが、加配保育士の確保が困難な場合、また障害の程度により保育園での集団保育が可能でない場合」など対象となる園児にとって『集団保育への適応が難しい』ために保育所においての生活が十分な環境でないと判断され入園を断る場合や、「保育士の確保ができない場合」という園の『人員不足』に課題があり入園を断る場合があった。

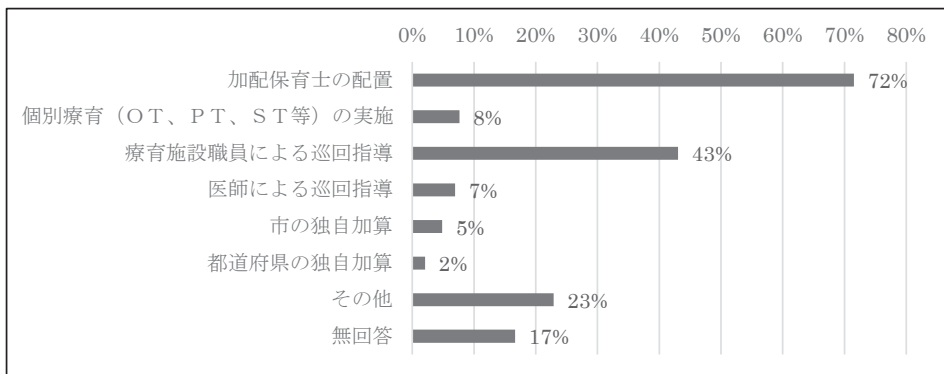


図6 発達障害が確定診断されている園児への支援内容（複数回答） n=144

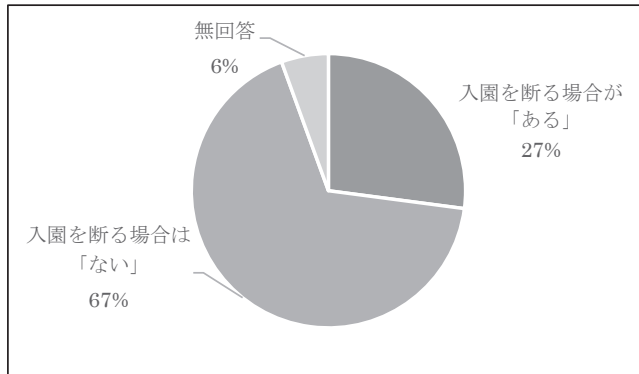


図7 発達障害の確定診断されている園児の入園を断る場合があるか n=144

表3 入園を断る場合が「ある」理由

カテゴリー	具体的な内容
人員不足	保育士の確保ができない場合。
	基本的にはないが、加配保育士の確保が困難な場合、また障害の程度により保育園での集団保育が可能でない場合。
集団保育への適応が難しい	「発達障害」と診断されているという理由で断ることはないが、児童の様々な要素を総合的に見て、集団で教育・保育を行うことが適当でないと判断し、専門療育を勧めるケースの場合には断ることがある。
	集団の中で発達が全く見込めない場合（のぞめない場合）。

3. 発達障害の診断がない「気になる子」への支援の現状について

発達障害の診断はないがその傾向が見られ特別な支援を必要とするいわゆる「気になる子」に対しても、診断を有する園児と同様に「加配保育士の配置」(60%)や「療育施設職員による巡回指導」(43%)などの支援が行われていることが示された。「発達障害が確定診断されている園児」と「気になる子」への支援内容の比較をすると、「加配保育士の配置」については確定診断されている園児より「気になる子」への割合が少ないことが示された。

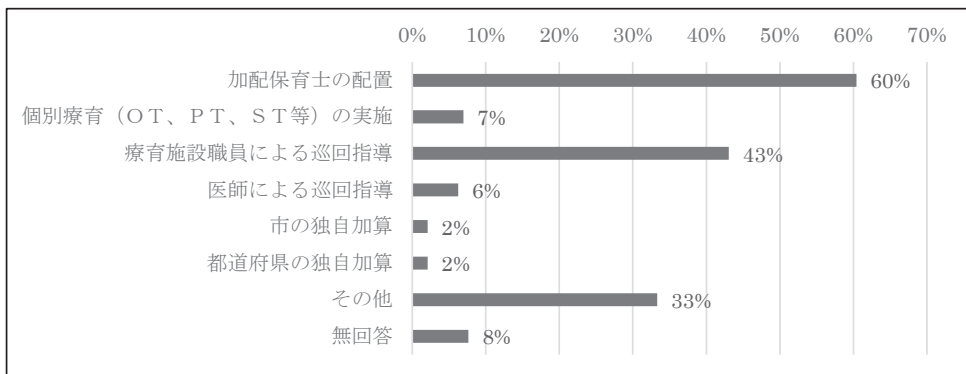


図8 「気になる子」への支援内容（複数回答） n=144

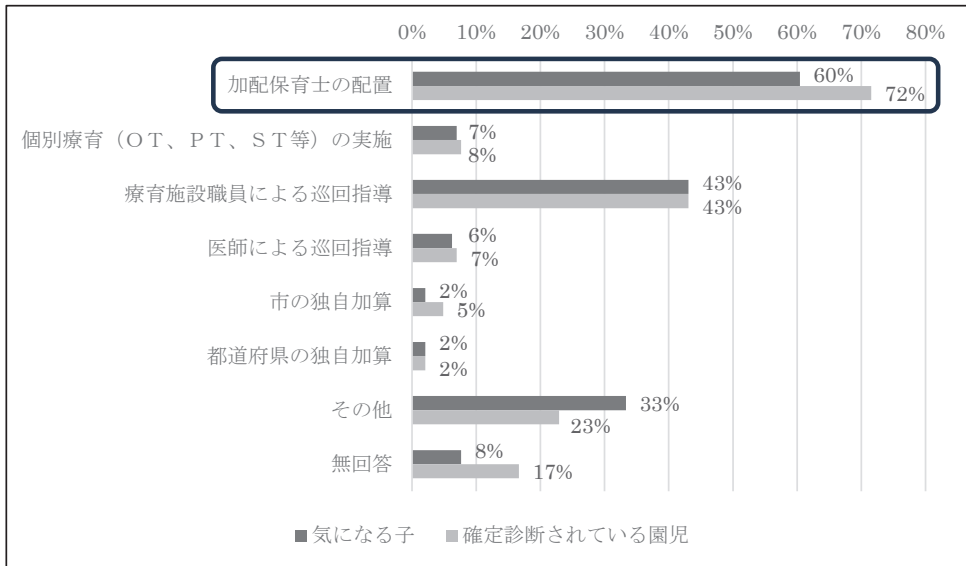


図9 「発達障害が確定診断されている園児」と「気になる子」への支援内容の比較

支援を開始するにあたって必要な手続きについては、「必要である」21%、「必要ではない」69%であった。「必要である」との回答の具体的な内容については、『医師の意見書の提出』『保護者による申請書類の提出』『保護者による同意』があり、『保護者の同意や申請は必要ない』との回答には、保育課長の判断や、園からの申請によって手続きが行われているという記述があった。

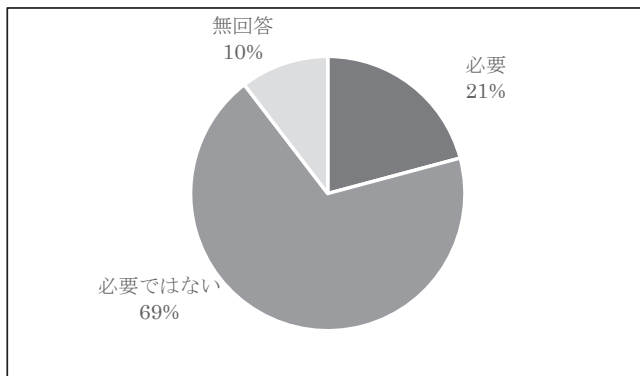


図10 支援を受けるための手続き n=144

表 4 必要な手続きの内容

カテゴリー	手続きの具体的な内容
医師等の意見書の提出	医師の意見書の提出
	心理士による所見・審査、医師による加配の可否
	基本的には医師の意見書・情報提供書が必要
保護者による申請書類の提出	支援保育の申請用紙を提出
	保護者が発達質問票を提出し、保育所が所管課に申請
	申込書の提出
保護者による同意	保護者の同意が必要
	保護者による申請の必要はないが、同意は必要
	同意書への記入
	保護者の同意の下保育所からの申請により行動観察を行い、支援の対象か否かを定める
	ケース資料としてあげることについて保護者の承諾を得る
保護者の同意や申請は必要ない	他機関への情報照会に対する同意を得る
	保育課長が必要と認めた場合には支援児保育の可否について審査会に意見を求めることができる
	巡回指導は保護者の申請はいらぬ
	保護者の理解や受け入れに至っていない場合には園からの状況報告書・申請書

IV. 考察

1. 発達障害の確定診断や保護者の同意を前提としない支援制度の整備

国の施策に発達障害の早期発見や介入に向けた取り組みが盛り込まれ、地方自治体による5歳児健診の実施が推奨されているが全地域の実施には至っておらず、背景として5歳児健診は法定健診ではないため自治体のコスト負担となっていること等の課題が指摘されている^{9) 10)}。発達障害の早期診断については、診断を行う医師や相談機関の不足から、十分に納得しないまま受診する保護者にかかる負担が指摘され¹¹⁾、より専門的な医療を受ける必要性のあるケースをピックアップすることへの方向転換が必要だとの指摘もある¹²⁾。子どもの生活に密接にかかわる保育所・幼稚園こそ発達障害を含めた子どもの様子に気づくことができ、発達障害を含めた子どものフォローの場として重要であるとも示されている⁹⁾。つまり、確定診断を優先させるばかりでない、保育所等における発達障害児への適切な支援体制の整備が求められていると考えられる。

今回の調査では、障害児保育の対象とする基準について、「障害者手帳の所有」を48%と半数近くの自治体が基準としており、「診断書の提出」(34%)や「特別児童扶養手当の対象児である」(31%)という基準を設けていた。一方で、「その他」の回答も多く「病院、保健所、児童発達支援機関への相談や通所の有無」といった『福祉サービスや相談支援等を受けている』という保育所における支援に至る経緯を重視する自治体や、「保護者からの申請はないが、保育所として気になる子に対する対応をしている」「体験保育を実施し支援が必要と判断された場合」といった、子どもの様子を

園がどう判断するかという『各園での判断』の基準を設けている自治体もあり、いくつかの自治体では必ずしも障害者手帳や診断を必要とせず、実際の子どもの姿に基づいて支援の必要性が判断されていることが明らかとなった。

確定診断のない「気になる子」への支援を開始するにあたって必要な手続きについては、69%の自治体が「必要ない」としており、「基本的には医師の診断書あるいは意見書・情報提供書が必要ではあるが、保護者の理解や受け入れに至っていない場合には園からの状況報告書・申請書が必要」「原則として保護者の申請書類の提出が必要であるが、提出がなくても保育課長が必要と認めた場合には支援児保育の可否について審査会に意見を求めることができる」というように、保護者のわが子の障害特性に対する理解の段階によっては、『保護者の同意や申請は必要ない』とする仕組みを取り入れている自治体があった。

一方で、「発達支援委員会での行動観察、保育士による主訴・書類提出、心理士による所見・審査、医師による加配の可否」という手続きの必要がある自治体や、「保護者による申請の必要はないが、同意は必要」「保護者の同意の下、保育所からの申請により行動観察を行い、支援の対象か否かを決める」「他機関への情報照会に対する同意を得る」というように、『保護者の同意』を得てから支援を開始することを重視している自治体がいくつか見られた。

例えば海外の取り組みに目を向けると、英国のオールダムでは、保護者から同意が得られず支援の必要性について納得してもらえない場合であっても、ナーサリースクールでの支援は開始され、支援と並行して保護者への丁寧な説明を繰り返し継続している。支援に必要な予算は、チルドレンズセンターの専門職がアセスメントに基づいた報告書を提出することにより、保護者の同意にかかわらず地区の教育委員会からおりてくる仕組みになっている¹³⁾。わが国においても、子ども一人ひとりの発達を保障するためには、保護者の同意や確定診断を待たずとも、その子どもにとって必要な支援を開始できる仕組みが重要であると考ええる。

また、全国に先駆けて公立保育所における障害児保育を開始し、現在も障害児支援において先進的な取り組みを行っている東京都調布市では、調布市子ども発達センター利用に際して受給者証を必要としない「発達支援事業」を位置付けている。平成28年度の発達支援事業利用者の内訳をみると、在籍児数512名のうち「手帳を有していない児童」が440名(86%)在籍している。特に就園前の2歳児グループでは利用希望者の増加傾向が見られており、早期支援が開始できていることがわかる¹⁴⁾。受給者証を求めない、つまり確定診断や障害者手帳の取得といった条件を前提としないことにより、早期からの療育支援にも繋がりがやすくなるのではないだろうか。

以上のことから、幼児期においては確定診断や障害者手帳の取得を条件として支援を開始するのではなく、丁寧な個別の支援ニーズのアセスメントに基づいて、その子どもにとって必要な支援が行き届くような支援体制を整備する必要があると考える。

2. 必要な支援が行き届くための保育実態に即した保育体制の整備

加配保育士の配置における課題については、多くの保育所が年齢別保育を行うため、特別な支援が必要な子どもが同じクラスに在籍しているとは限らないこと、保護者が

子どもの障害受容ができないことから行政支援を受けるための保護者の理解を得られるとは限らないこと、などがこれまでの研究で指摘されてきた³⁾。

今回の調査では、障害児保育の対象児および発達障害と診断されている園児への支援内容は、「加配保育士の配置」が最も多く、「気になる子」に対しても同様に「加配保育士の配置」(60%)や「療育施設職員による巡回指導」(43%)などの支援が行われていることが示された。ところが、「加配保育士の配置」について発達障害が確定診断されている園児と「気になる子」の比較をすると、確定診断されている園児(72%)に対して「気になる子」への割合(60%)が少ないことが明らかとなった。

また、加配保育士の配置基準について「複数の障害児が在園している」と回答した自治体が22%あった。複数の障害児に対して加配保育士が配置される場合、クラスや学年をまたいだ支援を行う必要が生じる。発達障害児の姿については、3歳から5歳までは一貫して他児や担任とのコミュニケーションが困難である様子、不器用やぎこちなさ、運動面の困難さが挙げられている¹⁵⁾。加えて確定診断のない「気になる子」が一定数在園している保育所の状況において、複数の障害児だけをまとめてカウントして加配保育士を配置する現在の仕組みは、保育の実態とはかけ離れているのではないか。

発達障害の特性による集団内での困難さを早期に見極め、その困難さに応じた支援を行うためには、「気になる子」が一定数在籍している保育の実態を前提とした保育体制の整備や、支援が必要となった時に、その子どもに合わせたきめ細やかな支援が速やかに開始できるような個別の支援制度の整備をすすめることが今後の課題であると考える。

V. 結論

調査結果から考察した①発達障害の確定診断や保護者の同意を前提としない支援体制の整備、②必要な支援が行き届くための保育実態に即した保育体制の整備については、加配保育士の配置基準や予算の見直し、保育士人材の確保など、今後の保育行政の課題として自治体全体で取り組む必要があると考える。

VI. 本調査の限界と今後の課題

本調査は、公立保育所において診断の有無に関わらず何らかの支援をすでに受けている園児に対する支援制度について実施したが、保育所では集団生活における個々の園児への発達段階に応じた対応が求められており、そこで生じる様々な課題への解決は各園や自治体の努力に任されている。今後、こうした課題の解決を図るためには、障害の診断のないいわゆる「気になる子」を含めた、医療・母子保健・保育・教育・療育が連携した早期支援システムの整備に向けた課題を明らかにする必要がある。

謝辞

本研究を遂行するにあたりご協力いただきました、調布市福祉健康部長(当時)山本雅章様、調布市子ども生活部保育課長(当時)永山祐介様に深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 障害児支援の在り方に関する検討会 (2014) 厚生労働省ホームページ
「今後の障害児支援の在り方について (報告書) ～「発達支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか～」
(<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihoke-nfukushibu-Kikakuka/0000051490.pdf> 2024/01/05 閲覧)
- 2) 障害児通所支援の在り方に関する検討会 (2021) 厚生労働省ホームページ「障害児通所支援の在り方に関する検討会報告書ーすべての子どもの豊かな未来を目指してー」
(<https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000845350.pdf> 2024/01/05 閲覧)
- 3) 前原朝子 (2014) 「公立保育園の障害児保育の現状と課題」『福祉労働』(144), 27-34
- 4) みずほ情報総研株式会社 (2017) 「保育所における障害児保育に関する研究報告書」
- 5) 櫻井慶一 (2014) 「保育所での「気になる子」の現状と「子ども・子育て支援新制度」の課題ー近年における障害児政策の動向と関連して」『生活科学研究』37, 53-65
- 6) 菅原亜紀 (2016) 「A市内保育所における「気になる子」に関するアンケート調査より見えてきたもの」『純真紀要』56, 85-96
- 7) 落合利佳 (2021) 「「気になる子」に関する保育者の意識と支援の実態ー保育所アンケートからクラス構成に着目してー」『京都女子大学発達教育学部紀要』17, 1-11
- 8) PwCコンサルティング合同会社「令和3年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 保育所等における障害児に対する保育内容及び関係機関との連携状況等に関する調査事業報告書」(2022)
- 9) 西岡絹代, 佐々木順二 (2020) 「熊本県における発達障害の早期発見・早期支援に向けた乳幼児健康診査とフォロー体制ー保健師と保育所・幼稚園との連携に焦点を当ててー」『心理・教育・福祉研究』19, 61-76
- 10) 斎藤まなぶ他 (2016) 「5歳児健診の現状と課題」『児童青年精神医学とその接近領域』57(2), 254-260
- 11) 平岩幹夫 (2014) 「幼少時期の発達障害とスクリーニングー早期発見と早期支援ー」『公衆衛生』78(6) 388-391
- 12) 牧真吉 (2012) 「早期発見と早期療育ー児童福祉の立場から」『そだちの科学』18, 66-69
- 13) 菊池遥 (2020) 「イギリスオールダム地区における障害児への早期支援の実際」『愛知文教女子短期大学研究紀要』41, 39-47
- 14) 上島遥 (2021) 「発達障害児への早期支援に関する研究 : 東京都調布市への調査から」『愛知文教女子短期大学研究紀要』42, 33-40
- 15) 宮寺千恵, 吉澤智慧 (2015) 「発達障害の診断を受けた幼稚園児の行動特徴 : 3歳から5歳の変化に関する検討」『千葉大学教育学部研究紀要』63, 43-49

研究ノート

給食管理実習 I における実習後の意識変化について

有尾 正子*

Changes in Students' Attitudes After Taking Food Service Management Practice I

Shoko Ario

Abstract

The second year of Food Service Management Practicum I is a practical training course in which 100 meals are prepared and served at a specific food service facility on campus. The first-year students ate food prepared and served by second-year students, and a questionnaire survey was conducted on students' willingness to learn before taking the Food Service Management Practicum I. 70% of the students responded that they could learn a lot, suggesting their willingness to learn. This paper aimed to investigate changes in students' attitudes after taking the course in the second year. The results showed that 34.5% of the students answered "very difficult," and 65.5% answered "difficult," indicating that all students thought Food Service Management Practicum I was a demanding subject. Regarding what they learned, "mass food preparation techniques" and "sanitation management" were the most common, indicating that they achieved the items listed as learning outcomes.

要旨

給食管理実習 I は、2 年次の科目であり学内において特定給食施設を想定し 1 回 100 食の給食提供を実践的に行う実習である。1 年次に 2 年生が調理提供する給食を喫食し、給食管理実習 I を受講する前の学習意欲についてアンケート調査を行い、7 割の学生が「とても学べた」と回答し、学習意欲が示唆された。本研究では、実際に 2 年次に受講し実習後の意識変化について調査することを目的とした。実際に受講して「とても難しかった」34.5%、「難しかった」65.5%と回答し、全員が給食管理実習 I について難しい科目であると思っていることが分かった。学べたことについては、「大量調理技術」、「衛生管理」が多く、学習成果として挙げていた項目を達成されたと考えられる。

Keywords : Food Service Management Practice I, consciousness change, large-quantity cooking technology, sanitary management

キーワード : 給食管理実習 I、意識変化、大量調理技術、衛生管理

* 愛知文教女子短期大学

I. はじめに

給食の調理は、栄養士の主要業務であり調理作業を滞りなく安心・安全に行わなければならない¹⁾。2年次に給食管理実習Ⅰを円滑に行うため、1年次に給食管理論Ⅰで給食の運営の基礎を学び、さらに2年生が調理する給食を試食し、学習意欲向上に努めている。「管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム（以下「栄養学教育コアカリ」）が作成され²⁾、栄養学教育コアカリの栄養士養成に関する項目では、3-1)給食の概念、3-2)給食管理のマネジメント、3-3)給食施設における栄養管理と品質管理、3-4)食材管理、3-5)給食の生産・提供における衛生管理、3-6)給食の生産管理、3-7)給食施設における事故対策の基本が挙げられている。3-6)給食の生産管理の学修目標⑤では「業務用調理機器を使用して給食の生産・提供ができる」とあり、特定給食施設などで給食の生産・提供が行える能力と技術を備える必要があると考える。

令和4年度、1年次に2年生が調理提供する給食を喫食後、2年次の給食管理実習Ⅰへの学習意欲について調査したところ、4割の学生が不安感を抱いていたことが分かった³⁾。この不安感が給食管理実習Ⅰ修得後どのように変化し、学習成果として学べたかを調査することを目的とした。

II. 方法

1. 対象

調査対象は、本学食物栄養専攻2年生(29名)

2. アンケート調査実施日

令和5年12月18日

3. 調査項目

給食管理実習Ⅰで提供した料理で印象に残っているもの、1年次に試食した給食のどの点を参考にしたか、実際に大量調理を行っての難易度はどうであったか、学べた項目を選択することとした。

4. 倫理的配慮

対象者へは、事前にアンケートは無記名であり個人を特定して取り上げない、本研究以外には使用しないことを口頭で十分に説明し同意を得た。

本研究は、愛知文教女子短期大学倫理審査委員会を経て承認を得ている(5号-08)。

III. 結果および考察

今回の給食管理実習Ⅰで印象に残っている料理の有無については、72.0%が「ある」と回答しているが、1年次の方が印象に残っているようである(図1)。印象に残っている料理として、「七夕そうめん」、「肉みそ中華麺」を挙げている者が多かった。麺類の調理提供は、麺の加熱時間を考慮して調理しなければならないため試作時から麺類

の提供の難しさを伝えていたため、特に印象に残っていると思われる。

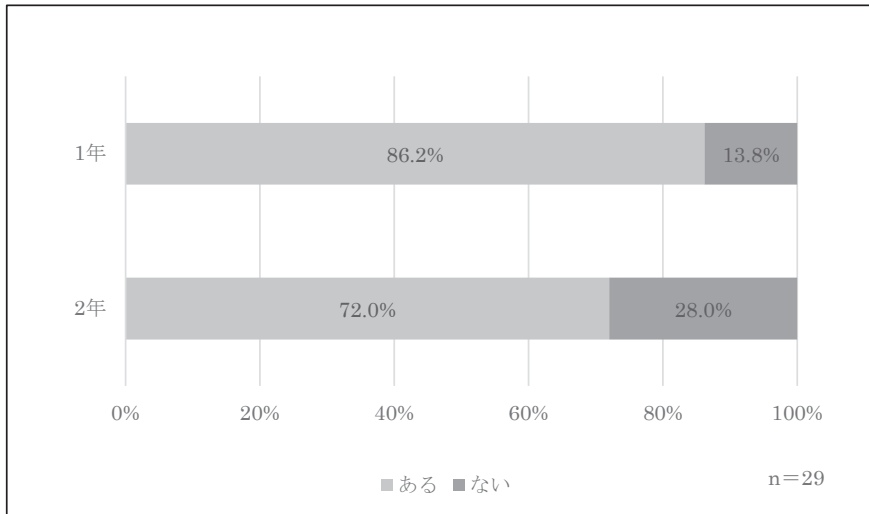


図1 印象に残っている料理の有無について

1年次に喫食した給食を参考にしたかについては、「とても参考にした」21.0%、「参考にした」58.6%であった(図2)。参考にした内容については、盛付、彩り、食材選択、調理法と回答した者が多かった(図3)。盛付、彩りは、喫食者の食欲を増進させる要素でもあるため、1年次に2年生が調理した給食の写真を参考にしたものと考え

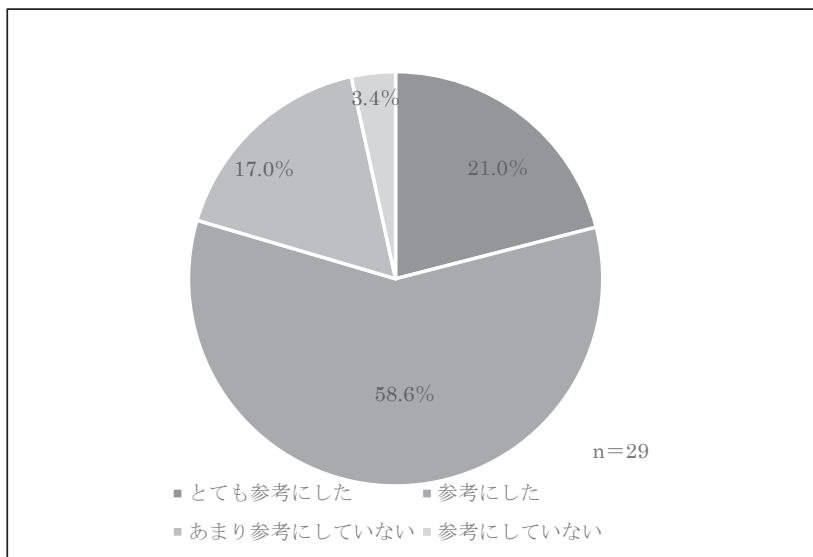


図2 1年次に喫食した給食を参考にしたか

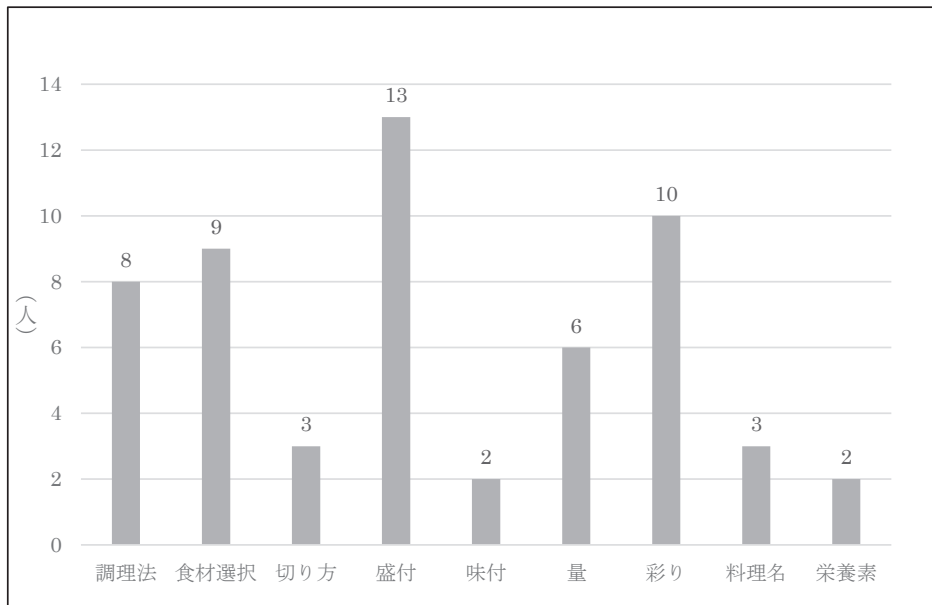


図3 参考にしたこと (複数回答)

実際に大量調理を経験した難易度については、「とても難しかった」34.5%、「難しかった」が65.5%であった(図4)。全員が大量調理を難しいと感じていることが確認できた。

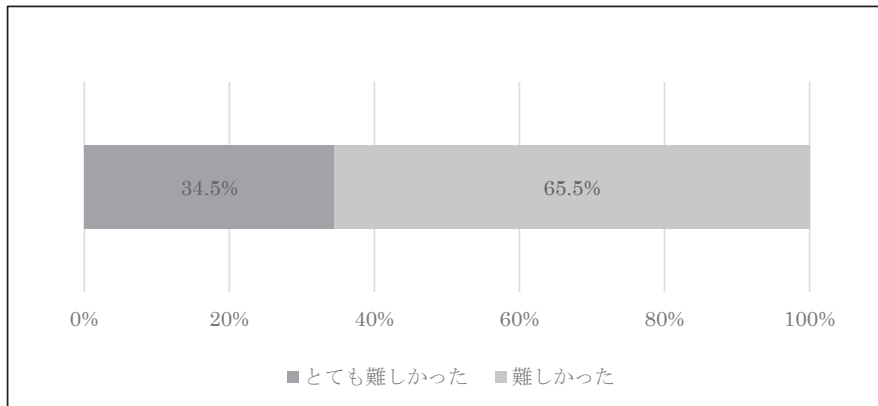


図4 大量調理の難易度

学べたことについては、大量調理技術、衛生管理、厨房機器の使い方、献立作成が多く、食環境づくりと回答した者はいなかった(図5)。

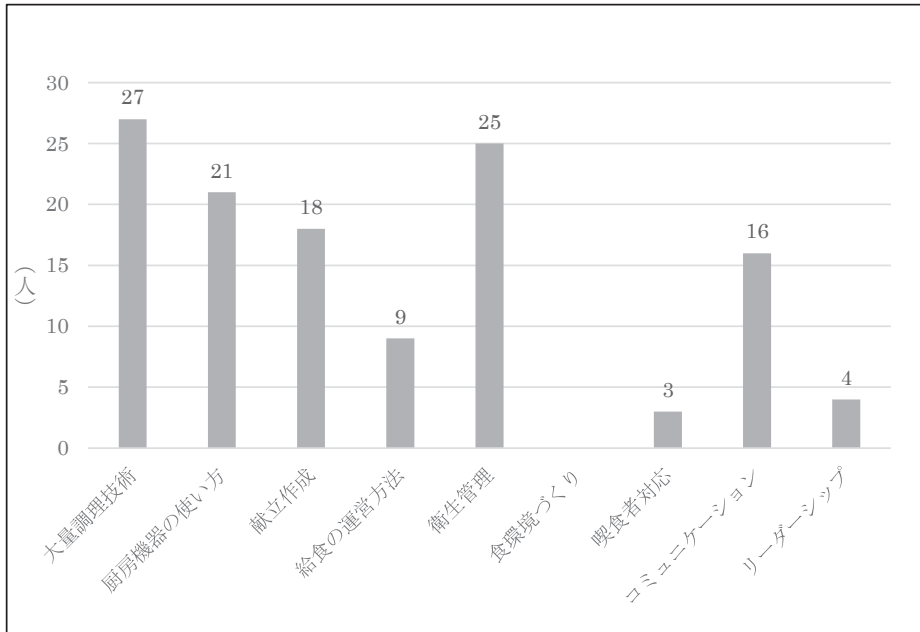


図5 学べたこと (複数回答)

給食管理実習 I で学んだことを活かせるかについては、「とても思う」、「思う」を合わせて96.6%であった (図6)。活かせる内容については給食作りと衛生管理が多かった (図7)。

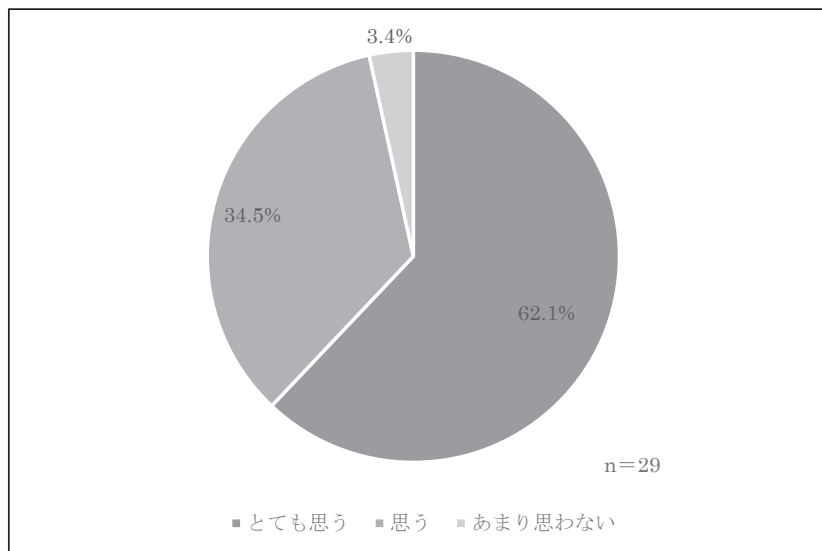


図6 学んだことを活かせるか

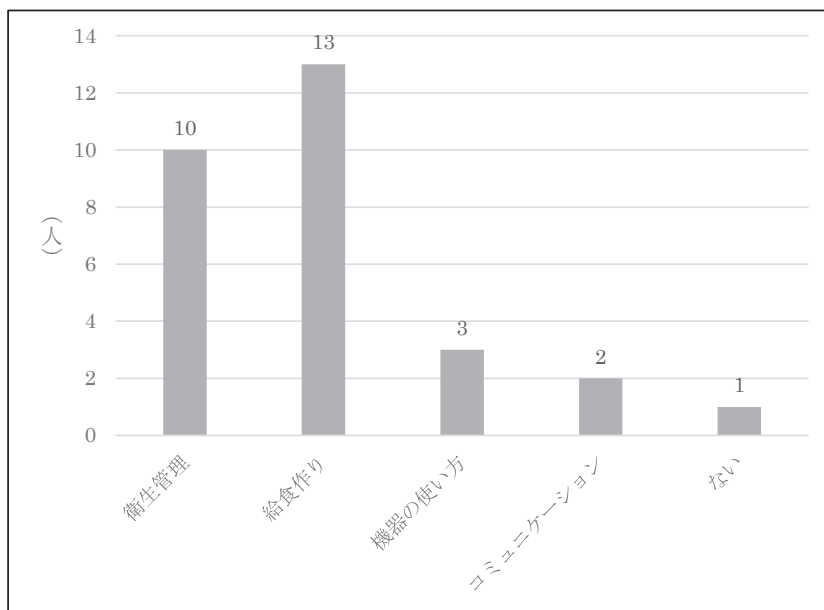


図7 活かせる内容 (複数回答)

IV. まとめ

1年次に給食管理実習Ⅰで作ってみたいものはあるかという設問に対し90%以上が「思った」と回答している。また、実習に対して「少し不安」と感じていた者が44.8%であり³⁾、今回の調査では全員が「難しい」と感じていた。不安感と難しさが合わさった状態で学生たちは実習に臨んでいたようである。印象に残っている料理についても、2年次の方が印象に残るよう感じられたが、1年次の方が2年生の調理した給食の印象が強いようであった。実習の難易度調査の先行研究⁴⁾においては、実習内容別に栄養学的専門知識、調理体験、食材知識、計算能力が難しい作業と考察されており、単に「難しい」ではなく本学においても詳細に把握し、対応すべきであると思われた。また、意識変化の先行研究⁵⁾では、2年次にコミュニケーション力の実践力がついたとの報告があり、本学においても1年次に学びたい項目に挙がっている。比較はできていないが、2年次においても身につける必要があると考えている者が多かった。

学べたことについては、栄養学教育コアカリの3-6)給食の生産管理、学修目標⑤の「業務用調理機器を使用して給食の生産・提供ができる」が達成できたものと考えられる。特に衛生管理については、給食管理実習Ⅰ(学内)と給食管理実習Ⅱ(学外)の時期が重なり、学内で学んだことが学外実習で確認できたということで、衛生管理の重要性は習得できたようである。

自由記述には、「大変であったが、実りある実習だった」、「周囲に配慮して調理することは難しいと感じ、コミュニケーションを大切にしたい」、「栄養士として必要な知識と技術を学べた」、「みんなが一丸となれたことがよかった」と達成感を感じられる意見が多かった。

給食管理実習 I は、学生自身が献立作成、食材管理、衛生管理、調理、提供と給食の運営を行う。仲間と協力しあい実践的に給食づくりを行えるよい機会と考えている。学生たちが、達成感に満ちた実習が行えるように授業内容の構築に努めていきたい。

文献

- 1) 逸見幾代・平林真弓編 (2020) 『改訂給食の運営-栄養管理・経営管理-』建帛社, 59-83.
- 2) 鈴木道子・武見ゆかり・小松龍史 他 (2018) 「管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム」, 特定非営利活動法人日本栄養改善学会.
- 3) 有尾正子 (2023) 「給食管理実習における学習意欲向上の検討」『愛知文教女子短期大学研究紀要』44, 95-104.
- 4) 古田華菜子・土岐田佳子・韓 順子 (2014) 「給食経営管理実習における学生の難易度調査」『駒沢女子大学研究紀要』21, 315-324.
- 5) 松本絵美 (2019) 「給食管理実習に対する学生の意識とその変化」『岩手県立盛岡短期大学部研究論文集』21, 41-44.

研究ノート

生徒指導と教育相談
—生徒指導提要と学校現場での教育相談的取組—

加藤 幸弘*

Student Guidance and School Counseling: Government's Student Guidance Guideline
and Counseling-based Approaches in Schools

Yukihiro KATO

Abstract

Japan's Ministry of Education revised the government's Student Guidance Guideline in December 2022, advocating for development-oriented, preventive, proactive, and everyday student guidance. This means that student guidance and school counseling are on their way to overlapping. The new perspective on student guidance was initially enforced by the former guideline, with methods recommended by the knowledge of school counseling being incorporated into teaching, classroom activities, and so on. Examples include instructions based on theories such as structured group encounter, assertiveness training, anger management, and Adlerian psychology. However, the new view of student guidance is far from widespread in schools, and its progress has been so gradual.

要旨

文部科学省は令和 4(2022)年 12 月、生徒指導提要を改定し、発達支持的で予防的・先行的・常態的な生徒指導が唱えられて、生徒指導と教育相談とは大きく重なる方向へと踏み出した。もとより、改訂前の旧生徒指導提要より生徒指導観の転換が図られ、教育相談の知見を活かした手法が先行的に授業やホームルーム活動などに取り入れられてきている。その事例としては、構成的グループエンカウンター、アサーショントレーニング、アンガーマネジメント、アドラー心理学を取り入れた指導があげられる。しかし、新しい生徒指導観の学校現場への定着までは遠く、その歩みは漸進的である。

Keywords : school counseling, student guidance, Student Guidance Guideline,
development-oriented student guidance

キーワード : 教育相談、生徒指導、生徒指導提要、発達支持的生徒指導

* 愛知文教女子短期大学 非常勤講師

I. はじめに

文部科学省は、令和4(2022)年12月、生徒指導提要¹⁾を改訂した。生徒指導提要は、小学校から高等学校までの生徒指導の理論・考え方や実際の指導方法などを網羅的にまとめ、教職員間や学校間で共通理解を図ることで、現場での生徒指導を組織的・体系的に進められるようまとめられた、学校・教職員向けの生徒指導の基本書である。平成22(2010)年に初めて作成されたが、いじめ防止対策推進法の成立や生徒指導上の課題の深刻化等を踏まえ、基本的な考え方や取組の方向性等を再整理し、今回、12年ぶりに改訂され公表された。

従前から、生徒指導は、一般的に、児童生徒の不適切な行動に着目し、体罰以外の懲戒や説諭などを用いることにより、誤った人間性を矯正するものとして捉えられてきた。一方、教育相談は、一般的に、児童生徒やその保護者に受容的・共感的に寄り沿いつつ、限定的な助言等により自己理解を促し、課題解決や成長を支援するものと捉えられてきた。このため、教育相談と生徒指導とは、大きく異なる手法や対応方法と受け取られてきている。

今回の生徒指導提要の改訂により、生徒指導と教育相談との間の垣根は、従前よりも一層取り払われた。いわゆる問題事案が起こってから事後対応的な生徒指導から、予防的・先行的・常態的で発達支持に重きを置いた生徒指導への転換が図られ、教育相談で用いられてきた手法や対応が積極的に取り入れられている。月刊教育相談編集部²⁾は教育相談と生徒指導との新しい関係について、もはや教育相談は生徒指導から独立した教育活動ではなく、生徒指導の一環として位置づけられるものであり、その中心的役割を担うものとなったとしている。教育相談と生徒指導は、大きく重なる方向へと向かいはじめたと見えよう。

しかしながら、このような生徒指導観の転換が学校現場の多くの教職員に理解・共有され、実際にそのような転換が進みつつあるのかどうかには、疑問が持たれる。

この研究は、すでに高等学校を卒業した短期大学生と現在の高校生について、生徒指導と教育相談をどのように捉えているか、どの程度重なるものと感じているかを調査し、両者を比較することで、教育相談と生徒指導が子どもたちにどう理解され、ひいては生徒指導観の転換が現実には学校現場でどの程度図られつつあるかを明らかにすることを目的とする。

II. 経緯

1. 旧生徒指導提要(平成22(2010)年)における生徒指導観の転換

生徒指導観の転換は、すでに、平成22(2010)年発刊の生徒指導提要(以下、旧生徒指導提要)³⁾から図られてきた。ここでは、全8章240ページのうち、一つの章37ページを教育相談にあて、教育相談を生徒指導の中の一つの分野として位置付けた。そして、その中で、ソーシャルスキルトレーニング、アサーショントレーニング(自己主張訓練)、アンガーマネジメントなどを取り上げ、今回の改訂による予防的・先行的・常態的な取組のいわば先駆として、これらの導入を図った。

これらのうち、ソーシャルスキルトレーニングについては、学校現場において、生徒指

導の中の教育相談的手法というよりも、むしろ、特別支援教育の中で発達に偏りがある児童生徒への支援方法として導入が図られ、定着しつつある。

また、第1章の冒頭においては、生徒指導の意義として、児童生徒が自らの「自己指導能力」を高めることを掲げた。ここにはすでに、教師が児童生徒を導き矯正するという生徒指導観から、児童生徒自身が自ら成長しようとする働きを重視し、それを支援するという生徒指導観へと転換が図られている。

しかしながら、こうした生徒指導観の転換は、旧生徒指導提要が用いられた平成22(2010)年から令和4(2022)年の間、学校現場において、限定的にしか浸透しなかったと思われる。その結果、児童生徒の間では、現在に至るまで、生徒指導とは問題事案が起こってから事後対応的に行われるもので、受容的・共感的な教育相談とは別のものという認識が生き続けていると考えられる。

2. 改訂版生徒指導提要（令和4(2022)年12月）における生徒指導観の転換

令和4(2022)年12月に発刊された改訂版の生徒指導提要（以下、改訂版生徒指導提要）では、生徒指導の定義と目的を、以下のようにした。

生徒指導の定義

生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである。なお、生徒指導上の課題に対応するために、必要に応じて指導や援助を行う。

生徒指導の目的

生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。

ここにおいて、生徒指導は、児童生徒自身の自発的・主体的な発達や成長による自己実現を支えるため、児童生徒の中にあるよさや可能性の伸張と、社会的資質・能力の発達を支えるものであると明示された。すなわち、従前からの一般的な理解である矯正的な指導としての生徒指導から決別することをはっきりと宣言した。「発達支持的生徒指導」が改訂版生徒指導提要のキーワードと言われる所以である。

また、従前からの事後対応的な生徒指導を一つの軸として踏まえながらも、もう一つの軸として、問題や課題が深刻化する前の予防や早期発見を重視するとともに、全ての児童生徒の発達を支える常態的・先行的（プロアクティブ）な生徒指導を打ち出している。

その具体的な展開方法として、教科指導、道徳、総合的な学習の時間（高等学校では総合的な探究の時間）、ホームルーム活動、学校行事などの中で、児童生徒が自己存在感を感受し、共感的な人間関係を育み、自己決定の機会を得ることを積極的につくりだすことが重要であることを示している。そして、そのための学校の組織体制として、危機管理体制を整えるとともに、生徒指導と教育相談とが一体となったチーム支援を提唱している。具体的には、生徒指導主事と教育相談コーディネーターなどが主導しながら、スクールカ

ウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどが参加する体制の中で、上記の推進や、必要に応じてアセスメントに基づくケース会議を開催することなどが推奨されている。すなわち、生徒指導と教育相談との一体化や重複化が提唱されている。

3. 教育相談の知見を活かした取組の先行事例

教育相談ないしはスクールカウンセリングの理論や技法を教科指導、道徳、総合的な学習の時間（高等学校では総合的な探究の時間）、ホームルーム活動、学校行事などに活用する取組は、旧生徒指導提要在「自己指導能力」を打ち出したり、改訂版生徒指導提要在が発達支持的で先行的・常態的な生徒指導を打ち出したりすることと平行して、あるいはそれ以前から、主として学校現場の教職員が自主的・主体的に教育相談などの理論や技法を学ぶことにより、先行的に実践されてきた。

(1) 構成的グループエンカウンター

構成的グループエンカウンター⁴⁾は、各種の課題（エクササイズ）を遂行しながら心とこころのふれあいを深め自己の成長を図ろうとするグループ体験で、課題や役割がない非構成的グループと比較してより短時間にリレーションを高められるものとして、職場や教育現場への応用が期待される心理療法の手法である。

浦山ら⁵⁾は、総合的な学習の時間や道徳の中に構成的グループエンカウターの活動を位置づけ、合唱コンクールに関連する取組を学年合同で行った実践と、活動前後の子どもたちの学級満足度の変化をQ-Uアンケートにより測定した。具体的には、中学1年生の合唱コンクールに向けた取組の中で、グループごとに、ボイスパーカッションと共同コーラージュ制作の活動を行った。ボイスパーカッションでは、合唱練習開始前の5分間程度で、1つのリズムパターンを体を使ったカノン（輪唱）形式で表現する活動を行った。共同コーラージュ制作では、グループごとに決めたテーマに沿いながら、子どもたちが事前に準備した切り抜きなどを持ち寄り、それを一人ひとつ以上用い協力して作品をつくる活動を行い、完成後に感想の交流を行った。これらにより、合唱コンクールへの子どもたちの志気を高めるとともに、学級としてのまとまりが高まることが目指された。

皆川⁶⁾は、小学校における俳句教育の中に構成的グループエンカウターの手法を取り入れて実践した。10分程度の朝の会の中で定期的に俳句作りを行い、互いの作品の鑑賞を四人一組でワークシートを用いながら行った。具体的には、俳句に込めた気持ちを紹介し合い、質問し合い、感想を書き合って共有することで、適度に自己主張を行い、互いに認め合い支え合う人間関係の育成を目指した。

(2) アサーショントレーニング（自己主張訓練）

アサーショントレーニング⁷⁾とは、対人不安や恐怖があり、自己否定的な認知のために自己主張できない人や、逆に自己主張が強すぎて相手を押さえ込んでしまうような言動をする人に、自分も相手も大切に自己表現、対人関係の持ち方を訓練する技法である。

北村ら⁸⁾は、小学6年生の特別活動において、全3時間を用い、小学生に宿題は必要かどうかという議題について、4人グループで話し合う活動を行った。その中で、気持ちよく話し合いをするための態度として「お互いの気持ちを大切に表現する態度（アサーション）」などを示したうえで、アサーティブな自己表現を「さわやかさん」、非主張的な

自己表現を「おどおどさん」、攻撃的自己表現を「いばりやさん」として、子どもたちの代表 3 人による役割演技から子どもたちが 3 つのタイプについて考え、「さわやかさん」になってみて実際に話し合う活動に取り組んだ。

岸田ら⁹⁾は、中学 1 年生を対象に、心の状態と自己主張の関係について、「オッシー（私はいいいけどあなたはダメ）」「ヒッキー（あなたはいいいけど私はダメ、または私もあなたもダメ）」「ハッキリン（私もあなたもイイ）」のクセ（ユガミン）を指定し、生徒が自己の発するメッセージのクセを見つめたり、アサーティブな表現の練習をしたりするアサーション授業をホームルーム活動の中で実施した。2 時間のアサーション授業の後に生徒対象のアンケート調査を行い、その効果などを検証した。

（3）アンガーマネジメント

アンガーマネジメントは、怒りの感情をコントロールする手法で、心理教育をベースにビジネスや矯正教育、医学などの分野に応用が広がっている。

中内¹⁰⁾は、中学 1 年生を対象に、さまざまな感情を顔の表情として表した「こころちゃん」を用いたワークシート、および、怒りの感情を「こころちゃん」と温度計とを組み合わすことで表したワークシートなどを用い、4 回の授業でアンガーマネジメントの教材化を試みた。具体的には、①「私の気持ち」、②「怒りについて」、③「怒りのしずめ方」、④「気持ちを伝えよう」をテーマに、グループワークを用いながら、怒りを自らコントロールし、意見を適切な方法で伝えられる力を養うことを試みた。授業前、授業直後、授業 1 ヶ月後に生徒対象アンケートを行うとともに、実施クラスのクラス担任からの聞き取りを行い、成果の検証を行った。

滋賀県総合教育センター¹¹⁾は、主に中学生を対象に、いじめや暴力の未然防止を目的に、準備されたワークシートや説明資料を用いながら、ホームルーム活動等の中で展開する授業計画案を整え、学校に提供した。その具体的な展開としては、次の 3 つの取組が示された。①ワークシートに示された中学生が遭遇しやすい 6 つの場面において現れやすい感情を生徒たちが探し、その中で怒りにあたるものに焦点をあてて、怒りを感じたときの心と体の変化に気づくことを促す。②怒りが爆発しそうなときに出来る対処として、ア) 自己会話、イ) 深呼吸、ウ) 心地よいイメージ、エ) その場から離れる、オ) カウントダウン、カ) 「わたしはメッセージ」を示し、ペアワークでロールプレイをして、生徒自身が自分に合う方法を見つける。③応援しているスポーツ選手に対してインターネット上で流れる悪口を取り上げた道徳用教材「言葉の向こうに」を用い、ワークシートを用いたグループワークにより、自分と異なる立場の人の存在に気づき、異なる考え方や意見を尊重することの大切さに気づく。こうした取組にあたっては、事前・事後調査（アセスメント）を行うことで効果測定や改善に向けること、スクールカウンセラーと連携しつつ行うことが推奨されている。

（4）アドラー心理学

アドラー心理学¹²⁾は、アルフレッド・アドラー（1870-1937）が創始し、その後継者たちが発展させた心理学の理論と治療技法の体系で、その応用分野として学校教育や親の心理教育に実践が広がっている。カウンセリングや心理教育を通じてクライアントや人々が正しい価値観を身につけることを目指すため、学校教育への応用においては、個別支援のみならず、クラス運営や勇気づけ合う集団づくりに資する方法論を提示するため、教師た

ちの中に、これを身につけ実践しようとする者が少なくない。

滝口¹³⁾は、担任の先生を殴る蹴る、授業中に教室から出て校舎裏でタバコを吸うなどの不適切な行動を繰り返す中学2年生の女子生徒を対象に、この子どもの短所の中にある適切な部分を発見し、それをクラスのために役立てることを徹底して考え、働きかけた。そして、この子どもが生育歴の中で、「大人たちの言うとおりに利口になったら負け、大人たちの言うとおりにしなかったら勝ち」という誤った信念を育んだと見立て、大人の価値観を押しつけず、子ども自身が自分の信じる生きる道を選び、大人はそれを応援するという働きかけを続けたところ、この子どもが合唱祭でピアノ伴奏者となり、演奏でクラスに貢献し、賞を受けたことを他の子どもたちとともに大喜びするに至った過程¹⁴⁾を報告した。

下西¹⁵⁾は、小学2年生のクラスづくりで、子どもたちにとって最も身近なコミュニティとしてのクラスを運営するのに、子どもの主体性と協同性の両方を育て、子どもたちが「私には能力がある」「人々は私の仲間だ」という適切な信念を持ち、物事に対して「これはみんなにとってどういうことだろう。みんながしあわせになるために私はなにをすればいいだろう」と考え、集団の一員として責任を持って行動できる人に育つことを目指した取組を展開した。具体的には、担任と子ども一人ひとりがつながる取組として、一日の最後に子どもたちが書く「ふりかえりジャーナル」を用いてのやりとりや、担任からクラス全員への「勇気づけカード」の手渡しなどに取り組んだ。また、子ども同士がつながる取組として、朝の会・帰りの会でのサークル対話により「いいことアンテナ」を働かした気づきを共有すること、役に立つ喜びを実感するための「会社活動」などに取り組んだ。

以上のような教育相談的手法は、予防的・先行的・常態的で発達支持に重きを置いた指導として、学校現場で実践されてきた。しかし、こうした指導の展開例は限定的であるとともに、これらは生徒指導とは一線を画した指導方法として、現場の教師には受けとめられてきた。したがって、児童生徒も、生徒指導と教育相談とは別のもので、または、重なりが薄いものとして受けとめられてきており、そのことは旧生徒指導提要在が発刊されてから10年以上、改訂版生徒指導提要在が発刊されてから1年となる今日においても、大きく変化していないと考えられる。

Ⅲ. 実態調査

上記を踏まえ、旧生徒指導提要在が用いられていた時期に小学校・中学校・高等学校の児童生徒として学校生活を送った現短期大学2年生と、中学3年生の段階で改訂版生徒指導提要在が発刊され現在学校生活を送っている高等学校1年生を対象に、教育相談のイメージ、およびこれと生徒指導の重なりをどのようにとらえているか、開いた質問を用いた質問紙法（自由記述法）による調査を行った。短期大学生26人、高等学校生44人が回答した。

短期大学生は、幼児教育学科1部2年生を対象に「教育相談」の第1回授業の冒頭に行った。高等学校生は、休み時間に説明を行い実施した。いずれも、形式は質問紙法であるが、学校が授業等に用いている電子アンケートシステムを用い、回答者の個人が特定されないことを明示のうえ、電磁的に行った。なお、当該短期大学生には当該高等学校卒業

生が散見されることから、両者に学力および学校への適応度などに大きな食い違いはないことが推定できる。

1. 教育相談のイメージ

両群の対象者に、教育相談にかかるイメージを下記の質問により尋ね、回答をテキストマイニング用ツール KHcoder (<https://khcoder.net/>) を用いて分析した。

質問1)「教育相談」とは、どんなモノやコトだと思いますか？

(1) 短期大学生

表1 出現回数が多い語（短期大学生）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
相談	40	勉強	12
する	34	話す	12
生徒	34	関係	10
学校	24	進路	10
生活	24	サポート	8
先生	24	思う	8
不安	22	人間	8
悩み	18	話	8
聞く	18	ない	6
教育	14	児童	6
困る	14	授業	6
学習	12	対	6
子ども	12		

(2) 高等学校生

表2 出現回数が多い語（高等学校生）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
相談	23	できる	6
する	20	自分	5
学校	11	話す	5
進路	11	ない	4
生徒	10	学習	4
先生	10	場	4
悩み	10	勉強	4
生活	9	話し合う	4
教育	8		

2. 生徒指導と教育相談の重なりにかかる理解

両群の対象者に、生徒指導と教育相談の重なりをパーセンテージとしてどうとらえるか下記の質問により尋ね、対応のないt検定を行った。

質問 2) 「教育相談」と「生徒指導」はどの程度重なると思いますか？ あなたの考える重なり度を「0%」から「100%」の間の数値で記してください。

両群の回答の平均値は、短期大学生が32.8% (標準偏差 14.5)、高等学校生が36.2% (標準偏差 22.8) であり、度数分布は以下のようであった。

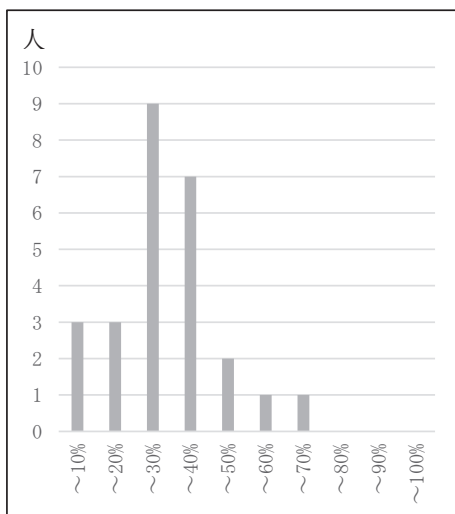


図1 度数 (短期大学生)

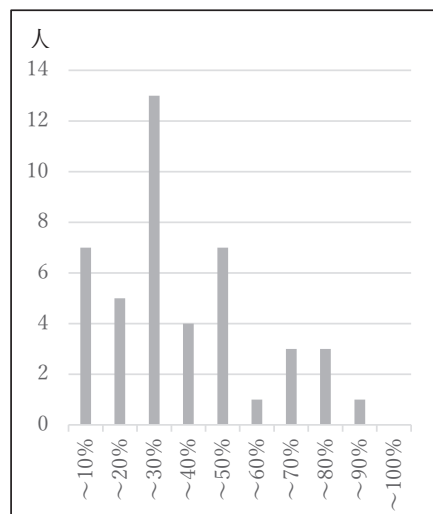


図2 度数 (高等学校生)

両群の回答について対応のないt検定を行った結果は、 $t(68) = -0.757, p = .45$ であった。

IV. 分析と考察

教育相談のイメージにかかる記述のテキストマイニングにおいては、短期大学生・高等学校生ともに「相談」「生徒」「学校」「悩み」「話す」などの語が多く出現し、相談室などでの1対1のカウンセリング等が強くイメージされていることが示唆された。あわせて、授業などでの取組を想起させる「学習」「勉強」などの語も出現しており、教育相談的手法が授業等の中で活用されていることが理解されつつあることもうかがい知れた。他方で、改訂版生徒指導提要在掲げる生徒指導の定義や目的に見られる「成長」「発達」「資質」「能力」「自己実現」などの語は見られなかった。

生徒指導と教育相談の重なりにかかるイメージを問う質問に対する回答の平均値は、短期大学生・高等学校生ともに30%台であり、両群に有意な差は見いだされなかった。短期大学生・高等学校生ともに、両者の間に一定の重なりはあるものの基本的には別のものと

理解していることが示唆される結果であり、年齢差が5年有ること、高等学校生は改訂版生徒指導提要に基づく生徒指導を1年程度経験していることによる差は見いだされなかった。ただし、高等学校生の方が回答に比較的大きな分散が見られ、個人的な経験等によっては、平均から遠い理解をしている生徒が一部に居る可能性が見いだされた。

いずれにしても、旧生徒指導提要の発刊から13年が経過した現在においても、生徒指導提要が目指している教育相談的理念や手法を取り入れた生徒指導が学校現場に定着するまでの道程は、まだまだ遠く、歩みもたいへん漸進的だと言わざるをえない。

教育行政においては、発達支持的で予防的・先行的・常態的な生徒指導が学校現場に定着するために、改訂版生徒指導提要を学校現場に配布し周知するのみならず、具体的な取組方法などを教師たちに能動的に伝え、啓発することがたいへん重要と思量される。学校現場においても、生徒指導観の転換をより実践的に理解し、教育相談の視点や手法を取り入れた生徒指導を具体的な取組として展開していくことが期待されている。

文献

- 1) 文部科学省 (2022) 『生徒指導提要』
(https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf)
- 2) 月刊教育相談編集部 (2023) 『月刊教育相談第 37 巻 (1) 2023 年 1 月』 学校教育相談研究所 編 31
- 3) 文部科学省 (2010) 『生徒指導提要』
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm)
- 4) 國分康孝編 (1993) 『カウンセリング辞典』 誠信書房, 174-175
- 5) 浦山由美子, 内野成美, 笹山龍太郎 (2015) 「小学校から中学校への学校移行に伴う不適応行動軽減への取組—中学入学後の生徒とのかかわりを通して—」 『長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』 第 13 号, 179-189
- 6) 皆川直凡 (2020) 「小学校における知性と感性を結ぶ俳句教育プログラムの提案—互いを認め合い支え合う学級づくりを目指して—」 『鳴門教育大学学校教育研究紀要』 第 34 号, 99-104
- 7) 國分康孝編 (1993) 『カウンセリング辞典』 誠信書房, 225
- 8) 北村麻衣, 榎原範久 (2021) 「小学校特別活動における批判的思考態度の表出判断を促すアサーショントレーニングを用いた授業の開発と実践」 『上越教育大学研究紀要』 第 41 巻第 1 号 69-79
- 9) 岸田佳子・中尾尊洋・竹田伸也 (2022) 「自分を大切にしている意識とアサーション授業の効果との関連性」 『鳥取大学附属中学校研究紀要』 第 53 巻 125-130
- 10) 中内庸子 (2007) 「中学校におけるアンガーマネジメントについて—感情と向き合い、客観的に考え、適切に表現するために—」
(https://www.kochinet.ed.jp/center/research_paper/h19_center_kenshusei/08_anger.pdf)
- 11) 滋賀県総合教育センター (2014) 「アンガーマネジメント・プログラム スタートブック」
(<https://www.shiga-ec.ed.jp/www/contents/1438582681238/files/AngaManeJimentPrgSta>)

rtBook.pdf 2023. 11. 22)

- 1 2) 國分康孝編 (1993) 『カウンセリング辞典』 誠信書房, 10
- 1 3) 滝口純二(1997) 「「サティアン」という女の子」『アドレリアン』 第 11 卷 2 号 154-157
- 1 4) 滝口純二(1998) 「『もののけ姫』と 3 年 2 組—サティアンがクラスのために生きた—」
『アドレリアン』 第 12 卷 2 号 204-208
- 1 5) 下西陽子(2019) 「小学校におけるアドラー心理学をベースとする学級経営—「自分」と「みんな」両方を大切に育てる子どもを育てる実践」『アドレリアン』 第 32 卷 3 号 229-239

実践報告

キャリアチャレンジ —学生の夢を叶えるための新たな取り組み—

小川 美樹* 朴 賢晶* 渡辺 香織* 原 真由美* 土井 拓郎*

Career Challenges: New initiatives to make students' dreams come true

Miki Ogawa, Hyun-jung Park, Kaori Watanabe, Mayumi Hara, Takuro Doi

Abstract

Regarding the "Career Challenge I・II・III" initiative that started in 2023, we have compiled the content of the program as well as the impressions and reflections of students and faculty members as a practical report based on Form responses, divided into the first and second semesters.

要旨

令和5年度よりスタートした「キャリアチャレンジⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の取り組みについて、前期、後期に分けて、プログラムの内容に加え、学生・教職員の感想・振り返りを Forms 回答から実践報告としてまとめた。

Keywords : career support, student support, basic skills, self-analysis

キーワード : キャリア支援、学生支援、基礎力、自己分析

I. はじめに

令和5年度より全学生を対象に「キャリアチャレンジⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の科目が開講された。昨年度までは、アドバイザー制度があり、アドバイザーが主となり学生と関わり、学生生活や就職相談などに対応し、「文教アワー」で学科専攻ごとに取り組んできたものを、全学生の学生支援・キャリア支援を行う取り組みとして、全教職員が学生一人ひとりを思いサポートしていくプログラムとしてスタートした。

II. キャリアチャレンジの取り組み

この取り組みは、3つのプログラムと公務員対策講座で成り立っている。

1. 学力・技術・基礎力の向上、公務員講座

1年、3部2年はテキスト学習を進めながら、7回のチェックテスト、入学時、前期終了

* 愛知文教女子短期大学

時、後期終了時にSPIテストを行う。そして、点数を記録し、学生の取り組み状況を把握する。

技術指導では、幼児教育は保育実技やピアノ、食物栄養は調理技術、生活文化は秘書やパソコンスキルの向上を各学科専攻の教員が担当して指導を行う。

検定対策では、それぞれの目指す検定合格に向けて、学科専攻の教員が中心となり、模擬試験や対策指導を行う。また、保育・栄養・ビジネスに関する漢字など実務につながる漢字を学ぶ。

2. 学生支援

学生一人ひとりと教職員がキャリア面談を行う。「面談シート」を活用し、学生生活のことや人間関係、就職活動、健康状態のことや困ったことがないか聴き取る。聴き取った内容は、「修学ポートフォリオ」に入力し、情報を共有する。

毎回のFormsで、キャリア面談の希望を尋ね、面談希望の学生には、キャリア支援センターから連絡をし、面談の日程を決め、面談を行う。

学科専攻ごとに、1、2、3年の交流会を持ち、学生生活や実習、試験のことなど学生同士が交流できる機会を持つ。

3. キャリア支援

それぞれの時期に合わせたガイダンスを行い、学生の意識を高め、必要な情報を提供しキャリアサポートを行う。

学内での幼稚園・保育園、委託給食会社、企業、公務員などの説明会を行い、職業について知り、選択肢を広げる。

大手就職支援会社に依頼をし、求人サイトの登録・活用方法、小論文対策講座、面接対策講座を行う。就職活動に向けてのメイクアップ講座やスーツの着こなし講座なども取り入れる。

自己分析、履歴書作成、模擬面接、グループワークなどを行い、就職活動がスタートできるよう働きかけていく。

就職活動報告会や公務員合格者の報告会などもキャリア支援として行う。

また、卒学年に向けては、内定をもらい4月から社会人になる準備として、ビジネスマナー、美文字をプログラムに入れる。

社会人として知っておいてほしい知識として、労働法セミナーや保険・ライフプランについての講座も外部企業に依頼をする。

4. 公務員試験対策講座

前期は、公務員試験受験者のエントリーシート添削、面接対策を行う。今年度より、後期は公務員講座を外部業者に委託し、ガイダンスとキャリアチャレンジ15回のうち7回を教養科目に充てる。

Ⅲ. シラバス

各学科、専攻、学年ごとにキャリアチャレンジⅠ・Ⅱ・Ⅲのシラバスを作成する。

講義科目名称： キャリアチャレンジⅠ		授業コード：	
担当教員： 小川 美樹			
開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
通年	1	1	選択
生活文化学科	食物栄養専攻	10_1K1	演習
添付ファイル			
授業概要	限定された時期だけに「点」で行う就職支援から、長期的かつ統合的なキャリア教育を行う方針に転換し、キャリア教育・資格取得支援・就職支援の三本柱による「キャリアチャレンジ」の展開を通して、社会人基礎力や実践力を身につけることを目標とする。さらに、就業を開始した以降も継続的に学ぶ姿勢、行動しながら学ぶ姿勢、自らの生き方や仕事生活について考えながら主体的・自律的に行動し続ける姿勢を身につける。		
学習成果	[K] 対人関係力、社会性、人間性、思いやりを育み、実践力、専門性を習得することができる。		
DPとの関連	食DP1：5 食DP2：10 食DP3：20 食DP4：15 食DP5：25 食DP6：25		
授業計画	第1回 オリエンテーション キャリチャレとは SPIテスト 第2回 キャリア面談 テキスト学習 第3回 キャリチャレ① チェックテスト 第4回 キャリチャレ② チェックテスト 第5回 キャリチャレ③ チェックテスト 第6回 就職活動報告会 第7回 就職活動の進め方 求人サイト登録 <マイナビ> 第8回 学内企業説明会 (委託給食会社) 第9回 自己分析 「人生すごろく 金の糸」 第10回 面接対策 第11回 書類作成 (送付状・札状・封筒・履歴書) 第12回 リクルートスーツの正しい着こなし <洋服の青山> 第13回 模擬面接 第14回 就職試験・公務員試験ガイダンス 第15回 進路調査カード 履歴書作成		
授業方法	講義とアクティブラーニングを組み合わせ、演習形式で進める。学科、学部、学年を問わず合同で行うこともある。アクティブラーニング導入。		
成績評価・フィードバック方法	レポート(70%) ドリル(30%) 提出された課題・レポートからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。		
教科書	就職試験サポートドリル 実務教育出版		
参考書			
準備学習(予習・復習)	各回のテーマに沿って内容を理解したり、各自の役割について確認しておく。パフォーマンスを伴う場合は、十分に練習しておく。 (履修案内の「単位と授業時間 (P1)」、「準備学習(予習・復習) (P2)」を参照)		
備考			

図1 シラバス キャリアチャレンジⅠ (生活文化学科食物栄養専攻1年)

IV. 教職員の情報の共有

1. 「R5 キャリチャレ」(Teams)

「R5 キャリチャレ」グループを活用し、情報を共有する。

(1) 投稿

出席確認のパスワード、プログラム、Forms 回答を PDF ファイルで投稿。特に変更箇所、加筆・修正点などはテキストで投稿し、情報の共有をする。



図2 「R5 キャリチャレ」グループ 投稿画面

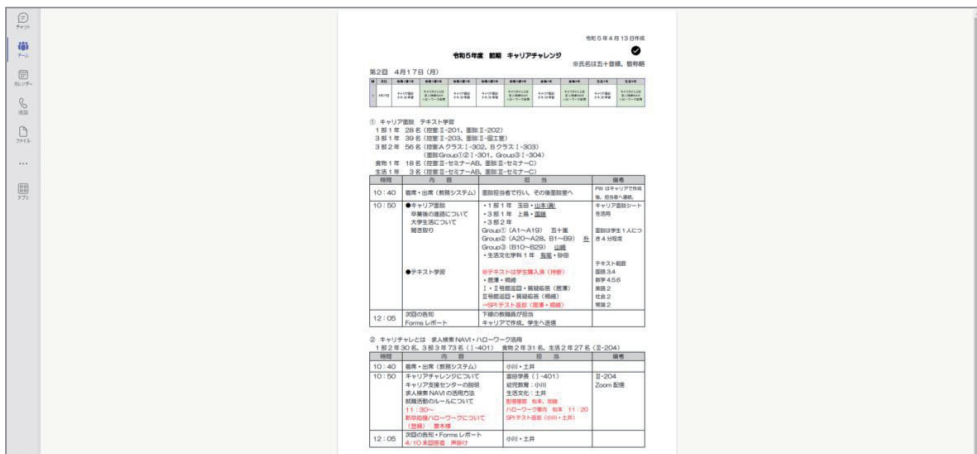


図3 毎回のプログラム (PDF)

(2) ファイル

「チェックテスト点数入力」の Excel シートに担当者が点数入力をする。他、チェックテストの解答、Q&A、Forms 回答のまとめなどを保存する。

2. キャリア面談

キャリア面談担当者は、学生から提出された「面談シート」を活用して面談を行い、面

談内容をシートに記入し、ポータルサイト「修学ポートフォリオ」に入力後、キャリア支援センターに提出する。特に気になる点は、キャリア支援、学生支援、実習支援に報告する。

キャリア面談前には、担当学生の修学ポートフォリオを確認し、面談を行う。

V. 前期キャリアチャレンジ

1. プログラム

令和5年度 前期 月曜2限目『キャリアチャレンジ』プログラム										
※公務員…公務員試験受験予定者 内…内定者 未…未内定者										
日	月日	幼職1部1年	幼職1部2年	幼職2部1年	幼職2部2年	幼職3部3年	食物1年	食物2年	生活1年	生活2年
1	4月10日	オリエンテーション キャリア面談とは SPテスト	オリエンテーション キャリア面談 SPテスト	オリエンテーション キャリア面談とは SPテスト	オリエンテーション キャリア面談とは SPテスト	オリエンテーション キャリア面談 SPテスト	オリエンテーション キャリア面談とは SPテスト	オリエンテーション キャリア面談 SPテスト	オリエンテーション キャリア面談 SPテスト	オリエンテーション キャリア面談 SPテスト
2	4月17日	キャリア面談 テキスト学習	キャリア面談とは 求人検索NAVI ハローワーク活用	キャリア面談 テキスト学習	キャリア面談 テキスト学習	キャリア面談 テキスト学習	キャリア面談 テキスト学習	キャリア面談 テキスト学習	キャリア面談 テキスト学習	キャリア面談 テキスト学習
3	4月24日	キャリアチャレ① チェックテスト第2回	公務員 面接対策 他 履歴書作成	キャリアチャレ① チェックテスト第2回	キャリアチャレ① チェックテスト第2回	公務員 面接対策 他 履歴書作成	キャリアチャレ① チェックテスト第2回	校外実習説明会	キャリアチャレ① チェックテスト第2回	公務員 面接対策 他 履歴書作成
4	5月1日	A 自己分析 「人ますぐらう(他)の身」 B: キャリチャレ② チェックテスト第3回	公務員 面接対策 他 履歴書作成	キャリアチャレ② チェックテスト第3回	A 自己分析 「人ますぐらう(他)の身」 B: キャリチャレ② チェックテスト第3回	公務員 面接対策 他 履歴書作成	キャリアチャレ② チェックテスト第3回	内: キャリチャレ① チェックテスト第3回 未: 履歴書作成	キャリアチャレ② チェックテスト第3回	公務員 面接対策 内: キャリチャレ① 未: 履歴書作成
5	5月8日	A: キャリチャレ③ チェックテスト第3回 B 自己分析 「人ますぐらう(他)の身」	園・施設見学 のマンナ講座 &書籍作成 (送付状・札状)	施設実習 説明会	A: キャリチャレ③ チェックテスト第3回 B 自己分析 「人ますぐらう(他)の身」	園・施設見学 のマンナ講座 &書籍作成 (送付状・札状)	学内企業説明会 委託給食会社	学内企業説明会	キャリアチャレ③ チェックテスト第3回	内: キャリチャレ② チェックテスト第3回 未: 履歴書作成
6	5月15日	保育実技・ ピアノ指導①	保育実習説明会	保育実習 I 説明会	保育実技・ ピアノ指導①	保育実習説明会	公務員 仕事説明会	公務員 仕事説明会	ビュティ―講座 フレッシュヤーズ (養生室) 写真撮影	公務員 仕事説明会
7	5月22日	保育実技・ ピアノ指導②	A: ビューティー講座 フレッシュヤーズ 写真撮影 B 自己分析 「人ますぐらう(他)の身」	保育実習 I 説明会	保育実技・ ピアノ指導②	A: ビューティー講座 フレッシュヤーズ 写真撮影 B 自己分析 「人ますぐらう(他)の身」	就職活動の進め方 求人サイト活用 (マイナビ)	調理技術指導①	就職活動の進め方 求人サイト活用 (マイナビ)	一般企業 学内説明会
8	5月29日	キャリアチャレ③ チェックテスト第4回	A 自己分析 「人ますぐらう(他)の身」 B: ビューティー講座 フレッシュヤーズ 写真撮影	キャリアチャレ③ チェックテスト第4回	キャリアチャレ③ チェックテスト第4回	A 自己分析 「人ますぐらう(他)の身」 B: ビューティー講座 フレッシュヤーズ 写真撮影	キャリアチャレ④ チェックテスト第5回	書籍作成 (送付状・札状、 封筒・履歴書)	キャリアチャレ④ チェックテスト第5回	書籍作成 (送付状・札状、 封筒・履歴書)
9	6月5日	自己分析 「私はこれ」	●保育実習Ⅱ	自己分析 「人ますぐらう(他)の身」	自己分析 「私はこれ」	●保育実習Ⅱ	自己分析 「人ますぐらう(他)の身」	校外実習	自己分析 「人ますぐらう(他)の身」	PGSキル指導① タイピング・確定作業
10	6月12日	公務員の魅力 +試験体験	公務員の魅力 +試験体験	公務員の魅力 +試験体験	公務員の魅力 +試験体験	公務員の魅力 +試験体験	学内企業説明会 栄養士	学内企業説明会	公務員の魅力 +試験体験	PGSキル指導② タイピング・確定作業
11	6月18日	振り返り SPテスト	県知事私立幼稚園 学内説明会 (キャラバン)履	振り返り SPテスト	振り返り SPテスト	県知事私立幼稚園 学内説明会 (キャラバン)履	振り返り SPテスト	自己分析 「人ますぐらう(他)の身」	振り返り SPテスト	自己分析 「人ますぐらう(他)の身」
12	6月26日						調理技術指導①	調理技術指導②	七夕茶会 準備	
13	7月3日	こどもフェスタ準備					実習・就職活動報告会		七夕交流会 (特養組電飾)	
14	7月10日						インターンシップ ガイダンス (マイナビ)	チェックテスト第6回 キャリア面談①	インターンシップ ガイダンス (マイナビ)	チェックテスト第6回 キャリア面談②
15	7月24日	実習交流会	実習交流会	保育実技・ ピアノ指導①	実習交流会	実習交流会 (保育実習 I)	履歴書作成 ガイダンス (マイナビ)	SPテスト キャリア面談② 履歴書作成 面接練習	履歴書作成 ガイダンス (マイナビ)	SPテスト キャリア面談② 履歴書作成 面接練習

図4 前期キャリアチャレンジプログラム

1年生、3部2年生は、第1回オリエンテーションで「キャリアチャレンジ」についての説明、SPI テストからスタートし、チェックテストの実施、キャリア面談、自己分析、実技指導や公務員の魅力、求人サイトの活用などを取り入れる。

2年生、3部3年生はオリエンテーション、キャリア面談、SPIテストからスタートし、2回目に「キャリアチャレンジ」について説明し、求人NAVI、ハローワークの活用では新卒応援ハローワークの利用の仕方、面接対策、企業説明会、幼稚園・保育園説明会、人生すごろく『金の糸』で自己分析、ビューティ講座（大手化粧品会社のフレッシュャーズコース）等のプログラムを行う。



図5 SPI テスト



図6 公務員講座



図7 キャリア面談



図8 交流会



図9 説明会



図10 模擬面接



図 1.1 人生すごろく『金の糸』



図 1.2 メイクアップ講座

2. 振り返り

(1) Forms (毎回)

毎回のプログラム終了後にFormsでの振り返りを行う。学んだこと、感想や希望などを書き込む。

表 1 Forms 振り返り

<p>キャリアチャレンジ⑭ 2023. 7. 10</p> <p>1. あなたの学科・専攻をチェックしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/>生活文化学科 食物栄養 <input type="radio"/>生活文化学科 生活文化 <input type="radio"/>幼児教育学科 第1部 <input type="radio"/>幼児教育学科 第3部 <p>2. 学生番号と氏名を入力してください。</p> <p>3. 本日の感想を書いてください。</p> <p>4. 質問があれば書いてください。</p>
--

学生の感想をまとめ、Teams「R5 キャリチャレ」に投稿し、教職員間で情報を共有する。

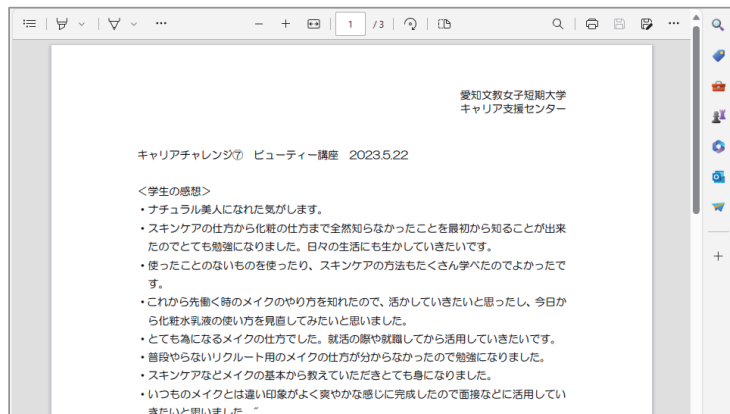


図 1.3 学生の感想

(2) Forms (前期プログラムを終えて)

前期プログラムを終了後、学科、専攻、学年ごとに、それぞれのプログラムについて Forms でアンケートを実施し、質問項目は2~3項目とする。

表2 Forms 前期プログラムを終えて (学生アンケート)

<p>2. SPI テスト、チェックテスト、テキスト学習について <u>あなたは就職活動や今後にどれくらい必要だと思いますか。</u></p> <p><input type="radio"/> とても必要だと思う</p> <p><input type="radio"/> 必要だと思う</p> <p><input type="radio"/> 必要だと思わない</p> <p><input type="radio"/> どちらでもない</p> <p><input type="radio"/> 参加していない</p> <p>3. SPI テスト、チェックテスト、テキスト学習について <u>あなたが感じたレベルを教えてください。</u></p> <p><input type="radio"/> とても難しい</p> <p><input type="radio"/> 難しい</p> <p><input type="radio"/> 普通</p> <p><input type="radio"/> 簡単</p> <p><input type="radio"/> 参加していない</p> <p>4. SPI テスト、チェックテスト、テキスト学習について <u>あなたは就職活動や今後に役に立つと思いますか。</u></p> <p><input type="radio"/> とても役に立つ</p> <p><input type="radio"/> 役に立つ</p> <p><input type="radio"/> 役に立たない</p> <p><input type="radio"/> わからない</p> <p><input type="radio"/> 参加していない</p> <p>~~~~~</p> <p>28. <u>前期キャリアチャレンジの感想</u>を書いてください。</p> <p>29. 皆さんの今後の就職活動に向けて、<u>キャリアチャレンジで支援して欲しいことや取り入れてほしいプログラム</u>などがありましたら書いてください。</p>

学生に送信した Forms 画面である。



図 1 4 Forms 画面

実施：令和 5 年 7 月 24 日（月）キャリアチャレンジで告知、回答

回答：生活文化学科	食物栄養専攻 1 年	17/18 名	回答率	94.4%
生活文化学科	生活文化専攻 1 年	3/3 名	回答率	100%
幼児教育学科	第 1 部 1 年	18/28 名	回答率	64.3%
幼児教育学科	第 3 部 1 年	37/39 名	回答率	94.9%
生活文化学科	食物栄養専攻 2 年	26/30 名	回答率	86.7%
生活文化学科	生活文化専攻 2 年	26/27 名	回答率	96.3%
幼児教育学科	第 1 部 2 年	24/30 名	回答率	80.0%
幼児教育学科	第 3 部 2 年	46/56 名	回答率	82.1%
幼児教育学科	第 3 部 3 年	56/75 名	回答率	74.7%
全体		253/306 名	回答率	82.7%

(3) Forms の結果

学科専攻、学年で同じプログラムのものを集計した。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
1				専1	専1	専1-1	専1-2	1 年平均	専2	専2	専1-2	専2-2	専2-2	専2-2	専2-2	3年平均	全体平均		
2	SPIチェックテスト、テキスト学習	今後必要	とても必要	58.8	33.3	38.9	37.8	42.2	15.4	44	13	33.3	26.4	25			25	31.2	
3		必要	必要だと思わない	35.3	33.3	55.6	54.1	44.6	69.2	44	65.2	60	59.6	51.9			51.9	52.0	83.2
4		どちらでもない	とても難しい	0	0	5.6	2.7	2.1	3.8	8	8.7	2.2	5.7	7.7			7.7	5.2	
5		レベル	とても難しい	5.9	33.3	0	5.4	11.2	11.5	4	13	4.4	8.2	15.4			15.4	11.6	
6			とても難しい	0	0	11.8	2.7	3.6	23.1	20	13	13.3	17.4	26.9			26.9	16.0	
7			難しい	76.5	0	41.2	43.2	40.2	57.7	64	43.5	51.1	54.1	46.2			46.2	48.8	
8			普通	23.5	100	35.3	54.1	53.2	19.2	16	43.5	33.3	28.0	25			25	35.4	
9			簡単	0	0	11.8	0	3.0	0	0	0	2.2	0.6	1.9			1.9	1.8	
10		役に立つ	とても役に立つ	64.7	66.6	33.3	29.7	48.6	19.2	8	13	24.4	16.2	26.4			26.4	30.4	
11			役に立つ	29.4	33.3	61.1	64.9	47.2	57.7	72	56.5	57.8	61.0	43.4			43.4	50.5	80.9
12			わからない	0	0	5.6	0	1.4	7.7	4	13	2.2	6.7	5.7			5.7	4.6	
13			わからない	5.9	0	0	5.4	2.8	15.4	16	17.4	15.6	16.1	24.5			24.5	14.5	
14	キャリア実践	今後必要	とても必要	58.8	66.6	33.3	62.2	55.2	29.2	34.6	23.8	42.2	32.5	58			58	48.6	
15		必要	必要だと思わない	35.3	0	66.7	29.7	32.9	66.7	57.7	66.7	48.9	60.0	38			38	43.6	92.2
16			必要だと思わない	0	0	0	0	0.0	0	0	0	0	0.0	2			2	0.7	
17			どちらでもない	5.9	33.3	0	8.1	11.8	4.2	7.7	9.5	8.9	7.6	2			2	7.1	
18		役に立つ	とても役に立つ	58.8	66.6	44.4	59.5	57.3	20.8	42.3	23.8	37.8	31.2	58.9			58.8	49.1	
19			役に立つ	35.3	33.6	55.6	32.4	39.2	66.7	53.8	61.9	51.1	58.4	37.2			37.2	44.9	94.0
20			わからない	0	0	0	0	0.0	0	0	0	0	0	1.9			1.9	0.6	
21			わからない	5.9	0	0	8.1	3.5	12.5	3.8	14.3	11.1	10.4	1.9			1.9	5.3	
22	自己分析	今後必要	必要	12.5	33.3	16.7	16.7	19.8	24	10	9.5	17.8	15.3	30.2			30.2	21.8	
23	金の糸	とても必要	とても必要	62.5	33.3	77.8	66.7	60.1	48	75	71.4	53.3	61.9	47.2			47.2	56.4	78.2
24			必要だと思わない	12.5	0	5.6	5.6	5.9	8	5	9.5	6.7	7.3	5.7			5.7	6.3	
25			どちらでもない	12.5	33.3	0	11.1	14.2	20	10	9.5	22.2	15.4	18.9			16.9	15.5	
26		レベル	とても難しい	6.3	33.3	0	0	9.9	4	4.8	4.8	0	3.4	19.2			19.2	10.8	
27			難しい	12.5	33.3	16.7	25	21.9	32	42.9	19	15.6	27.4	19.2			19.2	22.8	
28			普通	81.3	33.3	72.2	66.7	63.4	60	42.9	71.4	77.8	63.0	51.9			51.9	59.4	
29			簡単	0	0	11.1	8.3	4.9	4	9.5	4.8	6.7	6.3	9.6			9.6	6.9	

図 1 5 アンケート集計

(4) 前期まとめ (Forms の結果)

すべての項目で 70%以上が、今後とても必要・必要、とても役に立つ・役に立つと回答された。特にポイントが高かったものは、とても必要・必要の項目では、就職活動に直結する履歴書作成 (97.7%) や面接対策 (97.6%)、学内説明会 (92.8%)、キャリア面談 (92.2%) である。学生が役に立つと回答したものでは、面接対策 (97.9%)、履歴書作成 (95.1%)、学内説明会 (94.1%)、キャリア面談 (94.0%)、実技・技術指導、検定対策 (91.1%) である。

表3 前期アンケート結果

(%)

プログラム	とても必要 必要	とても役に立つ 役に立つ
SPI、チェックテスト、テキスト学習	83.2	80.9
キャリア面談	92.2	94.0
自己分析「人生すごろく『金の糸』」	78.2	76.8
他己紹介	83.6	77.5
学内説明会	92.8	94.1
公務員ガイダンス	86.3	85.3
就職ガイダンス	88.1	85.6
実技・技術指導、検定対策	86.6	91.1
交流会	87.6	88.8
履歴書作成	97.7	95.1
面接対策	97.6	97.9
ビューティー講座	74.3	88.4

前期キャリアチャレンジの感想は、良かったという感想が多く書かれており、積極的に取り組み、有意義なものであると捉えられている。学生の感想・要望の一部の抜粋である。

生活文化学科 食物栄養専攻1年

- ・就活を始めるのがこんなに早いと思ってなかったので、学校の授業のひとつとして色々なことが学べてよかったですと思います。
- ・先輩からや企業から詳しい話をたくさんしてもらってより理解が深まったり、わからないところが減ったりしてよかったです。
- ・様々な方と関わることが出来、自分の将来のことについてより現実味を持ち考えることが出来ました。
- ・就活について相談出来る場を増やして欲しい
- ・栄養士として以外の就職先の提案

生活文化学科 生活文化専攻 1年

- ・就職活動で必要で大切なことを学べてよかったです。

幼児教育学科第1部 1年

- ・公務員試験についてや面談があつてとても充実してた授業でした。今日の交流会も実習で不安なことを先輩に質問して少し不安が無くなりました。自分らしく子どもたちと接したいです。
- ・テストは難しかったし、あまり必要ないかなと思ったけど、面談はすごくよかったです。自分の今不安に思っていることなどを聞いて良かったからです。また、公務員試験のことや私立の保育園に関する話などはとても必要だと思いました。そこまで詳しく知らないことなので、そういう話をキャリアチャレンジの時にしてくれたらありがたいなと思います。
- ・テストが多かったです。毎回のテスト前に勉強をして、いい点を取ることができました。これからも努力し続けたいです。
- ・たくさんの人と関わる機会になって良かったです。
- ・公務員だけではなく、私立園、児童養護施設などさまざまな保育職について知りたいです。

幼児教育学科第3部 1年

- ・テストでは一般常識について更に学ぶことができ、人生すごろくなどでは他の学科の子と交流ができたしとても楽しかったです。
- ・他の学科の1年生と関わるのが出来、人生観が広がるきっかけになりました。先生との面談は就職について直結することはあまりなかったかもしれませんが、学業の不安などを言葉にすることで楽になることが出来ました。
- ・面接の回答に役に立つ授業をもっと詳しくやったら良いと思う。また、就職についての説明なども取り入れると今後の就職活動や人生観をひろげるきっかけになると思う。
- ・面談をもっと増やすとか雑談のような教師との絡みを増やすといいとおもう

生活文化学科 食物栄養専攻 2年

- ・就職活動が思うように進まなかったの、先生方に面談や実際に学校で企業説明を受けて就職の幅が広がったと感じた。
- ・自分の就職活動を思い出しながら、面談したり人前でアドバイスしたりする機会があり、よかった。自分のためにもなったし、それを聞く人のためになるように自分で工夫したことが難しかったが、頑張ることができた。
- ・パソコンのスキルをもっとあげたいです。
- ・来季不安が多い為しっかりと活用したいです。面談や面接練習卒業後も行ないたいです。

生活文化学科 生活文化専攻 2年

- ・就活のサポートが受けられてよかった。考えても考えても完成しないものを後回しにしてしまいがちな性格だったので、キャリアチャレで課題という形でエントリーシートや面接で聞かれる内容を考える時間があったのは良かった。
- ・先生と一対一でゆっくり面談できてよかったです。不安に思っていることもありましたが、先生の立場から言葉を頂けて少し安心しました。
- ・やって欲しい面接の対策や、就職活動の相談などがありとても助かった。

- ・キャリアチャレンジの就職活動については、1年生から始めていると余裕がもてると思いました。資格勉強の時間が欲しいです。
- ・人数が多く難しいかもしれないが、もう少し個人に寄せた内容がよかったなとも少し感じた。全体でやる講座は参考になることが多くよかった。

幼児教育学科第1部2年

- ・就職に直結することや、実習交流会で先輩に伝えることで、今までの経験や将来について考え直すことができよかったです。
- ・就職のことなど様々なことを学ぶことができ、アドバイザーがなくなり不安が大きかったですがキャリアチャレンジで様々なことを知れて良かったです。
- ・愛知県だけでなく、他県の就活でそれぞれでやるだけでなく就活の詳しい事や始める目安の時期などをもう少し知りたかった。

幼児教育学科第3部2年

- ・就職に向けての意識が高まりました。公務員のこととかをたくさん知れて良かったです。
- ・色々な学科や学年の子と交流が出来たので、とても良かったと思います。また、実習交流などがあったので自分が不安に思っていることや分からないことが聞けて良かったです。
- ・面談など親身に聞いて下さりとても良かったです。
- ・先輩との交流会は増やしてほしいです。
- ・どうやって職場を選んだらいいかが詳しく知りたい。
- ・職業適性テストや性格診断テスト

幼児教育学科第3部3年

- ・保育者になるためにとってもタメになることが多くてたくさんのことを学ぶことが出来たので良かったです。
- ・色々自分について考えることが出来る機会があって楽しかったです。
- ・実習交流会はとても大切だと思いました。2年生の子の不安や実習に対する悩みを答えることで私もこうゆうことで悩んでいたな、どう解決したらいいかわからなかったなと思うこともあり、その場面で先輩からのアドバイスをもらえるのはとても重要だと思いました。
- ・今までの学生生活の中で、「メイクの仕方とか学校で教えてくれないかな」とか「履歴書作成を1人でするのは不安だな」と思うことが色々あったが、自分の不安を取り除いてくれるようなカリキュラムになっていて、とてもよかった。実習の関係などで何度か欠席したが、欠席したのがもったいないなと感じることもあった。
- ・就活が近く、色々不安がある中で、なるほどと思うようなことを沢山聞けました。
- ・面接対策は続けてほしいです
- ・個別での面談の機会がもう少しあれば、不安なことを気軽に吐き出すことが出来ると思います。
- ・得意なものを活かす講座とかあれば楽しそうです。面接でも使えそうです。

3. 教職員アンケート

(1) Forms（前期プログラムを終えて）

学生の前期キャリアチャレンジアンケートのまとめを Teams に投稿し、教職員のアンケートを実施した。

実施：令和5年8月9日～30日

回答：32名

表4 Forms 前期プログラムを終えて（教職員アンケート）

2. キャリアチャレンジ全体の感想、意見、改善点をご記入ください。
3. 担当されたプログラムの感想、意見、改善点をご記入ください。
※それぞれのプログラムについてお書きください。
4. 後期キャリアチャレンジのプログラムのご提案などがありましたらご記入ください。

(2) Forms 結果

教職員の回答から抜粋した。

2. キャリアチャレンジ全体の感想、意見、改善点をご記入ください。

- ・欠席者が少なく、学生さんの意識の高さを感じ取ることができました。キャリアチャレが学生さんに受け入れられている証でもあります。「Forms 回答のまとめ」にある学生さんの意見をできる限り取入れ、学生さん一人ひとりのニーズに合うようなキャリアチャレとすることができればますます素晴らしいものになると思います。
- ・様々なプログラムが学部・学年ごとに組んであり、学生も飽きずにキャリアチャレに対して真面目に取り組んでいた様子を感じ、とても良かったと思います。また、教職員も学生の就職について意識を持つきっかけになったと思います。
- ・多くの学生が積極的に参加していた印象を受けました。当初懸念されていた欠席も少なかったように思います。学生が魅力的だと思うプログラムを取り入れ、内容をブラッシュアップしていくことで、より魅力的なものになると感じました。
- ・本学の学生にとっても、キャリアチャレンジのプログラムはとても重要だと感じました。キャリア教育を推進していくためにも担当部署だけでなく、教職員が連携をとり、推進していく必要があると感じました。
- ・さまざまな取り組みを行い、初年度としては十分な内容だったと考えます。一部しか詳細を存じませんが、検証をしっかりされ、データの共有をしていただけると建設的な意見が出るかと考えます。具体的にはSPIの結果の変遷やそれに対する対策など。

3. 担当されたプログラムの感想、意見、改善点をご記入ください。

- ・個別面談の時間が短かったため、もう少しゆっくり学生の話が聞けるといい（特に自分の専攻の学生）と思いました。特別欠席になった学生が課題を取りに来ることがありましたので、連絡方法などの統一があるといいと思います。
- ・ビューティー講座を担当しました。担当していただいた資生堂の方の説明もわかりやす

く学生にも好評で良かったと思います。

- ・SPI テスト、漢字テストの監督を担当しましたが、どちらも時間が余ってしまい、学生が退屈そうにしていました。テストが終わってしまった場合の対応をご指示いただくと良かったです。
- ・外部講師による講義(インターン・履歴書) 外部講師が来ることで、普段と違う緊張感があったように感じます。学生も真剣に聞いている様子でした。
- ・面談 学生ひとりひとりと目を見て話す時間は、学生支援の観点で私にとっても有意義な時間でした。少し気掛かりな学生にはその後も気に掛けることが出来、自分から声をかけることができました。

4. 後期キャリアチャレンジのプログラムのご提案などがありましたらご記入ください。

- ・在学年については面接練習を増やしてはいかがでしょうか。それに伴い、自己紹介、自己PR、本学の特色や就職したいと考えている市町や企業についての情報をまとめる時間があるとよいと思います。卒学年には、後輩にぜひ伝えておきたいことなどをまとめ後輩に伝える時間があるとよいと思います。キャリアチャレが卒業するまでに挑戦してみたいことを考え(実践する)機会となるとよいと思います。
- ・面接は教育指導の場であると同時に、大変有効な情報収集の機会ですので、得られた情報を就職だけでなく、教学や学生募集にも役立てたいと考えます。情報共有をお願いいたします。また、気付きやモチベーションアップのため卒業生を含めた現役職業人の講演なども盛り込んでいただくと良いかと思います。
- ・実習交流会が学生にとってニーズが高いように感じました。学年を越えた交流や、先輩学生が後輩学生の支えとなるような役割意識をもつ機会を、引き続き継続できると良いと思います。

(3) 後期キャリアチャレンジに向けて

前期学生アンケート、教職員アンケートをもとに、後期のプログラムを作成した。要望の多かったキャリア面談、交流会を増やした。1年(3部2年)は、就職活動がスムーズに始められるようなプログラム、2年(3部3年)は、社会人として必要なスキルを身につけられるプログラムを検討した。

VI. 後期キャリアチャレンジ

1. プログラム

前期に引き続き、キャリア面談を行う。1年(3部2年)は公務員ガイダンスからスタートし、チェックテスト、SPI テスト、就職活動に向けて、論作文、履歴書作成やグループディスカッション、模擬面接、スーツの着こなし講座を取り入れる。2年生、3部3年は、未内定者の面談、実技、検定対策、漢字や美文字、メンタルヘルス、社会人として知っておいて欲しいこととして、ビジネスマナー、また外部に委託し労働法セミナーや保険ライフプランの講座を行う。

実習報告会、就職活動報告会、交流会も取り入れ、先輩の話を聞く機会や交流をする機会を作る。

令和5年度 後期 月曜2限目『キャリアチャレンジ』プログラム

※公務員…公務員講座受講者

月日	公務員	幼教1部1年	幼教1部2年	幼教2部1年	幼教2部2年	幼教2部3年	食物1年	食物2年	生活1年	生活2年
1 9月25日	—	公務員 ガイダンス	* 教育実習Ⅱ	公務員 ガイダンス	公務員 ガイダンス	* 教育実習Ⅱ	公務員 ガイダンス ※履歴書提出	キャリア面談& 卒業漢字①	公務員 ガイダンス ※履歴書提出	キャリア面談& 卒業漢字①
2 10月2日	—	A: 異外実習 ガイダンス B: 漢字検定	* 教育実習Ⅱ	A: 異外実習 ガイダンス B: 漢字検定	A: 異外実習 ガイダンス B: 漢字検定	* 教育実習Ⅱ	キャリア面談& チェックテスト 第4回	A: 卒業漢字② B: キャリア支援	キャリア面談& チェックテスト 第6回	A: 卒業漢字② B: キャリア支援
3 10月9日	1回	キャリア面談& チェックテスト 第5回	* 教育実習Ⅱ	キャリア面談& チェックテスト 第5回	キャリア面談& チェックテスト 第5回	* 教育実習Ⅱ	履歴書近卸 作成指導	卒業士実力 認定試験対策① e-Learning	履歴書近卸 作成指導	検定対策①
4 10月16日	2回	チェックテスト 第6回& 保育実技 (しゃぼんだま)	* 教育実習Ⅱ	キャリア面談& チェックテスト 第6回	キャリア面談& チェックテスト 第6回	* 教育実習Ⅱ	企業検索& 検定対策	卒業士実力 認定試験対策② e-Learning	企業検索& 検定対策	検定対策②
5 10月23日	—	附属幼稚園実習	キャリア面談& 報告・交流準備	実習交流会 (附属園実習)	キャリア面談& 報告・交流準備	キャリア面談& チェックテスト 第7回	チェックテスト 第7回	メンタルヘルス	チェックテスト 第7回	メンタルヘルス
6 10月30日	—	就職活動報告会・交流会 & 避難訓練		就職活動報告会・交流会 & 避難訓練		就職活動報告会・交流会 & 避難訓練		就職活動報告会・交流会 & 避難訓練		就職活動報告会・交流会 & 避難訓練
7 11月6日	3回	論文対策 (マイナビ)	メンタルヘルス	論文対策 (マイナビ)	実習交流会 (施設)	進路調査カード 履歴書作成	卒業士実力認定 中級模擬試験	進路調査カード 履歴書作成	検定対策 資格取得対策	
8 11月13日	4回	履歴書の書き方 作成	教員免許 授与編作成 & 保育漢字②	自己分析	履歴書の書き方 作成	保育漢字② & 教員免許 授与編作成	マイナビ 面接対策	社会人としての 英文字 キャリア面談	マイナビ 面接対策	社会人としての 英文字 キャリア面談
9 11月20日	リクルート 等なし講座 産	グループワーク ディスカッション	社会人としての マナー	A: チェックテスト 第7回 B: グループワーク ディスカッション	* 施設実習	社会人としての マナー	リクルートための 等なし講座 (洋服の青山)	社会人として 保険 ライフプラン (生命保険文化 センター)	リクルートための 等なし講座 (洋服の青山)	社会人として 保険 ライフプラン (生命保険文化 センター)
10 11月27日	グループ ワーク	履歴書 添削指導	社会人として 保険 ライフプラン	A: グループワーク ディスカッション B: チェックテスト 第7回	* 施設実習	社会人として 保険 ライフプラン	卒業士校外実習 説明会	年賀状作成 & 卒業士実力 認定試験対策 の心構え	グループワーク ディスカッション	年賀状作成 & 検定対策
11 12月4日	5回	チェックテスト 第7回& 就職先検索	年賀状作成 書籍提出 キャリア支援	附属幼稚園実習	履歴書 添削指導	年賀状作成 書籍提出 キャリア支援	幼児食講座& みんないっしょの クリスマス	みんないっしょの クリスマス 厨房講座	幼児食講座& みんないっしょの クリスマス	みんないっしょの クリスマス 事前取材
12 12月11日	6回	リクルートための 等なし講座 (洋服の青山)	社会人としての 英文字 & キャリア面談	キャリア面談 & 漢字テスト	リクルートための 等なし講座 (洋服の青山)	社会人としての 英文字 & キャリア面談	模擬面接	卒業士免許申請 について	模擬面接	書籍提出 漢字テスト キャリア支援
13 12月18日	7回	模擬面接	労働法セミナー (大卒生等を対象 とした労働条件セ ミナー)	保育実技・ ピアノ指導	模擬面接	労働法セミナー (大卒生等を対象 とした労働条件セ ミナー)	ビューティー講座 フレッシュヤーズ (黄生堂) 写真撮影	ビューティー講座 フレッシュヤーズ (黄生堂) 写真撮影	労働法セミナー (大卒生等を対象 とした労働条件セ ミナー)	労働法セミナー (大卒生等を対象 とした労働条件セ ミナー)
14 12月25日	—	実習交流会 (保実1・施設)	保育実技 (保実1・施設)	就職活動報告会・交流会		書籍作成 送付状・封筒 (PG)	ビジネスマナー 電話・メール 接客	書籍作成 送付状・封筒 (PG)	ビジネスマナー 電話・メール 接客	
15 1月15日	—	進路調査カード 第8回SPテスト Forms	保育者として Forms	進路調査カード 第8回SPテスト Forms	進路調査カード 第8回SPテスト Forms	保育者として Forms	キャリア面談 第9回SPテスト Forms	卒業士の職業 管理について Forms	キャリア面談 第9回SPテスト Forms	企業人 医療事務員として Forms

図16 後期キャリアチャレンジプログラム

2. 振り返り

(1) Forms (毎回)

前期同様、学生の感想をまとめ、Teams「R5 キャリチャレ」に投稿し、教職員間で共有した。

Forms の回答の項目に「キャリア面談を希望する・希望しない」の項目を追加し、希望した学生に対して、キャリア支援からメールを送り、面談を行う。就職先に関する相談や自分が何をすればいいのかわからないという相談が多い。



図 17 キャリチャレ感想

(2) Forms (後期プログラムを終えて)

前期同様、後期プログラムを終了後、学科、専攻、学年ごとに、それぞれのプログラムについて Forms でアンケートを実施した。

実施：令和 6 年 1 月 15 日 (月) キャリアチャレンジで告知、回答

回答：生活文化学科	食物栄養専攻 1 年	18/18 名	回答率	100.0%
生活文化学科	生活文化専攻 1 年	2/2 名	回答率	100.0%
幼児教育学科	第 1 部 1 年	22/28 名	回答率	78.6%
幼児教育学科	第 3 部 1 年	36/39 名	回答率	100.0%
生活文化学科	食物栄養専攻 2 年	15/30 名	回答率	50.0%
生活文化学科	生活文化専攻 2 年	27/27 名	回答率	100.0%
幼児教育学科	第 1 部 2 年	27/30 名	回答率	90.0%
幼児教育学科	第 3 部 2 年	41/56 名	回答率	73.2%
幼児教育学科	第 3 部 3 年	58/75 名	回答率	77.3%
全体		246/306 名	回答率	80.4%

(3) 後期まとめ (Forms の結果)

すべての項目で 70%以上が、今後とても必要・必要、とても役に立つ・役に立つと回答された。特にポイントが高かったものは、とても必要・必要の項目では、保育実技 (100%)、実力認定試験・検定対策 (96.4%) 進路調査カード・書類作成 (94.8%) や自

己分析 (94.4%)、ビジネスマナー (92.9%) である。学生が役に立つと回答したものは、保育実技 (100%)、実力認定試験・検定対策 (96.5%) 進路調査カード・書類作成 (94.7%) やビジネスマナー (92.2%) である。

前期はデータを提示しなかったが、必要だと思わない、どちらでもないという数字も提示した。必要だと思わない、どちらでもない、役に立たない、わからないと回答した学生に対しての声掛けが必要である。

表5 後期アンケート結果 (必要だと思いますか)

(%)

プログラム	とても必要	必要	合計	必要だと思わない	どちらでもない
SPI、チェックテスト、テキスト学習	37.8	46.0	83.8	5.2	11.7
キャリア面談	39.1	39.5	78.6	1.6	5.9
履歴書作成	52.5	30.9	83.4	2.5	5.8
進路調査カード、書類作成	73.7	21.1	94.8	0.0	5.3
公務員ガイダンス	32.9	42.8	75.7	4.4	11.7
報告会・交流会	38.7	50.9	89.6	1.4	7.1
面接対策	49.0	36.7	85.7	1.2	4.5
ビューティー講座・着こなし講座	35.3	35.8	71.1	1.2	16.7
グループディスカッション	29.0	53.4	82.3	11.9	5.8
漢字検定・保育漢字・栄養漢字・ビジネス漢字	30.6	46.0	76.5	3.9	7.4
論作文	21.1	68.3	89.4	2.8	4.2
自己分析	36.1	58.3	94.4	2.8	2.8
保育実技	69.4	30.6	100.0	0.0	0.0
実力認定試験・検定対策	41.2	55.2	96.4	0.0	1.8
メンタルヘルス	29.2	55.4	84.6	0.0	9.4
美文字	19.8	55.4	72.2	4.1	12.0
保険ライフプラン	26.6	57.4	83.9	2.1	9.9
労働法セミナー	24.9	56.1	81.0	2.1	8.4
ビジネスマナー (社会人としてのマナー)	40.0	52.9	92.9	1.2	10.4

表6 後期アンケート結果 (役に立つと思いますか)

(%)

プログラム	とても役に立つ	役に立つ	合計	役にたたない	わからない
SPI、チェックテスト、テキスト学習	22.8	60.8	83.6	3.7	12.7
キャリア面談	40.4	47.9	88.2	1.4	7.6
履歴書作成	54.5	30.9	85.9	1.2	4.5
進路調査カード、書類作成	76.3	18.4	94.7	0.0	5.3

公務員ガイダンス	33.8	40.9	74.7	3.2	12.4
報告会・交流会	37.6	51.2	88.8	0.5	9.2
面接対策	46.6	28.1	74.7	0.0	5.8
ビューティー講座・着こなし講座	39.1	40.1	79.0	1.2	11.2
グループディスカッション	31.4	53.4	85.0	6.4	8.6
漢字検定・保育漢字・栄養漢字・ビジネス漢字	23.0	52.1	75.1	1.5	9.3
論作文	23.9	65.5	89.4	0.0	9.2
自己分析	36.1	50.0	86.1	0.0	13.9
保育実技	69.4	30.6	100.0	0.0	0.0
実力認定試験・検定対策	43.0	53.5	96.5	1.8	1.8
メンタルヘルス	25.6	54.2	79.8	0.0	14.2
美文字	18.9	55.4	74.3	4.1	12.0
保険ライフプラン	27.4	56.3	83.7	2.1	11.6
労働法セミナー	23.5	56.3	79.8	1.2	10.4
ビジネスマナー (社会人としてのマナー)	37.2	55.0	92.2	0.0	4.5

表7 後期アンケート結果 (レベル)

(%)

プログラム	とても 難しい	難しい	普通	簡単
SPI、チェックテスト、テキスト学習	19.5	45.3	33.7	1.2
面接対策	16.8	35.8	21.1	1.2
漢字検定・保育漢字・栄養漢字・ビジネス漢字	8.1	30.9	40.8	3.6
論作文	26.7	52.3	18.3	1.4
自己分析	22.2	44.4	36.1	2.8
実力認定試験・検定対策	5.1	60.2	34.8	0.0

前期同様、後期キャリアチャレンジの感想も、良かったという感想が多く書かれており、積極的に取り組み、有意義なものであると捉えられている。

生活文化学科 食物栄養専攻1年

- ・就職についての講座が多いなと感じた面接の対策や履歴書の添削を徹底的にして頂いたおかげで、不安が減りました
- ・就活に直接繋がる講義が多かったので、良かった。

生活文化学科 生活文化専攻1年

- ・面談でなんでも言える環境でよかった。メイク講座や面接対策など就職活動に役立つ講座でためになった。

幼児教育学科第1部1年

- ・就活に役立つことを沢山学べて良かったです。学んだことをしっかりこれからの就職活

動に活かしていきたいです。

- ・先輩の話が聞けてよかったです。

幼児教育学科第3部1年

- ・小論文の書き方を学べたり、前期に引き続きテストをしたりすることが出来て良かったです。グループディスカッションはとても難しかったので、積極的に意見を言えるようにしていきたいです。
- ・自己分析で自分を見つめ直す時間があったこと。
- ・面談などを通して就職について先生方と話せてよかったです。

生活文化学科 食物栄養専攻2年

- ・後輩の子と交流したり、就職する上での授業はとても役に立ちました。実力認定試験対策の授業があったおかげで今までよりもとてもいい成績を取れて嬉しかったです。
- ・沢山の社会に出てから必要になってくる（マナーや書き物【美文字や漢字】労働法）などを学ぶことができたので良かったと思います。
年下や違う学科の子達との交流が去年より多く感じたので、そういう交流は良いなと思いました。
- ・就職活動でバタバタな日々だったけど、面談などサポートが1番印象に残っている

生活文化学科 生活文化専攻2年

- ・セミナーなど社会人になっても教えてくれないことを専門の人が教えてくれた授業は良かったです。
改善などは、繰り返し資格勉強を行う必要はないと思いました。1年生のうちは取り入れても良いと思いますが、2年の後半ではだいたい資格がとれているので、違うことに時間を使いたかったです。
- ・後期は、就職のために細かい内容で色々対策したり学べたりしたのが良かったです。また、個人の希望で面接や面談に対応していただけたのもありがたかったです。

幼児教育学科第1部2年

- ・社会人になるにあたっての必要な知識が学べて良かったです。
- ・就職するために知っておくと良いことなども知れてとてもよかったですし、現場についても知れたので良かったです。
改善点では、労働セミナーなど内容が難しくして少し理解が難しかったです…。
- ・実習交流会などは今後も続けた方がいいと思った。必要性を感じない授業も少しあったように感じた。

幼児教育学科第3部2年

- ・実習などの交流会では不安なことや持ち物などが聞けて良かったと思いました。また履歴書の添削や面接練習があり就活に向けての気持ちや練習ができるのでいいと思いました。
- ・自分の将来に向けて、考える時間は普段だとあまり持たないので、このような時間で自分のことについて理解を深めることができ、とても良かったです。
- ・自分の進路を1年の頃より深く考えれてよかったです。

幼児教育学科第3部3年

- ・キャリアチャレンジの後期がなければ、なかなかこのような機会がないと思うのでどれ

もとても貴重な講義だった。

- ・保険ライフプランや労働法セミナーはとても役に立ち良かったです。改善点は漢字練習をただするだけではなく毎回小テストするとより覚えれると思いました。
- ・プログラムはとても役に立つもので良かったと思います。ですが、集団ということもあり、集中して取り組むことができなかつたので、クラス別にするなど環境の工夫をした方が良いと思います。
- ・保育漢字で漢字の復習をしたり、先生方の経験を聞き自分の目指す保育像を考えるきっかけになったりすることができたので、キャリアチャレンジはとても良い授業でした。

公務員対策講座

- ・公務員を沢山組んでくださり助かりましたが、模擬面接や履歴書添削はやりたかったです。
- ・勉強する時間が増えました。

3. 教職員アンケート

(1) Forms (後期プログラムを終えて)

前期同様、学生の後期キャリアチャレンジアンケートのまとめを Teams に投稿し、教職員のアンケートを実施した。

実施：令和6年1月21日～26日

回答：29名

(2) Forms 結果

教職員の回答から抜粋した。

2. キャリアチャレンジ全体の感想、意見、改善点をご記入ください。

- ・多くの学生は真面目に取り組んでいたため、キャリアチャレ導入前と比較し就活に向けての基礎や準備ができているように思います。様々な学科・学年の学生と関わることで、卒学年だけでなく、下の学年の様子も見ることができた点は有益であると感じます。
- ・学科と調整しての展開は、学生にとって授業や就職に必要な学びになったと思います。
- ・何よりも学生に資することが大きい。最初は、選択科目ということで、学生の参加率や参加意欲が心配でしたが、毎回充実した内容で、学生も意欲的に参加しており、BH やアドバイザーが無くなった今、とても良い 取り組みだと思いました。授業後の Forms の回答率が悪いということでしたので、パスワード出欠と Forms 回答の2つがあつて、出席と認める条件であると周知が都度必要だと思いました。
- ・前期に引き続き、学生が興味を持って取り組むことができ、就職後に活用できる様々なプログラムが用意されていたように感じます。プログラムの内容によっては、後半になるにつれ学生の興味が薄れ、欠席が増えてきたものが出てきたように感じました。学生アンケートの意見を積極的に反映し、より学生の興味をひくプログラムを取り入れていく事が重要になってくると感じました。
- ・色々なプログラムへ参加し知識を得ていくことは有意義であったと思う。
- ・就活のためのスキルやマインドが1年次から教育されるプログラムが受けられることは、学生にとって良かったと思います。

3. 担当されたプログラムの感想、意見、改善点をご記入ください。

- ・面談の時間は非常に大切だと感じます。これまでどおり 1 人 1 人の時間をしっかり取り、丁寧に対応し、教職員全体で情報共有していくことで、学生満足度の向上にも繋がっていきと感じました。
- ・就職面接を体験するいい機会だと思います。総評として、上手く話せなくても一生懸命さが伝わる面接でした。1 回限りでなく継続していきたいと思います。
- ・アンケートにもあるように、実習交流会は今後も継続していくと良いと思います。
- ・検定対策は、学生が自分のペースで過去問を解き、前向きに取り組んでいた。学生のやる気が必要だと感じた。
- ・履歴書添削、時間に余裕をもって個別指導することができたのでよかったです。多くの学生がしっかり取り組んでいました。課題の提出率も高いことから、学生も履歴書指導の必要性を感じていると思いました。
- ・保育漢字の教室監督を担当しましたが、テストの時間中も、おしゃべりをやめるよう再三注意をしましたが、やめない学生が多く、幼教 1 部の学生が、比較的にまじめに取り組んでいたのも、うるさく迷惑がかかるのが申し訳ありませんでした。
- ・グループワーク、進行のサポートの必要がないくらい、学生同士で盛り上がっていました。アンケートの結果から「必要性を感じない」「今後に役立たない」という意見が少なからずあったことが意外であった。ワークの目的をしっかりと伝える必要があると感じました。

4. 後期キャリアチャレンジのプログラムのご提案などがありましたらご記入ください。

- ・学生自身でキャリアチャレンジのプログラムや教室を把握してもらうよう改めて指導する必要があると感じました。
- ・同じプログラムでも学生（受ける側）のモチベーションによって、評価がずいぶん違う。そのプログラムが今後どんな場面で役に立つのか、必要なのかなどをきちんと理解させたいと思う。
- ・SPI に向けた筆記の授業があってもよいかと感じました。
- ・学生さんの評判のよくなかったものは除外したほうが良いと思います。そうするとコマを埋めることが大変になるかと思いますが、ご検討ください。外部講師（それぞれの職場で活躍する卒業生）を増やしてはどうでしょうか。現場の声を直接聞く機会には有意義だと思います。
- ・学びのみではなく、学科を越えて全学年で楽しめるスポーツ大会や大学祭準備の時間のような、クラス皆で楽しめるイベント企画のようなものがあったら良いと思いました。

Ⅶ. まとめ

令和 5 年度からスタートした「キャリアチャレンジ」はその内容が幅広い。学生一人ひとりが各々のキャリアについて考える内容をはじめ、社会人になるためのマナー等の教養から学科の特性を生かした就職活動に関連する内容まで様々な内容を、一貫性を持ってシラバスに組み込んだ科目である。

幼児教育学科は 90%以上の学生が幼稚園教諭、保育士、保育教諭になるため、実習交流会や保育実践指導等が学生には特に好評だった。生活文化学科においても、各専攻の特色に合わせたプログラムが展開され、生活文化専攻ではそれまで授業時間外に行われていた検定対策を組み入れたり、食物栄養専攻では栄養士免許取得に関する情報提供が行われたりするなど、学生の進路を含めた専門性を高める内容が学生には好評だった。教員からも学生と対面で指導する学生面談や面接指導に関する内容を高く評価している。就職活動における学科の特性を生かしながらも全学科共通の内容をうまく組み合わせた「キャリアチャレンジ」は、学年と学科を超えて全学科の学生と全教職員が共に学生のキャリアを考えるという意味で有意義な取り組みと言えよう。

学科ごとに就職活動の時期やその内容が異なることから、次年度からは今年度の評価を基にシラバスの再検討が必要である。

VIII. 次年度に向けて

前期、後期アンケートの結果から、キャリア面談は学生にとってとても有意義なものであった。また、ポータルサイトに面談の記録を残すことにより、学生のその時々様子を把握することができ、情報を共有するとともに、変化などにも気づくことができる。次年度以降も実施していきたい。学生からの直接の声で、アドバイザーがいなくなった不安があり、誰に相談したらいいかわからなかったが、話す機会があつてうれしかったという声も聞かれた。

キャリア面談は、今後も取り入れていきたい。時間配分や教職員の配置などを考えることでよりスムーズに行うことができるようになった。ポータルサイトも活用し、面談の内容を共有することで、指導がしやすくなった。

プログラムはキャリア支援委員会で検討し、基礎学力の向上、学生支援、キャリア支援ができるようなものを取り入れたが、同じプログラムでも学生によって、感じ方が違うことがわかった。

そのプログラムを取り入れた意味、今後にどう役に立つのかを伝えたいので、取り組ませるともっと効果があったのではないかと考える。漢字や美文字は作業になってしまった学生が多くあった。枚数を多くしたのは、早く終わってしまう学生の対応のつもりであったが、丁寧に書くというより、やればよいという感覚になっていた。提出するかしないかで学生の取り組み状況が違うこともはっきりわかった。

フィードバックとして、提出したものにコメントを入れることで、学生のモチベーションも高めることができると考える。提出物の返却をできるだけ早くすることで、より身につけることができる。

後期のキャリアチャレンジに公務員講座を7回入れたが、プログラムに参加しなかったという回答もあり、次年度の課題としたい。

キャリアチャレンジの目的を再度確認し、学生・教職員のアンケートを参考にして、次年度に向けてより良いプログラムになるよう検討し作成をしていきたい。

実践報告

SDGs の視点で取り組む産学連携商品開発 —みんないっしょのプラントベース商品開発—

奥村 智子* 村田 奈央**

Industry-academia collaborative product development from the perspective of SDGs
: Plant-based product development for “Minna Together”

Okumura Tomoko, Murata Nao

Abstract

We conducted sales activities to distribute a plant-based frozen dessert developed through an industry-university collaboration between three food companies in Aichi Prefecture and our university in 2022. Although some of the ingredients and formulation were changed, this was the first step toward the future goal of expanding the product throughout the world. By having business students collaborate with food companies, dietitians, and other food-related specialists on projects, it will be possible for junior colleges to promote food development. Developing products that are environmentally friendly, use food that anyone can eat, and that people can choose to eat because they taste good will ultimately lead to the SDGs. We would like to continue our activities from the perspective of the SDGs, as well as develop food products under new themes and continue to market them.

要旨

2022年に愛知県内の食品会社3社と本学の産学連携で開発した、プラントベースの氷菓を流通に乗せるための販売活動を行った。販売にあたり一部原材料や配合を変更したが、世界中への展開という将来的な目標への第一歩となった。ビジネスを学ぶ学生が、食品会社や管理栄養士等、食に関する専門家と連携してプロジェクトを進めることで、短期大学でも食品開発を進めることが可能となる。環境に配慮し、誰でも食べることのできる食品を用いた上で、「おいしいから選ぶ」という選択可能な商品を開発することが、最終的にSDGsへと繋がっていく。今後もSDGsの観点で活動を継続するとともに、新たなテーマでの食品開発と継続した販売を行っていきたい。

Keywords : plant-based, food development, industry-university collaboration, SDGs
キーワード : プラントベース、食品開発、産学連携、SDGs

* 愛知文教女子短期大学

** Sakusaclier-サクサクリエ

I. はじめに

本学では、食物アレルギーに関する教育に力を入れており、全学生が（乳幼児食物アレルギー演習他）関連科目を受講するだけでなく地域・企業との事業の実施など、さまざまな取り組みを行ってきた。

近年の食物アレルギーの社会的対応では、くるみの症例が増え、食物アレルギーの表示義務がある「特定原材料」に加えられたことも記憶に新しい¹⁾。食品の原材料表示だけではなく、飲食店のメニュー表にも原材料や栄養成分が掲載されているなど、対応が充実してきた。

また、飲食店や大手コーヒーチェーンでは、「プラントベース」と表記のあるメニューが増加している。プラントベースとは、植物性由来の原材料のみを使用した製品をさす言葉である。食物アレルギーをもつ方や菜食主義者への配慮に加え、畜産業にかかる環境問題などからSDGsの観点でも取り組みが進んでいる。

これに関して、スーパーやコンビニエンスストアなどでは、賞味期限の切れた食品の廃棄が問題視されている。このフードロスの対策として、商品棚の販売期限が迫っているものを積極的に選ぶ(てまえどり)購買を呼びかけたり、閉店時間付近に値引きをして買いやすい価格にするという取り組みが多く見られるようになった。

これらの変化により、日常生活で環境問題や健康情報を身近に感じやすくなったといえる。同時に、プラントベースフードやフードロス対策が少しずつ広まっていることから、年代を問わず、どのライフステージにおいても、安心安全な食生活へのニーズが高まっていることが実感できる。

以上を踏まえ、2022年に愛知文教女子短期大学の地域連携センターの中で企業連携を担当する部署である足立学園総合研究所が愛知県内にある3社の食品企業と産学連携でプラントベース氷菓の開発を行い、「ことちゃんのアイス」という名称を付けた。2023年は、足立学園総合研究所が主となり、生活文化専攻の学生とともに「ことちゃんのアイス」の商品展開を進めた。

II. プラントベースの商品開発とSDGs

SDGsとは「持続可能な開発目標」の略で、2030年を達成年限とした国際的な目標である。商品開発において、このSDGsの観点から様々な環境問題に対する取り組みを意識した。

食料の輸入が地球環境に与える負荷のことを、食料の輸送量(t)と輸送距離(km)を掛け合わせて数値化し「フードマイレージ」と呼ぶ²⁾。島国であり、食料を輸入に大きく頼っている日本では、諸外国と比べてフードマイレージが圧倒的に高い。このことから、低い環境負荷で生産できることが理想であり、連携企業各社が主に国産の原材料を利用していることが重要となった。

さらに、フードロスの懸念が少ない食品であることも重視した。この点では、適切な温度帯で保管されたアイスクリームや氷菓は品質の劣化がわずかであるため期限表示の省略が認められており、食品添加物を使用せずに長期保存が可能であることに着目した。

そして、畜産における環境負荷も考慮し、プラントベースフードであることを前提

とした。食品として人気があり、毎シーズン新商品が数多く発表されている氷菓においては、多くが乳製品と卵を使用している。開発したプラントベースの氷菓は、主として大豆製品を用いるため、乳製品と卵の食物アレルギーをもつ方でも食べることができる。

プラントベースは本学が取り組んできた食物アレルギーの問題を完全にクリアするものではなく、アレルギー対策として展開していくには不十分である。しかし、大豆製品を好きな方に向けて新しいスイーツとして発信していくことで、喫食の間口を広げられると考えた。

Ⅲ. 企業連携の概要

1. プラントベースのアイス開発

愛知文教女子短期大学と包括連携を結んでいる、愛知県下の食品会社3社（株式会社名古屋食糧、株式会社おとうふ工房いしかわ、太田油脂株式会社）と共に、各社が扱う「米・豆・油」の良いところを十分に活かしながらできるだけシンプルな素材で「あったらいいな」を実現する商品開発を、2021年2月から開始した。100%植物性素材のプラントベースである氷菓に焦点を当てて試作を進め、卵・乳製品不使用のジェラートの素「おからペースト(ジェラート用)」が生まれた。このおからペーストを用いて完成した氷菓には、本学の「食物アレルギーの子どもを守る」事業のキャラクター「ことちゃん」にちなみ、「ことちゃんのアイス」と命名した³⁾。



図1 米・豆・油プロジェクトポスター

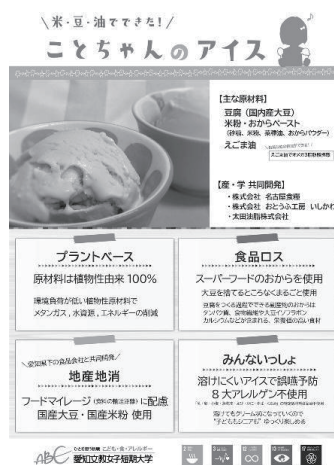


図2 商品紹介ポスター



図3 おとうふ工房いしかわ商品カタログ



図4 ことちゃんのアイスリーフレット

2. 稲沢市内の商店で商品製造 (ユーグレナ)

開発当初から、稲沢市内にある、「国府宮ジェラード ユーグレナ」と連携して製造を行った。

ユーグレナは、愛知文教女子短期大学の近くで店舗展開をしている手作りジェラートの専門店である。素材の風味を活かした安心安全な食を提供していること・小ロットから製造できることから、連携を依頼した。

何度も試作を繰り返し、連携企業からの材料提供を受け、2022年11月よりアイスの製造・販売を開始することができた。味はプレーンとカボチャの2種類を準備した。

2024年1月以降は、店舗前に設置した自動販売機で販売を開始している。



図5 ことちゃんのアイス



図6 アイス自動販売機

3. 工場での生産（おとうふ工房いしかわ）

2023年4月には、株式会社おとうふ工房いしかわ工場内にジェラートラインが完成。卵や乳製品の代わりに豆腐を使用した氷菓「とうふアイス」の製造が始まり、商品化された。「卵・乳不使用。米粉と植物油とおからなどから作ったベースに豆腐を加えたおとうふ屋さんならではのアイス」として、夏のお土産シーズンに合わせて、自社店舗、通販サイトでの販売が始まった。味は、とうふ（プレーン）、黒糖、抹茶、黒ごまの4種類である。

図7 おとうふ工房いしかわオンラインサイト⁴⁾

4. 一般販売（名鉄商店）

より多くの人、特に必要としている人に手に取っていただくため、名古屋駅前にある「名鉄商店」での販売を目標とした。名鉄商店は、『多くの人が行き交う名古屋駅という立地』『名鉄生活創研の若手社員が中心となって運営』『愛知県・岐阜県の事

業者と協力して作り上げた名鉄商店オリジナルの商品展開』『地元の魅力を発信し、多くの人にとって生活や街を楽しむきっかけとなる場所を目指す』というコンセプトの、新しいスタイルのお土産屋である。

私たちの「みんないっしょの美味しい笑顔」という目標を産学共同・地産地消で進めたいという理念と同じ思いがあり、「ことちゃんのアイス」をお土産として全国の人や外国人観光客にも伝えることができると考え、連携を依頼した。学生が商品説明と直接交渉をすることで、取引を進めていった。

名鉄商店と取引を始めるにあたり、販売や物流などを考慮し、一部原材料の変更を行った。いままで本学がイベントで販売してきた「ことちゃんのアイス」ではなく、おとうふ工房いしかわの工場で製造しているアイスを販売することとなり、パッケージとフレーバーを変え、「ことちゃんとうふアイス」が誕生した。

味はプレーンと抹茶の2種とした。豆腐でできていることが外観からも分かるように、豆腐のパッケージにアイスのカップを入れたことで、お土産としてのプレミアム感も生まれた。また、2023年10月、SDGsフェアにあわせて、「ことちゃんとうふアイス」が、店舗とオンラインショップで販売されることになった。



図8 ことちゃんとうふアイス



図9 名鉄商店店舗内陳列

※米・豆・油でできた! /
ことちゃんとうふアイス

<p>プラントベース 原材料は植物性由来100% 環境負荷が低い植物性原材料で メタンガス、水資源、エネルギー削減</p>	<p>食品ロス スーパーフードのおからを使用 大豆を捨てるところなくまるごと使用 豆腐製パン製造でできる副産物からおから タンパク質、食物繊維や大豆イソフラボン カルシウムなどが含まれる。栄養価の高い食材</p>	<p>種類別：水菓 【プレーン】 豆腐（大豆（国産）、植物油、その他）、 砂糖、砂糖加工品（砂糖、米粉）、 植物油、乾燥おから、植物油 【抹茶】 豆腐（大豆（国産）、植物油、その他）、 砂糖、砂糖加工品（砂糖、米粉）、 植物油、乾燥おから、植物油、抹茶</p>
<p>愛知県下の食品会社と共同開発! できないことはできるひとと 【製粉】おからペースト ・株式会社 名産物産 松山 松山工場いしかわ ・株式会社 名産物産 松山 松山工場いしかわ ・太郎製菓 株式会社 松山工場 【製糖】株式会社 松山工場 【製油】株式会社 松山工場</p>	<p>みんないっしょ 8大アレルギー不使用 『乳、卵、小麦、落花生、そば・くずみ の特定原材料5品目不使用』</p>	

図10 商品紹介ポスター



図 11 ことちゃんとうふアイスリーフレット

5. 全国展開（おとうふ工房いしかわ）

株式会社おとうふ工房いしかわが製造・販売を開始した「豆腐好きのためのとうふアイス」は、大手スーパーでの取り扱いが決まり、近日中に市販される。



図 12 豆腐好きのためのとうふアイス

IV. 理想から流通にのせるためには

2022 年に商品化した「ことちゃんのアイス」は国産でシンプルな材料から製造されている。『えごま油を使用することで α -リノレン酸の摂取が可能となること』『8 大アレルゲン不使用であること』『子どもに食べさせることを想定し、通常のアイスクリームと比較して砂糖の使用量を減らす』これら 3 つのこだわりを持って開発した。時間が経ってもムース状になるだけで、液状に溶けないという特徴も得られ、高齢者から小さな子どもまでの世代も楽しめるようになった。

しかし、名鉄商店での販売を始めるにあたり、えごま油は高価なことから圧搾絞りの菜種油に変更した。また、砂糖の使用料が少ないために、冷凍庫から出した段階ではかなり固く食べにくいことから、砂糖の配合を増やしている。

また、大量の売買取引となると、製造者・取扱業者も限られる。商品をたくさんの方に購入していただくには、上質な素材にこだわるのではなく、必要とする方に届くように、味や価格、内容量を調整し、対応する力が必要であった。

「みんないっしょの美味しい笑顔」という大きなコンセプトはそのままに、食品製造企業と連携、バックアップしていただくことで、届ける販路が増え、大きな前進を遂げることができた。また、企業としての事業の進め方を目の当たりにして、多くの学びを得ることができた。

「ことちゃんのアイス」「ことちゃんとうふアイス」は、開発当初から複数の新聞社の取材を受けた。開発ストーリーをしっかりと語ることができたのも、商品開発をビジネスとして進めることができた一因である。20年前から始まった本学の「食物アレルギーの子どもを守る教育・研究」や、今年21周年を迎えた「食物アレルギー対応のフルコース」を提供するイベント「みんないっしょのクリスマス」を初回から支えていただいている企業と協力して、「みんなが安心して食べられるものを作ろう」という思いが形になった商品である。学生たちが一般販売に向けて実践的なプロジェクトを行ってきたことも重要な要因であったと考える。

プラントベースが社会的に少しずつ認知されてきたこともあり、これからもっと必要としている人の手に届くことを願っている。

表1 メディア掲載

掲載日	掲載媒体	見出し・小見出し等
2022/ 7/ 3	中日新聞 尾張版	「豆腐、米粉、えごま油使い 7 大アレルゲン排除」「このアイス 100%食物由来」愛知文教女子短大、食品3社と開発
2022/ 7	クローバーTV	アレルギー対応特集コーナー
2022/12/ 10	中日新聞 尾張版	「笑顔咲け 植物由来アイス」 「愛知文教女子短大、企業と開発」
2023/11/10	日本食糧新聞	「カラダに優しいPBF」 ことちゃんとうふアイス 愛知文教女子短大 名鉄百貨店などと連携
2023/11/23	朝日新聞	「一緒に食べよう「とうふアイス」」 8大アレルゲン不使用 植物性由来のみ 愛知文教女子短大生が開発
2023/11/30	中日新聞 尾張版	「植物由来アイス安心で美味」 「名古屋で発売 来月2日、試食会も」 「愛知文教女子短大生ら 産学連携で開発」
2023/12/ 2	中日新聞 市民版	「愛知文教女子短大 産学連携、名駅で販売」 「主要なアレルギー物質なし」 「学生開発 植物由来アイス」

V. 学生の実践と教育効果

愛知文教女子短期大学では、「食物アレルギーの子どもを守る教育・研究」を20年以上続けている。アレルギーがある子もいない子も同じものが食べられる環境を提供することで、「みんながいっしょに食べる」喜びが分かり合えればと考え、アレルギー対応のお菓子を開発している。

「ことちゃんのアイス」産学連携開発プロジェクトは、足立学園総合研究所が、生

活文化専攻の学生と取り組んできた。生活文化専攻の学生は、社会で役立つ「資格」と「コミュニケーション力」を獲得する実践的なカリキュラムを特徴とし、資格取得とともに、パソコン、タブレットなどの情報機器とデザインソフトを使い IT スキルを磨く授業や、ビジネス実務、プレゼンテーション演習など実践的な授業で「情報発信力」を身につけている。

1年次のプロジェクト演習、2年次の卒業研究の2年間で、みんないっしょのプラントベース商品開発を産学連携で取り組んだ。それぞれの授業は、通年で行われ、2年間の間に、課題に対してチームによる問題解決の体験を通じて能力発揮の仕方を学習できるプログラムを構築している。実践の場において責任感を持って取り組み、自ら進んで現場のニーズに対応した行動を取れる柔軟な行動力の習得を目的としている。実践の場での多様な関わりの中で、責任を持って自分の役割を果たすことを体験していくことで、各自が、論理思考力や早く正しく判断をするためのスキルと、チームで役割を認識し協力して取り組む力、状況に応じた行動をとることができるようになる。

産学連携で行うことで、実務家、専門家から、栄養的なことや戦略的な考え方などを学ぶことができる事で、生活文化専攻の学生でも食品開発が実践できることになる。

1. 実践実施計画

(1) 課題の把握と市場調査

プラントベース、SDGs、食物アレルギー対応食品についての知識の習得、本学のアレルギーの取り組みや市場にある食品について調査をすることから始めた。次に、実際に消費者の声も聞くために、老人福祉施設やイベント会場での試食アンケート調査を実施した。

プラントベースのアイスを活用したカフェメニューの提案では、連携企業の方にプレゼンテーションをして、指導を受けることで、ビジネス感覚を知る機会となった。

イベントの販売活動では、「プラントベースのアイス」と声かけをして販売をし始めたが、「プラントベース」という言葉の認知度が低く、興味を持ってもらいにくかった。「お豆腐のアイスです」と声かけの方法を変えると幅広い年齢層の方に興味を持ってもらえた。このような経験を通して、学生は、来場者によって声かけの方法を変えたり、工夫をしながら販売活動を行い、自信につなげていった。

SDGs AICHI EXPO 2022・2023に出展したことで、プラントベース食品開発がSDGsの実践につながることを理解し、企業や官庁、学校などの取り組みを学ぶこともできた。



図13 市場調査の様子



図14 イベントの様子

(2) パッケージ、パネル、リーフレットの制作

プラントベースのアイスの商品化するには、ネーミングや、パッケージデザインに取り組んだ。市場調査で得た知識を基に、パッケージデザインは、商品のコンセプトである「みんないっしょ」を大切に、外枠はつながりを意識して、米・豆・油のキャラクターが手を繋いでいるイラストが提案された。色味は、流行も考え、レトロ感のある、あたたかい色合いとし、親しみやすいデザインに決定した。



図 15 パッケージデザイン



図 16 授業の様子

「ことちゃんアイス」の魅力をより多くの人に伝えるためにポスター制作に取り組んだ。おいしそうに見える写真の撮り方、内容が伝わりやすいレイアウトなど授業での成果を活かすことができた。

アピールポイントを 4 つに絞り、環境にも人にも優しく、多くの人にとっての健康食であることを強調した。展示会でも説明がしやすくなり、プラントベース食品の認知度も上がった。

名鉄商店での販売が決まった後は、企業と直接関わることで、デザインセンスや、誤解を招かない言葉選びなど、伝えるデザインに関する意識が高くなった。

(3) 販路拡大営業、メディアリリース

2年次になり、学生たちはイベントを通してニーズがあることを確認し、店舗での販売に向けた売り込みをすることにチャレンジするため、名鉄商店に学生が直接電話をしてアプローチをした。

おとうふ工房いしかわの社長にも同行していただき、商品の製造、パッケージのリニューアルやリーフレットの作成など販売に向けて急ピッチで進めることができた。

そして、商品が手に届くまでにはたくさんのプロセスと協力が必要であることを実践から学ぶことが出来たことが、大きな成果となった。

名鉄商店での販売が決まった後は、SNS の TikTok や Instagram などを活用し、商品や日々の活動を動画にして投稿するなど、学生ならではの視点で取り組んだ。

また、メディアリリース資料を作成し、新聞各社、放送局に情報提供をした結果、名古屋食糧新聞、朝日新聞、中日新聞の取材をうけた。中日新聞では、尾張版と市内版で、アイスと本学を大々的に扱っていただき、名鉄商店での試食イベントの際には、新聞記事をみて来場した方もおり、新聞の影響力を実感することができた。



図 17 名鉄商店でのプレゼン



図 18 名鉄商店での試食イベント

2. 学生の成長

実践回数を重ねる度に本学が続けてきたアレルギーの実践教育の中から自分たちの学びと社会のかかわりが実感でき、実践力も身につけていった。

最初は、課題を提示して行ってきたプロジェクトも、試食アンケートやイベント販売を行うことで、学生自身が課題を見つけ、解決するために行動をすることができるようになった。また、イベントや取材など、何度も説明する機会を設けることで、情報が整理され、自分の言葉で、わかりやすく伝える方法も考えることができるようになった。

プロジェクトを通じて、課題発見力、課題解決のための判断力、思考力、多様な人とのコミュニケーション力、情報発信力、チームワーク力、実務実践力など、社会に出たときに必要な力を身につけることができ、学生の成長を実感できた。

VI. 今後の展開と課題

世界的な課題である SDGs について取り組んだ結果、産学連携により開発した氷菓の商品化に繋げることができた。

開発したプラントベース氷菓はシンプルな味わいのため、飲食店などで他のデザート食材と組み合わせるメニューを展開していくことが十分可能である。

プラントベースに関しては、宗教や動物愛護の要素もあり、海外のほうが幅広く展開されている。比べて、未だ日本国内におけるプラントベースの認知度は低い。様々

な食品企業が代替肉や代替乳の開発・販売を進めるほか、都内百貨店にプラントベースフード専門のカフェが開店したり、テーマパーク内の飲食メニューに代替肉を取り入れるなど、取り組み自体は進んでいる。しかし、不慣れな食品に対する「おいしくないのではないか」という不安や、高価で手に入りにくいという面もある。

「プラントベースフード」として食品のジャンルを分けてしまうと、食物アレルギーの当事者や環境問題に深く関心のある方以外の目に留まりにくいことが考えられる。環境に配慮した食品は、「おいしいから選ぶ」という選択をしてもらえる商品にしていくことで、最終的に SDGs へと繋がっていく。垣根がない食の選択を見据え、もっと生活に溶け込んでいくよう発信していくことが課題である。

開発当初から、卵や乳製品のアレルギーでアイスクリームが食べられない世界中の子どもたちにも届けたいという、大きな夢を持って企画してきた。「ことちゃんとうふアイス」に使用されるジェラートの素は、常温品のため世界中に輸送可能で、ジェラートの素と現地の豆腐・油があればアイスクリームを作ることができる。本年の成果を第一歩とし、海外への展開を目標に活動を継続していきたい。

さらに令和 6 年能登半島地震を受け、「防災」や「備蓄」はこれからの商品開発の重要なテーマとなりうる。年代に限らず誰でも・どこでも「みんないっしょに」食べることができる食品の開発に、今後も取り組んでいきたい。

文献

- 1) 消費者庁 (2021) 「くるみの義務表示化の経緯について」
(https://www.caa.go.jp/policies/policy/food_labeling/meeting_materials/assets/food_labeling_cms204_210217_03.pdf)
- 2) 中田哲也 (2008) 「フードマイレージについて」
(<https://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/kikaku/goudou/06/pdf/data2.pdf>)
- 3) 奥村智子, 村田奈央 (2023) 「『みんないっしょ』の食品開発の取り組み」『愛知文教女子短期大学研究紀要 44』 117-127
- 4) おとうふ工房いしかわオンラインサイト・楽天メルマガ「★みんなで食べられる！冷たいとうふやさんのデザート★」
(<http://otoufu.co.jp/8855> 2023. 7. 7)

実践報告

学内情報システムの更新における現状の報告と今後の方針 —学内アンケートによるユーザの意識調査結果を踏まえて—

砂田 治弥* 桐崎 香子* 小川 美樹* 山崎 宜久*

Reporting Current status and operation about Campus Infrastructure Update:
Based on the Results of the Student Survey

Haruya Sunada, Yoshiko Kirisaki, Miki Ogawa, Yoshihisa Yamazaki

Abstract

In FY2023, our college upgraded its core network equipment and server system. The main purpose of this upgrade is to lower the cost of the on-premises servers installed in 2017 and reduce the labor required to operate them. This paper describes the new and old network systems and discusses the main differences and problems encountered during the transition. Furthermore, based on the Student Life Reality Survey questionnaire, the future directions of information systems at our college will be discussed.

要旨

2023 年度、本学は基幹ネットワーク機器および、サーバシステムを更新した。これは 2017 年に導入されたオンプレミス型サーバから、低コスト化、運用に対する労力の削減をはかることが主な狙いである。本論文では、新しいネットワークシステムと旧ネットワークシステムについて説明し、主な違いと移行時の問題点について述べる。また、学生生活実態調査を参考に、今後の情報システムのあり方について考える。

Keywords : ICT, Network, Server, Firewall, NAS

キーワード : ICT、ネットワーク、サーバ、ファイアーウォール、NAS

I. はじめに

2023 年度より本学は、今まで運用していたオンプレミス型（注 1）のサーバから NAS（注 2）への運用へ切り替えをした。これは 2017 年に R 社が学内へ設置導入した、HP¹⁾（ヒューレット・パッカー）社製の基幹サーバと、基幹ネットワークハブの保守サービスの終了、またマイクロソフトによる OS サポート終了が要因である。これを機会に、本学の全体ネットワークの LAN 終端に設置されているファイアーウォールシステムと、コン

* 愛知文教女子短期大学

ピュータ演習授業用の教室である4階のインターネット教室と、2階のパソコン教室を結ぶネットワークのLAN側の終端にあるファイアーウォールシステムの2台を統合して利用することで、運用コストを抑えながら効率化を進めることが目的である。本論文では、この新しいシステムの実際の導入時の問題、運用について述べながら、IR委員会の報告による今年度の学生生活実態調査の結果も踏まえて、今後の本学の情報システムの運用について検討する。

II. 旧ネットワークシステムについて

2023年8月より、新しいネットワークシステムとNASによるデータ共有システムが稼働した。本学は2017年に大規模なネットワーク工事があり、LAN(注3)を下図のような構成で引いている。学内には業者が2社、導入にかかわっており、学内全体のネットワークをR社、インターネット教室とパソコン教室はU社という状態になっており、先ほど述べたファイアーウォールについてもそれぞれの業者で1台ずつ、計2台設置されていた(図1)。筆者自身は2019年に本学に赴任しており、旧ネットワークを理解するのに一苦労した記憶があった。これは独立したネットワークが学内に複数存在しており、さまざまな権限の設定がそれぞれの業者で異なっていたためであった。

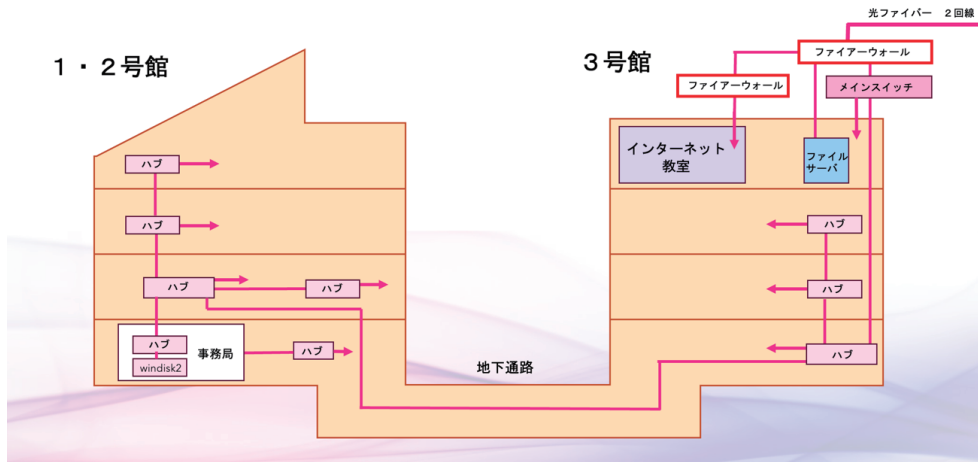


図1 旧学内敷設LAN簡易見取り図

またネットワークを複雑にしている原因の一つに、旧ネットワーク以前(2016年より前)の学内有線LANにおける古いケーブルは取り払われていないことがある。これにより新旧のケーブルが入り交じるといふ、更に複雑な状態に陥ることとなっていた。これは敷設ケーブルを取り払うのに高額な費用が発生するため、当時の判断で撤去しなかったためであった。ただ、新旧のケーブルは目視で見分けることが可能で、図2のようにCAT6(注4)の印があるケーブルが2017年に敷設された新しいものである。

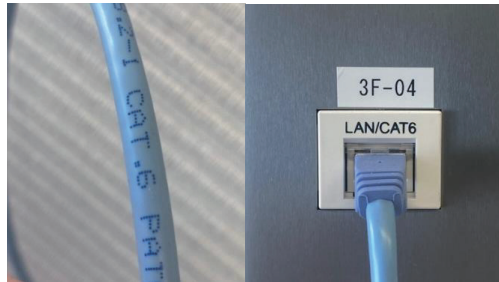


図2 CAT6 ケーブルと新しいLAN コンセント

Ⅲ. 旧ネットワークシステム（ファイルサーバ）

旧サーバはファイルサーバと学内で呼称されており本学施設である3号館4階に設置されている大型のブレード型サーバである。4機のサーバが常に稼働しており、デュアル Xeon CPU の構成となっている（図3）。また、ファイルサーバという名前の由来は、共有設定されたデータフォルダの名前である。データはその中へ格納されて共有され運用している。内部データは細かく分類されており、主に以下のようになっていた。



・旧ファイルサーバ フォルダ構造	00情報
	01教員
	02事務
	03共通 1
	04共通 2
	05委員会
	06法人
	その他

図3 HP社のブレード型サーバ（旧ファイルサーバ）とデータ構造簡易図

ファイルサーバのデータフォルダはアクセス権限が設定されており、後述するAD（アクティブディレクトリ）において管理されていた。これによって各ユーザにアクセス権限が細かく割り振られており、ユーザによってフォルダの可視、不可視の状態、データ読み書きできるフォルダが異なった仕様で運用されている（図4）。

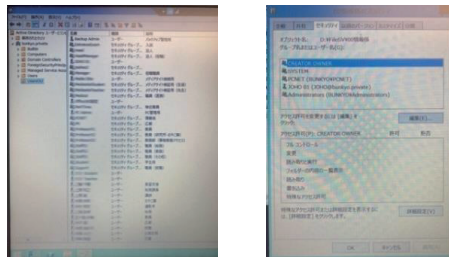


図4 アクティブディレクトリにおけるユーザリストとフォルダ共有設定

IV. AD (アクティブディレトリ) と旧ネットワーク構成の問題点

AD とは Windows のサーバに搭載されている機能で、ネットワークにつないでいるクライアント PC (注5) やサーバ、プリンター、アプリケーションなどの情報を収集し、一元管理できるディレトリサービスのことである。

本学は、入職の時点で AD からユーザアカウントが一人一つずつ配布される。このユーザアカウントを所持していれば、学内にあるドメイン (注6) 参加している PC であればどの PC でも、ログインすることが可能となるシステムであり、機材を共有することができるのがメリットである。また管理者からすれば、ドメイン配下のユーザを一元管理、把握できることがメリットである。

Windows サーバがもつこの機能を最大限利用して構築されたのが旧ネットワークであった。ただ、このシステムには問題もあり、運用管理に大きなマンパワーによる労力が必要であること、サーバ、PC に関するスキルが高くないと制御が難しいことであった。通常、オンプレミス型サーバを設置する場合は、サーバ管理者を専任で置く必要があるが、兼任で置くことしかできなかったため、最大限に性能を発揮・運用させるには難しかったと思われる。

また、現在、サーバをオンプレミスで維持していくには、コスト面でも見合わない状態になってきている。クラウドサービスにおけるサーバが全盛の現在では、できるだけ省スペース化を進め、コスト削減することが叫ばれており、サーバを 24 時間 365 日走らせる電気代と、物理的な空間の占拠、夏場の冷却のためのクーラー常時作動、また空冷ファンの騒音など、専用サーバ室がないと、本来は維持が厳しいものであった。実際に本学のサーバは、夏に熱暴走で空冷ファンが異音を放ったり、一部の基幹ハブの空冷ファンが故障していたことは、このサーバ維持に関する問題を如実に表すものであった。

さらに、4 階インターネット教室と 2 階のパソコン教室は設置業者が異なっており、全体を管轄する R 社のネットワークとは別のネットワークとなっている。このため、ネットワーク設備の終端に Fortigate²⁾ と呼ばれる UTM (ファイアウォール) が設置されており、これは全体のネットワークを管轄する R 社のネットワーク終端にも設置され、二段構えでファイアウォールが設置されている状態であった。Fortigate は運用に、年間保守とライセンス料が必要である。またファイアウォールの機能として優秀であるため、米国の業者がほぼ寡占している状態で、維持費も高額になっている。これらの年間保守料とライセンス料を二重で経費から落とすことになっていたため、無駄を省き効率化をはかる観点から、ネットワーク構築に関して見直しが必要であった。

V. 新ネットワーク装置の導入概要

以上、III・IV章で述べた問題点や更新の必要性より、新しいネットワークシステムへ切り替え検討が、約2年かけて、情報ネットワーク委員会で討議された。まずは R 社の提案による、オンプレミスサーバをそのまま機能は同等で、最新のものへ更新する案で見積もりとなったが、最低限必要なもので絞っても導入の当時よりも倍程度の額となり、非常に高額となった。この価格での導入は予算的に厳しいことから、代替案を模索すべく他の業者に見積もりをとることとなった。別ネットワークを導入していた U 社もオンプレミス型を導入することを進めてきており、クラウド型のサーバ提案となると両者ともオンプレ

ミス型サーバよりも初期導入コストが非常に高くなるという見積もりであった（前紀要³⁾で検討し期待された AzureAD（注7）も含むとさらに高額）。

情報ネットワーク委員会の考え方としては、コスト削減、オンプレミス型サーバの廃止、管理のための労力の削減を前提に考えていたので、利用の仕方を根本から考え直し、サーバ設置ではなく、もっと簡易なデータ共有のための NAS を設置することで対応できないか、この方針で業者対応しながら考えていくことになった。

NAS を導入するということは、AD による管理をやめるということになる。Windows サーバの機能である AD を止めるとなると、新たな問題が発生してくる。それはⅡ章でも述べたデータファイルのアクセス権限、ユーザアカウント問題、そしてクライアント PC の設定についてである。データのアクセス権限については、ユーザ数が増えれば増える程、管理の労力も増える。できるだけユーザの数を減らす施策として、共有アカウントでユーザをまとめていく方針で行くこととなった。事務職員、教員、法人、管理職の4つのアカウントに絞ることで、現存のユーザ数（停止、未使用等含め 120 程度）を4つに削減し、大きく減らすことを会議で決定した。ユーザを減らすことで、フォルダデータに対する細かいデータのアクセス権限を割り振ることは難しくなるが、秘匿データは管理職が管理し、その他のデータは共有して見えることで、お互いの仕事を把握し、情報の共有につなげてワークシェアリングしていく方針が会議で提案されたので、その方針で設定をしていくこととなった。以前より、ファイルサーバは事務局内で利用されることが主であるので、この仕様の変更には戸惑う声もあったが、2024 年 1 月現在はこの方針で運用されている（図5・図6）。

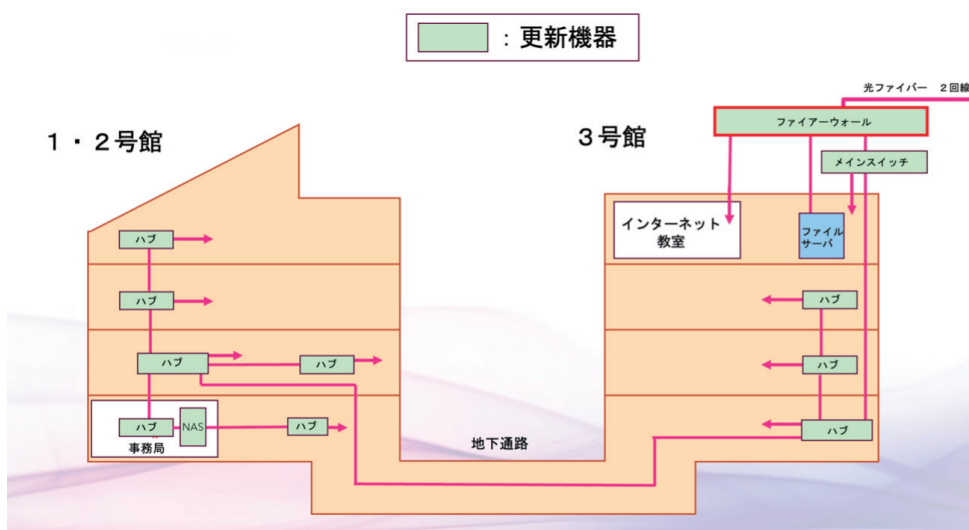


図5 新ネットワーク模式図

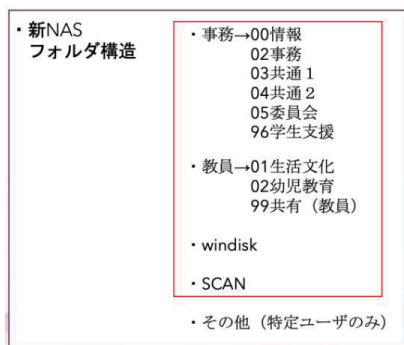


図6 NAS のデータ構造簡易図

データのアクセス権限、ユーザアカウントの問題はこれで片づいているが、問題はクライアントPCである。一度ドメインに参加したPCは、そのネットワーク内で認証されることで、ログインし利用することができる。これをローカル運用へ戻すということは、本学の「文教」というドメインに参加するすべてのPCの設定を元に直す作業が発生する。この作業は現在もまだ進行中で今年度内には終えたいと考えているが、なかなか労力のかかる作業である。初期設定を行った管理者がローカル管理のパスワードをどのように設定しているか調査するところから始まり、内部データも大きくバックアップ作成し、移動させる必要があり、PC利用者にも負担をかける。少しずつ地道に作業していくしかないことであるが、オンプレミス型サーバを廃することで得られるメリットは大きい。2023年度末には全作業を終了し、旧サーバを完全に停止させる予定となっている。

VI. 新ネットワーク、NAS 運用

現在、学内ネットワークは新しいNASによる運用がされている(図7)。このNASはBUFFALO製のもので、8TBのHDDを2台搭載し、ミラーリング設定により常にバックアップをとっている。導入時にはU社の業者とともに設定を行ったが、初期導入時にはデータへのアクセス遅延がひどく、原因が不明な状態であった。設置場所も管理が行き届きやすい事務局内に設置していたが、アクセス遅延の原因を追及する際、ネットワークの根幹に近い場所へと移動された。また、1日1回、深夜に再起動をかける設定に変更したことで、現在は遅延なく運用できている。



図7 当初事務局に設置されたNAS (BUFFALO 製品)

NAS の運用と同時に、基幹ハブについてもすべて保守切れから交換に至っている（図 8）。基幹ハブは、通常目には見えない電板の内部に設置されており、常時電源が入るように設定されているが、他の工事の際にネットワークが停止したことがあった。この原因を探ったところ、1 号館の基幹ハブの電源が下の階の倉庫から引っ張って供給されていることがわかり、ブレーカーと電源の設定を電気工事業者に見直していただくことがあった。その後は大きな問題もなく運用できている。また基幹ハブの設定を見直す際に、学生用の有線 LAN のポートが設定されていることも判明した。旧ネットワーク導入時に立ち会いしていないので、おそらく学生が自分の PC を有線でインターネットに繋いで使う際に、教職員ネットワークへ入ってこないよう、物理的に分けたものと思われる。現在利用の予定はないが、今後学生が PC を用いてネットワークを利用した作業を行う際には必要になってくるかもしれない。



図 8 新しく設置された基幹ハブ（Panasonic 製品）

VII. 2023 年度の学生生活実態調査の結果と本学の情報システムの今後

II・III・IV章では、主に新旧ネットワークシステムの違いについて、V・VI章では新しいネットワークシステムについて概要を述べた。本章では今まで継続的に行われている今年度の本学 IR 委員会より全学生へ向けて行った学生生活実態調査の結果を中心に、本学の情報システムの今後の方針について考察する³⁾⁴⁾。質問は多岐に渡っており、その中で本論文と学生の情報環境について関連する項目を取り上げ考察していく。

調査は 2023 年 7 月に実施された。回答率は 56.7%で昨年度の 74.9%より低くなっている。質問は分岐を含めると 60 問以上となっている。この中で本論文に關係する質問は以下である。過年度データとの比較で考察する。

（質問 47）あなたは大学生生活に関する情報を何から得ていますか。

（複数回答可 単位：％）

	Outlook メール	Teams チャット	教務 システム	大学 ホームページ	LINE	Instagram	YouTube
2021 年度	79.8	12.6	0.0	1.3	-	-	-
2022 年度	70.6	63.8	39.9	10.8	-	-	-
2023 年度	81.5	71.7	41.6	15.6	7.5	12.7	1.7

質問 47 の結果は上記のようになっている。Outlook メールが依然として一番高い値である (図9)。昨年度より運用され始めた教務システムと Teams についても高くなっている。これらの結果から Teams などのコミュニケーションソフトウェアが社会全体に浸透してきていることが考えられ、Teams のチャット機能などの手軽に連絡が取り合えるシステムは、スマートフォンのメールと同じような感覚で扱えるため使いやすいのであろうと予想する。その他、今年度より調査された LINE、Instagram、YouTube など今後どうなっていくのかが気になるところである。教務システムについても4割の学生が確認するという結果は良好であると考ええる。

(質問 48) あなたは PC を持っていますか。(単位 : %)

	全体	1部	3部	生活文化	食物栄養
はい (2021 年度)	58.8	63.6	50.5	80.8	61.8
はい (2022 年度)	57.0	52.8	54.5	75.0	58.0
はい (2023 年度)	43.9	39.4	43.2	60.0	37.0

質問 48 の結果は上記のようになっている。PC 所持率について全体の約4割が持っているという結果になっている。生活文化専攻の結果が去年と同様に飛び抜けて高いが、前年度の結果と比較すると全体的に数値の落ち込みが大きい。

(質問 49) PC を購入する予定ですか。(単位 : %)

	全体	1部	3部	生活文化	食物栄養
いいえ (2021 年度)	91.1	92.6	92.6	90.0	93.1
いいえ (2022 年度)	89.9	85.3	89.3	88.9	100.0
いいえ (2023 年度)	90.7	95.0	92.0	60.0	100.0

質問 49 では上記のような結果となり、PC を購入する予定に対して「いいえ」の値が前年度に比べて増えている。おそらくはスマートフォンの高機能化により、スマートフォンのみで事が足りると考えている学生が多いと推測する。

(質問 50) 自宅での Wi-Fi 環境は整っていますか。(単位 : %)

	全体
はい (2021 年度)	93.5
はい (2022 年度)	92.3
はい (2023 年度)	90.2

自宅の ICT 環境の中でも通信面、インターネットの無線環境 (Wi-Fi) については昨年度と同様に9割が完備している。ただし、この結果も年々の数値の落ち込みがみられ、今後注視していく必要がある。

(質問 51) 自宅 (寮、アパート) にプリンターはありますか。(単位：%)

	全体
はい (2021 年度)	56.0
はい (2022 年度)	57.3
はい (2023 年度)	55.5

インターネットを通じた情報のやりとり (メール、授業におけるビデオ会議) は出来ても、やはり課題提出や資料を手元で確認したい場合などにプリンタは重要である。プリンタ普及率はほぼ昨年と同様の結果となり、約 4 割の学生は自宅で印刷ができないことがわかる。スマートフォンや PC に比べて必要性の順位がどうしても下がってしまうのであると予想できる。

2023 年度、学生生活実態調査の情報に関連する質問項目の結果は、筆者の予想する結果とは異なっていた。コロナ禍の際にオンライン授業やインターネット環境が必須である社会の流れがあったにもかかわらず、本学の学生の PC 所持率、購入意欲は高くない。これは PC の値段にも関連するが、最近ではスマートフォンの価格の高騰と高機能により PC の性能を凌駕する部分もあると思われる。PC でないとできないことがあることに気がつかず、学校の PC で課題を済ますことで、購入の必要を感じない学生が多いのではないだろうか。また、新型コロナウイルスの感染症法の位置づけが 5 類となり⁵⁾、社会が元の状態へ戻ろうとしているところであるが、前の状態に完全にもどったわけでもないという、まだ中途半端な状態と、社会が元に戻るためにはエネルギーが十分必要であるのに対して、国全体の不景気、不況感が購入意欲を減退させている一端となっているのかもしれない。

現在、本学でもコスト削減とシステムの効率化が求められている。無駄を省き、必要な部分にお金を回すことで効率のよい経営が求められている。また、出生率低下がもたらす若年層の人口減少は、全国の大学の入学者数に影を落とし始めている⁶⁾。

BYOD (Bring Your Own Device) のような自分で使うものは自分で用意するという考え方が普及しつつあるように、必要な情報を自分自身で探し取得しに行くような、以前よりもアグレッシブに活動しないといけないような時代となってきているように思う。情報システムや更新を行う立場から考察した場合、大学の魅力を強く発信するためには経営効率化と無駄の削減だけではなく、他にはないマイノリティーを打ち出すための施策も、これまで以上に重要となってくるだろう。独自性を持ち、希望や夢をもって楽しく過ごし、大きく成長できるような、学生を上手に支援できるような情報システム、そしてデジタル支援のあり方について、今後考えていきたい。

(注 1)

オンプレミス型とは社内 (学内) にサーバや通信回線、システムを構築し、自社で運用を行う形態のことである。

(注 2)

NAS とは Network Attached Storage の略で、ファイルサーバとしての機能が組み込まれたストレージ製品 (データ保存領域を持つ製品) である。

(注3)

Local Area Network (ローカルエリアネットワーク) の頭文字を取ったもので、一定の限定されたエリアで接続できるネットワークのこと。家庭で使用するネットワークを「家庭内 LAN」、会社で使用するネットワークを「社内 LAN」などと呼ぶ。

(注4)

Cat6 の LAN ケーブルは、通信速度が 1Gbps である。これは Cat5e の LAN ケーブルの通信速度と変わらない数値だが、伝送帯域を 2.5 倍に広げることにより、通信料が多くなっても対応できるという大きなメリットがある。

(注5)

クライアント PC とは、サーバからサービスを受け取る PC のこと。

(注6)

ホームページの URL などに使われるドメインを正確に定義すると「インターネット上に存在するコンピュータやネットワークを識別するための名前である。ローカルネットワークに名前をつけて、そこに所属することで PC を管理、識別できるようにする。

(注7)

AzureAD は Microsoft 社の Windows サーバでの管理方法の一つで、現在本学では AD (Active Directory : アクティブディレクトリ) と呼ばれるローカル向け (学内のみで通用する) 管理システムを運用している。これにより学内の PC を管理することができ、運用の効率化をしている。この AD システムをオンライン上でも可能とするのが AzureAD のシステムである。マイクロソフトアカウントのみで、PC へログインし、メールアカウントや SharePoint など様々なログインを一元化することができる。

文献

- 1) 株式会社日本HP
(<https://www.hp.com/jp-ja/home.html> 2024.1)
- 2) Fortinet ジャパン合同株式会社
(<https://www.fortinet.com/jp> 2024.1)
- 3) 砂田治弥, 山崎宜久, 小川美樹, 桐崎香子「新教務システム導入における学内インフラ整備と今後の展望 -学生実態調査の結果をもとに-」, 愛知文教女子短期大学研究紀要 44(2023), pp.1-10.
- 4) 砂田治弥, 山崎宜久, 小川美樹, 桐崎香子, 原真由美, 上島知之, 松本晋治「遠隔授業の取組と学生の意識調査 -学内アンケートより-」, 愛知文教女子短期大学研究紀要 43(2022), pp.31-57.
- 5) 厚生労働省 新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後の対応について
(<https://www.mhlw.go.jp/stf/corona5rui.html>)
- 6) 総務省 全国人口調査
(<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2022np/pdf/2022gaiyou.pdf>)

実践報告

人生すごろく『金の糸』 —キャリアチャレンジ 過去・現在・未来をつなぐ—

土井 拓郎* 小川 美樹*

Life is amazing Golden thread: Career Challenges
Connecting the past, present, and future

Takuro Doi, Miki Ogawa

Abstract

All students worked on the self-analysis tool Life is amazing “Golden Thread” as part of their career challenge. As they play around in group work, they look back on what happened since elementary school, and through talking and listening, they discover their own strengths and the “golden thread” of the strengths of their group members. We have compiled this effort into a practical report.

要旨

自己分析ツール「人生すごろく『金の糸』」をキャリアチャレンジの中で、全学生が取り組んだ。グループですごろくをしながら、小学校からの出来事を振り返り、話をすること、聴くことで自分の強み、グループのメンバーの強み『金の糸』を見つけていく。この取り組みを実践報告としてまとめた。

Keywords : golden thread, career, self analysis

キーワード : 金の糸、キャリア、自己分析

I. はじめに

令和5年度より全学生を対象に「キャリアチャレンジⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の科目が開講された。この中のキャリア支援の取り組みとして、前期に自己分析ツールとして JCDA（特定非営利活動法人日本キャリア開発協会）が自己探索ツールとして開発した「人生すごろく『金の糸』」を取り入れた。

グループワークで小学生から大学生までのすごろくをする。サイコロの出た数で進みそこに書かれている問いに順に語っていく。それはどんな出来事でその時にどう思ったのか。また、メンバーの出来事の話聞き、メンバーの想いを受けとめる。

出来事を語ること、聞くことから、自分らしさ『金の糸』を見つけていく。

* 愛知文教女子短期大学

II. 「人生すごろく『金の糸』」

1. 「人生すごろく『金の糸』とは (引用：JCDA ホームページ)

「人生すごろく『金の糸』～golden thread～」はキャリアカウンセリングにおいて重要な「自分を振り返ること」、「経験や思いを言葉にすること」をゲーム形式で仲間と一緒に楽しみながら出来る自己探索ツールです。

私たちは生まれてからこれまで様々な経験をしています。それらひとつひとつの経験にそれぞれの人にとっての意味があり、その経験を物語りながらそれらの経験を繋ぐ、「つながり」が見えてきます。その「つながり」が“自分らしさ”です。“自分らしさ”のつながりは何より価値のある『金の糸』と言えるのではないのでしょうか。過去を語ることで見えてくる『金の糸』はこれからの人生をどのようにしていきたいか、将来の方向性も含まれています。「人生すごろく『金の糸』～golden thread～」を通して、生涯にわたって繋がっている“自分らしさ”(金の糸)に気づく体験をたくさんの方にして頂きたいと考えています。

(京都産業大学の実践的課題解決型教育 (Project Based Learning) の授業において、JCDA が提示した課題「学生の視点を活かす、キャリアカウンセリング体験プログラム開発」に取り組んだ学生たちのアイデアから生まれました。)

図1 「人生すごろく『金の糸』」リーフレット

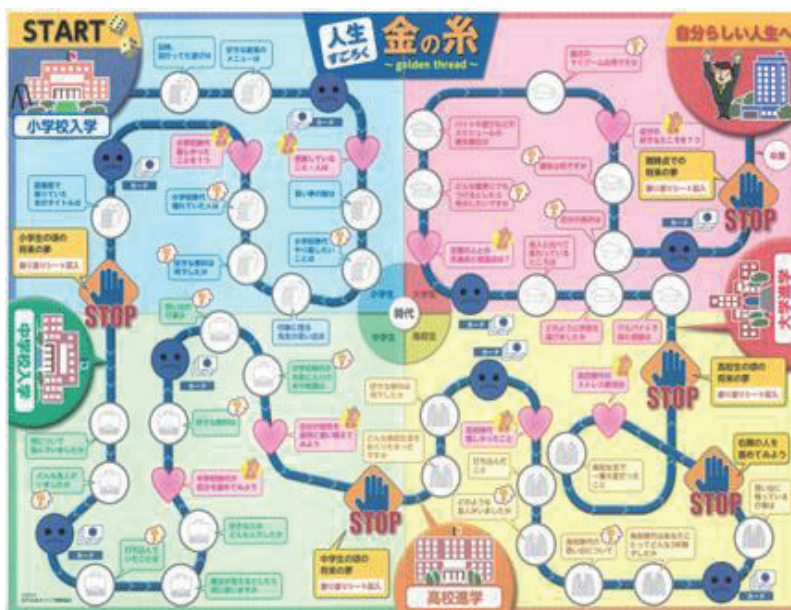


図2 「人生すごろく『金の糸』」

2. 『金の糸』のネーミングについて

(引用：JCDA 人生すごろく『金の糸』ワークショップ資料)

ある人は、「人生には意味がある」と言い、またある人は「人生に元々意味はない」と言います。ならば人生に元々意味があるかないかではなく、意味を見出そうという意図的な働きかけが重要なのかも知れません。

人は生まれてから今までいろいろな経験をしています。覚えていることもあるでしょうし、忘れてしまったこともあるでしょう。でも振り返ってみて、何らかの印象とともに生き生きとよみがえる経験、それらは、その人に何かしらの影響を与えたものではないでしょうか。その印象を一つ一つ語る中から、それらの経験を繋ぐ“つながり”が見えてきます。

その“つながり”が“自分らしさ”です。そうして見えてきた自分らしさとは、自分にとってなにより大切に、大事にしたい、価値のあるものです。“つながり”を「糸」にたとえるなら経験を振り返ることで見えてくる“自分らしさのつながり”は何より価値ある『金の糸』と言えるのではないのでしょうか。

この過去を振り返ることで見えてくる自分自身は、過去だけではなく、これからの人生をどのようにしていきたいか、人生を創造して行く将来の方向性もそこには含まれています。「人生すごろく『金の糸』」は、上記のような考えの下に命名しました。

3. ゲームの目的

「人生すごろく『金の糸』」は、ひとりひとりが自分のキャリアを形成していく上で欠かせない、「自分らしい生き方」を考えるゲームである。

このゲームは、参加者自身が小学生時代から大学生時代にかけて経験した出来事につ

いて、「すごろく」盤面からの“問いかけ”に答えながら“自分らしさ”の“つながり”つまり『金の糸』を見つけだしていこうというものである。

通常「すごろく」は、「スタート」から始まり最後は“ゴール”または“あがり”で終わるが、「人生すごろく『金の糸』」の始まりは同じく“スタート”でも、おわりは“自分らしい人生へ”となっている。ゲームを通じて『金の糸』を見つけ、これを軸に新しく経験を創り、人生を切り拓いていくことをイメージしている。

『金の糸』を意識すると、エネルギーが沸き（自己効力感）、その人らしい行動につながる。また、人生において大きな壁にぶつかったり、人生の岐路に立った時、自分らしい選択を手助けしたり、自分の望むことに向けて進む力がつくのである。

キャリアチャレンジの中で、この「人生すごろく『金の糸』」を行うことで、ひとりひとりが自分の『金の糸』を見つけることを目的とする。

Ⅲ. 人生すごろく『金の糸』の実施

1. 手順

(1) 準備

他学科、専攻の学生と一緒にできるように、グループ分け、席表作成を行い教室に掲示。すごろく盤1式、振り返りシート、白紙用紙を配布する。

(2) ゲームの説明

机上に配布したすごろく盤を実際にみながら、スライドを活用して、ゲームの説明を行う。本来のプログラムは、180分で組まれているが、80分に変更して行う。

特に、注意点として、次の大切な約束をする。

(引用：JCDA 人生すごろく『金の糸』ワークショップ資料)

表 1 大切な約束

<ul style="list-style-type: none">・自己理解を深めるためのゲームです。テーマについては差し支えない範囲で話しましょう。・この部屋で聞いた内容については、「守秘義務」を守りましょう。・人が話をしているときは「うなずき」「あいづち」等の反応を返して、話しやすくしましょう。・相手や自分のことを一方的に判断したり、決めつけないようにしましょう。・グループの時間を独占しないようにしましょう。

「経験」を語るときには、「出来事」として何があったのか、その「出来事」についてどう思ったのか、感じたのか、考えたのか、どう（行動）したのかについて語るようにする。

同じ出来事でも、人によって感じ方や捉え方が違うので、自分の言葉で語ることで自分らしさ、その人らしさが伝わることを伝える。



図3 「人生すごろく『金の糸』」説明スライド

小学校入学から、サイコロを振り、サイコロの出た目の数だけすすむ。メンバーが順にその出来事について語っていく。例えば、2 が出たら、「好きな給食のメニューは」についてグループのメンバーが同じ問いに答える。

- ・青い顔のマーク（ブルーマスに止まったら・・・）
ブルーマスカードを一枚引いて、書かれているテーマについて話す。話したくないテーマの場合は、再度カードを引く。
- ・ハートのマーク（ハートのマスに止まったら・・・）
メンバーが発言したら、グループ全員で拍手をする。
- ・クエスチョンマーク（「？」マスに止まったら・・・）
コマに書かれているテーマについて答え、その上で次に話す人が5種類のアンサーボードの中から1つ選び質問する。
- ・ストップマーク（ストップマスに止まったら・・・）
絶対に止まり、「その時代の将来の夢」について話す。



図4 「人生すごろく『金の糸』」小学校

(3) メモを取る

メンバーが話す出来事について聞きながら、気が付いたことなどのメモを取る。

表2 メモするポイント

<ul style="list-style-type: none"> ・ 何度も繰り返される言葉や表現 ・ 強い調子で、あるいは生き生きと話しをしている時の出来事 ・ 特有の言葉や表現、あるいは印象に残る言葉や表現
--

(4) 情報を共有するポイント

メモをした内容をもとに情報を共有する。また、メンバーの話聞いて感じられた印象や自分との違いなどを追加して共有する。

(5) タイムスケジュール

表3 タイムスケジュール

10:40	10分	着席、出席確認、ゲームキット、振り返りシート、白紙用紙の配布
10:50	10分	<p>オリエンテーション</p> <p>*ゲームの目的</p> <p>今日は、「人生すごろく『金の糸』」ゲームを通して、「自分らしさ」を言葉にすることにトライして頂きたいと思います。</p> <p>*『金の糸』の説明</p> <p>『金の糸』とは何だと思えますか？一言でいえば「自分らしさ」のことです。私たちは、生まれてから今に至るまでいろいろな経験をしてきています。小学校時代に出会った先生や友達、クラスでの出来事、学校行事や友達との関係の中であったことなど、その中で印象に残っている経験はどんな経験でしょうか。印象に残っているものは、その人にとって価値のある、今につながる影響を与えた経験です。</p> <p>印象に残る経験について、何があったのか、どう感じてどう思ったのかを語る中に、その経験と自分との“つながり”である「自分らしさ」が表れています。</p> <p>*ルールとゲームの手順の説明</p> <p>①キットの説明</p> <p>②ルールと進め方の説明</p> <p>■ゴール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『金の糸』＝自分らしさを一言で表し、それを表す具体的な経験を語れるようになること ・グループのメンバーの『金の糸』を紹介できるようになること

		■進め方 ■ルール ③大切な約束
11:00	10分	自己紹介「私の好きなもの・こと」
11:10	40分	ゲーム実施 それでは、ゲームを始めましょう。 *メモについて説明 スタートに駒を置いて、サイコロをふって始めてください。
11:50	15分	私の『金の糸』感想 ・語ることにに対する肯定感を促す ・『金の糸』への興味喚起 ・客観視や内省を促す ワークシート記入 共有
12:05	5分	Forms 回答、次回の告知

2. 実施

(1) 実施状況

全学生がキャリアチャレンジの中で「人生すごろく『金の糸』」を行った。

- 令和5年5月1日 幼児教育第1部1年、第3部2年 41名 (担当:小川)
- 令和5年5月8日 幼児教育第1部1年、第3部2年 43名 (担当:土井)
- 令和5年5月22日 幼児教育第1部2年、第3部3年 52名 (担当:土井)
- 令和5年5月29日 幼児教育第1部2年、第3部3年 51名 (担当:小川)
- 令和5年6月5日 幼児教育第3部1年、食物栄養・生活文化1年 60名
(担当:土井)
- 令和5年6月19日 食物栄養・生活文化2年 57名 (担当:土井)

グループごとにすごろくを楽しみながら、取り組むことができた。初対面の学生ともすぐに打ち解け、共通の話題では大いに盛り上がっていた。すごろく盤を囲み、みんなが前かがみの姿勢で話すこと、聞くことに集中していた。マスクをしているので、表情はわかりづらいが和やかな雰囲気の中で行うことができた。グループによって、小学校時代で盛り上がり、なかなか進めないグループもあったが、大学時代まで進んだグループもあった。



図5 「人生すごろく『金の糸』」 授業の様子

(2) 振り返りシート

それぞれの時代のストップマーク（ストップマス）に止まったら、個々に振り返りシートの記入を行う。

①振り返り

- ・自分の特徴「思い出したこと、感じたことを何でも書きましょう。
- ・今の自分につながっていることはある？あるとしたらどういうところ？
- ・その時代の将来の夢

②私の『金の糸』

※ゲームの最後に記入

- ・『金の糸』を表す言葉
- ・それはどういうこと？具体的なイメージを書いてください。
- ・上記を踏まえて『金の糸』を表すエピソードを記入してください。

キャリアチャレンジ
日付 2023/ /

学籍番号 _____ 氏名 _____

人生すごろく「金の糸」振り返りシート

1. 振り返り	小学校時代	中学校時代	高校時代	大学時代
自分の特徴 「思い出したこと、感じたことを何でも書きましょう」				
今の自分につながっていることはある？ あるとしたらどういうところ？				
その時代の将来の夢				
2. 私の「金の糸」 ※ゲームの最後に記入				
「金の糸」を表す言葉	①		②	
それはどういうこと？ 具体的なイメージを書いてください。				
上記を踏まえて「金の糸」を表すエピソードを記入してください。				

©2014NPO日本キャリア開発協会 ゲームを振り返ってこのシートを記入し、自己理解、自己紹介につなげましょう！
※ / までにキャリア支援センターに提出してください。

図6 「人生すごろく『金の糸』」振り返りシート

3. Forms 回答

キャリアチャレンジ終了後、Forms で本日の振り返りをする。

表4 Forms 振り返り

3. 人生すごろく「金の糸」を行った感想を書いてください。

4. あなたの「金の糸」は？
限られた時間でしたが、「自分らしさ」金の糸が見つかった人は書いてください。
例) マイペース、人が好き、努力する、周り流される、ポジティブ など、思い浮かんだキーワードを書きましょう。



図7 Forms画面

4. Forms まとめ

(1) 感想 (6/19 実施)

- ・ みんなですごろくをやって過去のことについて話し合うのがとても盛り上がって楽しかったです。また、他の人の話を聞くのも楽しかったです。あまり話したことない人と関わることができました。また、自分はどんな特徴を持っているのかを周りの子に聞くことができたので良かったです。
- ・ 今回の人生すぐろく「金の糸」を行い、私は行く前は自分自身の強みや長所に自信がなかった部分があったが、今回やってみて自分では気づけなかった長所や班の意外な面がそれぞれ発見できたので良かった。
私は、小学生から今までの振り返り今の自分と変わらないところが今回あまり見つけられなかった。しかし、「～の糸」と決めるときに班の一人一人がきちんと聞いてくれたので、最終的には「勤勉の糸」になった。最後に様々な班の中学生時代や小さいときの体験等多くのことをゲームの中で知ることができ新たな発見にもなったので良かった。
- ・ すぐろくで小学生から大学までの今までの人生を振り返ってみて、こんなことがあった、将来はこうなりたかった、など思い出すことが多くあり、自分らしさを見つけることが出来ました。また、グループを作ることによって、他の人の出来事も知ることが出来、より相手を知ることが出来ました。同じ話題があって盛り上がりたり、どうして?という疑問もカードを使って聴いて、より詳しく内容を知れて、良い時間を過ごせました。今後の自分に活かしたいと思います。
- ・ ゲーム感覚で自分のこれまでの経験についてグループの子と楽しく話すことが出来、

忘れていたような事も思い出すことが出来た。それぞれの時代で自分がどのような環境で過ごしてきたかや、どのような出来事と向き合ってきたかを振り返ることで、今の自分に繋がることを見つけることも出来た。さらに、すごろくをやる中で、グループの子が私の金の糸を見つけてくれたことがとても嬉しく、言われて気がついたことも多くあり自分についてより知ることが出来た。今回見つけた金の糸を大切に、その自分らしさを生かした生活が出来るように心がけていきたい。

- ・すごろくを行う前は、自分はエピソードとか出てこない派だと思っていましたが、自分の中で意外とエピソードが出てきてとても驚きました。また、最後の一人一人の話した感想を伝える場面では、みんなの良いところなど様々な見方で伝えていたことが新たな気づきになりました。もう少し長い時間やりたいと思いました。
- ・自分の過去を振り返るとき、私はよく嫌なことを思い出すことが多いのですが、人に話すつてなると楽しかったことや明るい話題を思い出せて嬉しい気持ちになりました。

また、私が話したことに笑ってくれたり納得してくれたりすることが多くて、楽しかったし自己肯定感が上がった気がしました。この時間でやったことを、これからの自己分析にも活かしていきたいです。

(2) 自分らしさの『金の糸』(6/19 実施)

表5 各学生の『金の糸』

学生A	素直
学生B	テキパキ
学生C	勤勉 静か 落ち着いている 真面目
学生D	提出期限は守る コミュニケーションは苦手
学生E	丁寧 優柔不断
学生F	優しい
学生G	メリハリがある
学生H	真面目 自分がやると決めたことは最後まで頑張ることが出来る
学生I	元気 明るい 前向き ポジティブ思考 努力家 素直 真面目 優しい
学生J	継続力があって我慢ができる
学生K	頑張り屋、何でも挑戦、素直、純粹、器用、天才肌、周りを見て行動、頭が回る、考えすぎ
学生L	明るい、環境に対応しやすい
学生M	責任感がある。
学生N	好きなことに没頭する
学生O	マイペースや自由
学生P	継続力がある、協調性がある、迷うことなく決めることができる、周りに流されやすい
学生Q	はっきりとした金の糸は見つけることができなかった
学生R	何事にもまず挑戦する。

学生S	コミュニケーション、努力
学生T	継続力 明るさ 努力
学生U	明るい 前向き しっかりしてる
学生V	明るい、前向き、周りを観察している、感情を大切にしている、友達を大切にしている、感覚人間、話が深い、
学生W	協調性、聞き上手、精神年齢が高い?
学生X	決めたことを最後までやり抜く、運動のセンスがいい、努力している
学生Y	真面目 落ち着きがある 雑に頼れる
学生Z	困難なことにぶつかったら、自分のペースで乗り越えている。
学生AA	行動力、ポジティブ、誰とでもすぐに話せる
学生AB	決断力 周りに流されない
学生AC	純粋な心を持つてる、努力家
学生AD	継続力、一つのことに打ち込む力
学生AE	継続力がある

(3) 教職員感想・意見 (前期教職員アンケートより)

- ・人生すごろく金の糸：普段交流のない学生とも、分け隔たりなく意見交換ができていた。自分の人生を振り返る機会があまりないので、いいきっかけだと感じました。振り返りシートの記入量が少ない学生も数名いた。就職活動の自己分析に活用できるので、しっかりと記入させて、今後就職活動する前に活用できる形式になっているとよりいいのかなと感じました。
- ・幼教3部 2年生 人生すごろく金の糸 とてもいい題材だと思うのですが、学生には自己分析の必要性や重要性があまりわかっていなかったようで、意図が伝わっていないと感じました。例年、卒学年がどれくらい自己分析が足りていないかをわかっていない状況ではありますが、今回のような自己分析は1回だけではなく、少し期間をおいて別題材でもう一度しても良いのかなと思いました。
- ・「人生すごろく金の糸」大変盛り上がり、自己分析の第一歩としてはいい教材だと思います。最初にルールと進め方をしっかり説明することが大事だと感じました。
- ・金の糸同様、学生主体で行えるワークを取り入れると良いと思いました。
- ・人生すごろく金の糸を続けることは可能でしょうか？

IV. まとめと今後の取り組み

今年度より始まったキャリアチャレンジのプログラムに、「人生すごろく『金の糸』～golden thread～」を自己理解を促すことを目的で活用した。このツールは特定非営利活動法人日本キャリア開発協会が開発されたもので、著者もCDA資格の研修・更新講習で体験したことがある。ゲームの手順としては少人数グループをつくり、サイコロを振って止まったマスのテーマについて一人ずつ経験を語っていき、全員が話し終わったら隣の人がサイコロを振る、を繰り返していくものである。誰もが経験したことがあるすごろくと似

た手順のため、誰でも簡単に参加し進めていくことが出来る。キャリアチャレンジでは日にちを分けて全学科全学年を対象に実施した。これから就職活動を迎える1年生、3部2年生や、すでに始まっている2年生、3部3年生と状況は様々だが、初めての就職活動で重要となる自己理解において自身の価値観や強みをしっかり把握できている学生は少ない。そのような状況で、会話が弾まない、ゲームが進まない、といった心配もあったが、杞憂に過ぎなかった。学科や学年を超えたグループをつくり実践をしたが、学生は進んで自身の体験を語り合い、ゲーム中にファシリテーターである著者が介入する機会はほとんどなかった。実施後の振り返りレポートをみても「…他の人の話を聞くのも楽しかったです。あまり話したことがない人と関わることができました。」「…グループを作っていることで、他の人の出来事も知ることが出来、より相手を知ることが出来ました。」など、初対面のメンバーがいたとしても自身の経験を語り合い、その時の気持ちをグループと共有することで肯定的に自己理解を進めることが出来ていた。

このゲームのゴールは「自分らしさ（＝金の糸）を一言で表し、それを表す具体的な経験を語れるようになること」だけでなく、「グループメンバーの金の糸を紹介できるようになること」とされている。先の学生レポートから「自分では気づけなかった長所や班の意外な面がそれぞれ発見できたので良かった。」「グループの子が私の金の糸を見つけてくれたことがとても嬉しく、言われて気がついたことも多くあり自分についてより知ることが出来た。」とゴールに辿り着いたグループもあれば、自身の金の糸を見つけることで終わってしまったグループも多くあった。これは運用マニュアルにある想定時間（180分間）の約半分の時間（80分間）で実施したことが大きな要因だと考える。マニュアルによるとゲーム全体で80分間、ゲーム後の情報共有と振り返りが50分間とされているため、次年度以降、複数回に分けて実施することを検討していく。特に、振り返りの時間は他者の視点を聞き、自身を客観視し、内省するきっかけをつくるためには重要となる。また、今年度体験した学生も次年度に再度グループを変えて実施することで、前回からの自身の変化や新たな自分らしさの発見に繋げていき、自己理解を深めるきっかけとなるよう実施していきたい。

文献

- 1) 特定非営利活動法人 日本キャリア開発協会
(<https://www.j-cda.jp/teaching-materials/tool/game01.php> 2023.12)
- 2) 特定非営利活動法人 日本キャリア開発協会, 「人生すごろく『金の糸』～golden thread～ 過去・現在・未来をつなぐ ファシリテーター向け運用マニュアル」(2019)
- 3) 隅本 稔, 「職りんく【大学生向けイベント】人生すごろく「金の糸」体験会」
(<https://syokulink.com/kinito1/> 2023.12)
- 4) 特定非営利活動法人 日本キャリア開発協会, 「過去・現在・未来をつなぐに人生すごろく金の糸アワード2022」
(<https://www.j-cda.jp/event-lp/2022/goldenthread2022/> 2023.12)

実践報告

レシピコンテストへの取り組みが学生の学習能力向上に及ぼす影響について — タニタレシピコンテストに参加して —

山口 由貴* 渡辺 香織* 鋤柄 悦子* 中村 寿和**

The Effect of Participating in a Recipe Contest on Students' Learning Ability: Participation in the Tanita Recipe Contest

Yuki Yamaguchi, Kaori Watanabe, Etsuko Sukigara, Toshikazu Nakamura

Abstract

In university education, it is important to encourage independent learning. In each subject, our college has devised ways for students to learn independently, such as by introducing active learning in the classes. Various supports are also provided for students at different levels of proficiency, and measures are taken to ensure that students do not fall behind in their studies. However, the guidance for students who do well is less than that for students who do not, and in many cases, the students are left to their own initiative. This paper reports on the effects of participating in a national recipe contest on students' learning ability.

要旨

大学の教育においては主体的な学びをいかに行うかが重要である。各科目においても授業内でアクティブラーニングを導入する等、学生が主体的に学べるよう工夫がされている。また習熟度においても様々なサポートが行われており、学習に遅れない工夫が学習指導に取り入れられている。しかし、学習進度の早い学生への指導は、学習進度の遅い学生に比べ少なく、各学生の主体性に任せている状況が多くあった。今回、全国的なレシピコンテストに参加することが学生の学習能力向上に及ぼす影響について報告する。

Keywords : recipe contest, presentation, learning capability

キーワード : レシピコンテスト、プレゼンテーション、学習能力

I. はじめに

愛知文教女子短期大学生活文化学科食物栄養専攻（以下食物栄養専攻）では、学習

* 愛知文教女子短期大学

** ナカキ食品株式会社

能力を補うための学生指導は実施されているが、学習能力の高い学生に対しての追指導はあまり実施されていないのが現状である。学習能力を補う指導については、何が不足しているか等を日々の授業への取り組み姿勢・課題の完成度等から明確に推測できる。よって学習能力を補う指導については指導対象・内容において明確であるために的確に行われている現状である。しかし、学習能力の高い学生に対する指導は、学生個々に補うべき能力・伸ばす能力の見極めが必要であるため、指導方法も確立されていない。そこで学習進度の早い学生に対し、レシピコンテストのプレゼンテーションを課題として取り組ませ、取り組み前後の学生の意識や創意工夫等をレポートから読み取り分析することで、効果を見出し、今後の指導に活かすことが重要であると考ええる。

II. コンテスト要項

ご当地タニタごはんコンテスト（以下コンテスト）は令和5年開催で6回目となる全国を対象としたコンテストである。

1. 大会コンセプトと募集テーマ

大会のコンセプトは、郷土料理の継承・人材育成・地域活性化の3点である。

- ・郷土料理の継承（郷土料理を「健康」という視点からレシピをリ・クリエイトし、郷土料理の新たな魅力を創造）
- ・人材育成（若者男女問わず参加しやすくすることで交流を通し、文化や技術の継承）・地域活性化（郷土料理の新たな魅力を引き出すことで、国内・海外の旅行者から注目を集め地域をPR）

募集のテーマは「タニタが考える健康的な食事目安」で郷土料理を現代風にアレンジしたレシピとなっている。タニタが考える健康的な食事目安とは、地域の調理法や調味料も生かしつつ1食あたり500～800kcal、主食量（献立全体のごはん、麺、パン）は100～200g、主菜（献立全体の肉、魚、卵、大豆製品）は70～150g、野菜150g以上（きのこ、いも、海藻は含まず）、食塩相当量3.4g以下であった。

2. 大会スケジュールと書類選考ブロック

大会スケジュールは書類提出8月8日（当日消印有効）、選考・書類審査8月中旬～下旬（9月上旬HPで発表）、全国大会11月19日（書類選考を勝ち抜いたチームが全国大会の会場で審査員に向けて応募したメニューのプレゼンテーションを実施。当日の調理は服部栄養専門学校の料理人にて実施。）であった。

書類選考ブロックは北海道・東北・関東・中部甲信越・近畿・中国四国・九州沖縄の7ブロックから上位2チーム、最多応募ブロックから1チームを追加し15チームが書類選考を通過するものとなっている。

III. 企業との協同

令和5年食物栄養専攻では卒業研究として、こんにゃくについて学んでいるゼミがある。卒業研究では、ナカキ食品株式会社社長の中村寿和氏から、こんにゃくの年間

家庭内消費量が減少していることを学んだ。こんにゃくは伝統食材であり、コンテストのコンセプトである郷土料理の継承と守り受け継いでいくという思いが通じるところがあるため、協同しコンテストに参加することとなった。

稲沢市に本社・工場のあるナカキ食品株式会社では、こんにゃくの家庭内消費量が減少している現状から、現代のニーズに合わせたこんにゃく製品（プレミアムシリーズ）を製造販売している。今回はプレミアムシリーズの米状の製品を利用した。

IV. コンテスト応募メニューと郷土料理についての説明

応募メニューを決定するにあたり稲沢市近郊の食文化を調べ、主食をかきまわし、主菜を冬瓜汁、副菜をはりはり漬け、デザートに抹茶、それぞれを素にアレンジメニューを決定した。

食文化の調査には、愛知文教女子短期大学図書館伊申美香司書のアドバイスを参考に書籍から郷土料理について調査を行った。

応募用写真は試作をナカキ食品広報社員宇山万佐子氏と学生、山口の三人で行った。最終応募写真の調理は学生と山口で行った。器・盆については宇山氏の備品を借りた。写真はナカキ食品広報の安田昌史氏、山田彩乃氏に協力いただき撮影を行った（図1）。



図1 応募メニュー

1. ヘルシーかきまわし

かきまわし、ひきざりは、鶏肉が貴重だった頃のご馳走で、男衆がお祭りの時等ハレの日に作ったと言われている。稲沢市 国府宮神社のはだか祭りの大鏡餅奉納の際

に現在でも大鏡餅作り手にふるまわれている。稲沢市は海に面していないため、庭先に飼っていた鶏を客人や特別な日にしめて食したと伝え聞く。かきまわしは、ご飯と具材が混ざっている、混ぜご飯である。炊き込みご飯とは違い、釜に食材を入れて炊かないため、一度により多くのお米を炊くことができる利点があると推察される。沢山の人におなか一杯おもてなししたいとの思いがこの調理法になったのではないかと考察できる。

2. とうがんの冷やし鉢（ポトフ風）

愛知県において、とうがんは全国 2 位の生産量となっている。この地方の消費が全国的にも多い食材である。一般的には皮が緑の琉球とうがんが主流ではあるが、果肉が厚く貯蔵性に富む早生とうがんが愛知県の伝統野菜に選定されている。一玉のサイズが大きく、一度に沢山煮て熱いままたべたり、残りを冷やして食べたりする。食材が淡白な味なため、うま味のあるものと一緒に煮て食べた²⁾と記録がある。

3. はりはりサラダ

稲沢の西にある伊吹山の影響で冬には乾燥した冷たい風が吹くため、切干大根の生産が盛んだった歴史がある。切干大根は、食材を腐らせず、自然環境を利用して保存食に加工するという昔から受け継がれてきた SDGs の考え方を持つ食材である。水で戻し煮物にする調理法が主流ではあるが、水で戻した後、漬けダレをかけて漬物として食べるはりはり漬けも伝統的に食べられてきた。

4. おうすのこんにやくゼリー（抹茶のこんにやくゼリー）

稲沢市地区では、客人に抹茶を振舞う習慣が近年まであった。特別な客という訳でもなく気軽な客人に対しても、まずは抹茶で、というのが日常だったと伝え聞く。昔の日常を記した文献にも、農作業の合間に抹茶をたて、いっぶくした²⁾と記されていた。

V. 全国大会に向けて

令和 5 年 9 月上旬に、コンテストホームページにて書類審査を通過したことが発表された。全国大会に向けプレゼンテーション準備を整えた。

1. 発表内容

食物栄養専攻が 21 年間受け継いできた「みんないっしょ」という思いがメニューやアレンジに影響を与えていることを主体に発表内容を決定した。受け継がれている伝統料理・伝統食材を現代に受け入れられやすい食べ方の提案メニューについての説明を発表原稿に加え内容を決定した。全ての文章を、発表スタイルで読み合せたところ、大幅にプレゼンテーション時間をオーバーすることが分かり、発表原稿から削除する項目と簡潔な表現への変更を行い 3 分間の発表原稿の調整を行った。

2. パワーポイント作成

パワーポイントは視覚的表現として、プレゼンテーションを視聴する者に効果的に内容を伝えることのできる手法である。発表原稿内容に合わせ、伝統料理の地元である稲沢市の説明資料と食物栄養専攻が受け継いでいる、みんないっしょのクリスマス（アレルギー対応パーティー）、ナカキ食品株式会社が製造している新しいこんにやく製品（米状）について簡潔に資料をまとめた。

3. 発表練習

3名での発表ではあったが、ナカキ食品株式会社広報の宇山氏とは時間の調整ができず、学生と山口とで対面練習を重ねた。発表原稿の読み合せを行う度に、発表原稿の言い回しを微調整した。滑舌がうまくいかず聞きとりにくい文章は、何度も読み合せを行うことで、スムーズな表現が可能となり、さらに発声の抑揚と間の取り方にまで考察することができた。最終練習では、実際のプレゼンテーションを想定し、パワーポイントを投影しながら、マイクを使用し練習を行った（図2）。

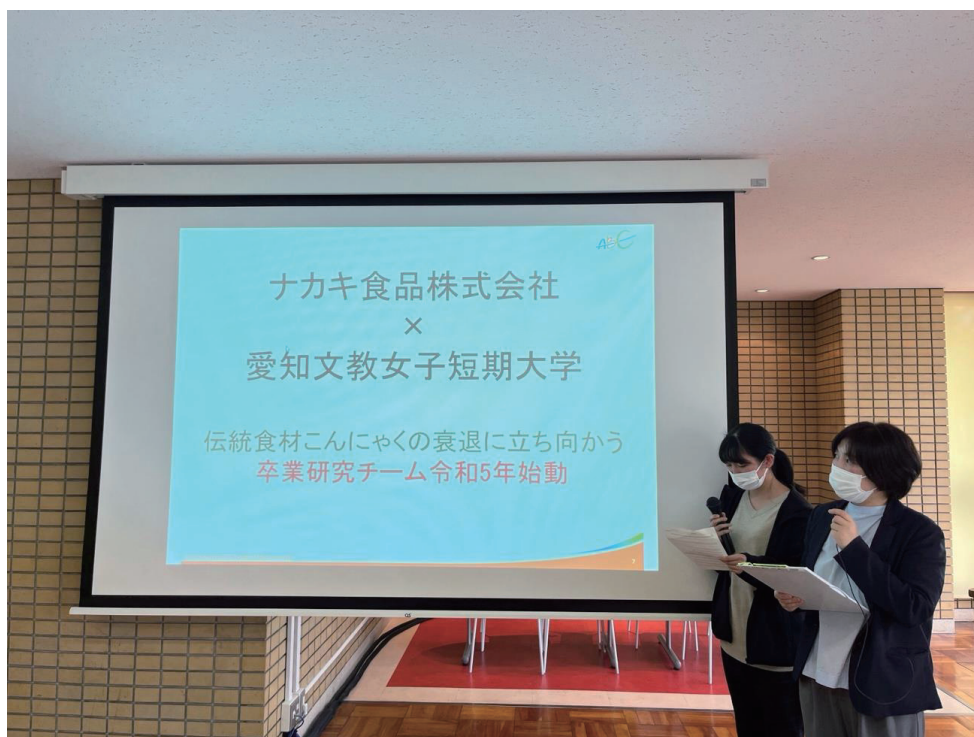


図2 発表最終練習の様子

VI. コンテスト最終プレゼンテーション

令和5年11月東京都渋谷区千駄ヶ谷にある服部栄養専門学校にてプレゼンテーションを行った。最終審査発表者・審査員・応援者・運営関係者総勢約80～100名程度の

会場にて、午前リハーサル、午後本番という流れで行われた。最終プレゼンテーションは練習通りに無事終えることができた。

Ⅶ. 学生の感想

コンテストに参加した学生の感想（原文そのまま掲載）から、本コンテストが学生に及ぼした影響について考察する。

1. レシピコンテストに参加するにあたり、不安に感じたことは何ですか

私はタニタレシピコンテストに参加して不安に感じたことが一つありました。それは全国から一次選考から通った様々な多くの人の中で発表をすることが不安に感じていました。またテレビで見たことのある料理の有名な方々が多く出席する中でプレゼンを何も見ないで発表することが初めてだったこともあり、失敗やつまみないようになど頭の中で考えながら練習を何度も行いました。

2. レシピコンテストに参加するにあたり、楽しみにしていたことは何ですか

楽しみにしていたことは二つあります。一つ目はタニタという有名なタニタ食堂や体重計の企業が主催しているレシピコンテストで、参加するにあたり、全国の様々な郷土料理を深く知ることができ、郷土料理をどのように変化・アレンジさせて健康面や栄養バランスを考えた献立なのかを一つ一つ知り、深く学ぶことを楽しみにしていました。二つ目はタニタレシピコンテストという大きなレシピコンテストに出たことがなく、レシピコンテストの会場の雰囲気や緊張感を直接感じることができることを楽しみにしていました。

3. レシピコンテストに参加するにあたり、事前に準備したことはなんですか

事前に準備したことは、話す内容を山口先生と何度も打ち合わせや話す練習を行い話にくい部分や内容の変更などを事前に準備をしました。準備を行う中でなるべく見ないでしっかりと言葉を大きな声でしっかりと伝えられるようにマイクを使用しての最終調整もおこないました。

4. レシピコンテストに参加した感想

タニタレシピコンテストに参加をして様々な全国の郷土料理を深く学べ、新しい発見や知識を深められてとても考えさせられるような驚きの中、貴重な経験をすることができてよかったです。

全国で北海道から長崎の方まで工夫が多くされた献立の数や彩りや食材の組み合わせや健康面では、野菜を多く取り入れるだけでなく、減塩やパンの代わりにご飯など郷土料理だと和のイメージが多くあった中で参加者の方々が和洋中を折り混ぜながら様々な料理を考えていて、郷土料理のアレンジは食材を変化させるだけでなく、和洋中、その土地の自然を取り入れるアレンジの仕方があることに気づきました。その土地の自然を取り入れた献立の中で特に印象に残っているのが、北海道の献立でジビエ料理やデザートに森で直接採った木の実を入れるなど土地の自然を献立に取り入れる

ことでも SDGs など考えさせられる部分もあり現代の食の課題についても他の参加者の方々のスピーチを聞いて深く学ぶきっかけになりました。参加者の中には親子での参加もあり、スピーチの仕方が様々で、ただ話して伝えるだけでなく印象に残るような工夫が多くみられ会場の雰囲気やスピーチの緊張感から和むような場面があり、人が伝えるスピーチの力や内容に驚きとともに不安が少しだけ軽くなったように思いました。またスピーチに参加する中で、発表する土地の有名なものを手作りして帽子をかぶって発表をしたり、方言を使用して話す内容に郷土の文化も混ぜながらスピーチをしており文化を感じることができて、様々なスピーチを通して郷土料理だけでなく文化も多く触れることができてよかったです。

発表の順番を待つ中で緊張と不安があったけれど、いざ本番で多くの人がいる中、マイクで伝えていく中でしっかりと周りを見て一つ一つ丁寧に発表しようと思い、見ないで言うことを心がけてスピーチをしました。スピーチが終わり緊張が少しずつ軽くなる中で周りをみて再度緊張してしまい、どこを見ていいのかも分からずあわててしまったのが反省点としてありました。

印象に残っているのが、料理研究家の浜内千波さんが発表後の質問で素材の良さを残しつつ郷土料理を変化させることも大切という言葉があり、印象に残りました。郷土料理はその土地の気候や風土に合わせて受け継がれた文化でもあるので、変化させすぎてもよくないことが分かりました。

5. レシコンテストに参加して難しかった点

タニタレシコンテストに参加して難しかった点は、原稿を見ないで発表に臨んだことです。また、会場の様子も当日でしか分からなかったのも、マイクの位置や発表時の視線をどこに合わせるのかが難しかったです。

6. レシコンテストに参加して学んだこと

タニタレシコンテストを通じ学んだことは、二つあります。一つ目は、全国から様々な一時選考を通過した方々の郷土料理を工夫した部分や調理法など多くのことを学ぶことができたことです。私は郷土料理というと地域の風土や伝統をつなぐ料理で、その郷土料理をどのように工夫やアレンジをしているのか疑問に感じている部分があったけれど、タニタレシコンテストに参加して郷土料理を現代風に変化させたり、食材や味付け、見た目の変化が見られて、料理の応用があることに直接見て感じることで学ぶことができました。

二つ目はタニタレシコンテスト後に、審査用に調理盛り付けされた各郷土料理の写真を撮る機会があり、全国の郷土料理の写真を撮ったときに、料理の見た目や食材やお皿の位置が印象に残るように考えられている部分があり、料理だけではなく、彩りや鮮やかさなども大切であることに気づき学ぶことができました。

7. 今後の学習に役立てたいと感じたこと

今後の学習に役立てたいことは、タニタレシコンテストを通じて郷土料理の奥深さや料理の応用方法について深く考えることができて良かったです。この貴重な経験

を活かして栄養士として様々な料理を作る中で料理を喫食者の方々が美味しいと感じてもらえる見た目や、彩りを工夫した献立がたてられるように役立てたいと思います。また、行事食や郷土料理を提供する際に季節感を感じられるような盛り付けや見た目を工夫できるようにしたいです。

Ⅷ. 考察・まとめ

今回レシピコンテストに参加しプレゼンテーションを経験することで、学生の意識は積極的になった。コンテストに参加した学生は普段調べ学習や、ノートまとめにおいて非常に高い能力を示している。特に自主的な学習においては、全ての科目に対し手を抜かず、教員の予想を超えた学習分量をこなしている。しかし、人前での発表は、緊張体質や控えめな性格から苦手としている様子が見られていた。今回のレシピコンテストはプレゼンテーションが必須であり、約 80~100 人程度の傍聴者と YouTube ライブがあるという学生にとってはかなりハードルの高いものであった。発表の練習を重ねる毎に、「この表現は発言しにくいいため他の表現に変更したい」といった積極的な発言が増えていった。また、原稿を読むという作業から原稿の内容を伝えることに意識が変化し、間の取り方や、抑揚についても積極的な提案が出るようになった。

発表会場でも、他のチームのプレゼンテーションを見学しながら、目線はどこに持っていくべきか、全体を見渡すべきか、YouTube 用カメラにするべきか等発表直前まで改善する姿勢が見られた。

学生の事後レポートからも、スピーチの方法がチーム毎に違っていたこと、印象に残るような工夫が多く見られたこと、人が伝えるスピーチの力や内容に驚いたことが記されており、発表に対し積極的な姿勢が見られた。

またプレゼンテーションの方法だけでなく、郷土料理への理解や献立のアレンジ方法について新しい視点を身につけることができた様子がレポートの「郷土料理のアレンジは食材を変化させるだけでなく、和洋中、その土地の自然を取り入れるアレンジの仕方がある事に気づきました。SDGs など考えさせられる部分もあり現代の食の課題についても他の参加者のスピーチを聞いて深く学ぶきっかけとなった。」といった文章から感じ取ることができた。

今回、全国的なコンテストに応募することで、自信と興味を大きくする効果が得られた。また苦手な事柄についても、事前に十分な練習を重ねることで自信をつけ、一緒に活動することで学生が主体的に学ぶきっかけとなった。コンテストの参加は学習能力向上により良い効果をもたらしたと考えられる。今後の指導においてもコンテスト等他者からの評価が分かりやすい活動を、能力を伸ばすための学生指導の方法の一つとして活用することは有効と考える。

文献

- 1) 服部一景 (2017) 『あいちのおかず』河出書房新社
- 2) 「日本の食生活全集 愛知」編集委員会 代表 星永俊 (1989) 『日本の食生活全集 23 聞き書愛知の食事』社団法人農山漁村文化協会, 69-152

- 3) 住田隆元稲沢市長 (1981) 『新修稲沢市史 研究編四 農業』新修稲沢市史編集会事務局, 225-251
- 4) ご当地タニタごはんコンテスト (2023)
(<https://tanitagohan.net/> 2024. 1. 15)

愛知文教女子短期大学研究紀要

第 45 号

令和 6 年 3 月 1 日 印刷
令和 6 年 3 月 31 日 発行

代 表 者 富田 健弘
編 集 委 員 桐崎 香子 渡辺 香織 鋤柄 悦子
加藤 瑞月

編集発行 愛知文教女子短期大学
〒 492-8521
愛知県稲沢市稲葉 2 丁目 9 番 17 号
電話 〈0587〉 32-5169
FAX 〈0587〉 34-2870

印 刷 有限会社 三星印刷
電話 〈052〉 571-0796

CONTENTS

STUDY ARTICLES

- The budding of scientific thinking in 5-year-old children's dialogue
..... Naomi Iwama, Sayaka Ichikawa, Miku Nagano, Anna Seko, Harutomo Ueda... 1
- Survey on the Support System for Children with Developmental Disabilities in Public Daycare Centers
..... Haruka Kamijima... 13

STUDY NOTES

- Changes in Students' Attitudes After Taking Food Service Management Practice I
..... Shoko Ario... 27
- Student Guidance and School Counseling: Government's Student Guidance Guideline and Counseling-based Approaches in Schools Yukihiro KATO... 35

PRACTICAL REPORTS

- Career Challenges: New initiatives to make students' dreams come true
..... Miki Ogawa, Hyun-jung Park, Kaori Watanabe, Mayumi Hara, Takuro Doi... 45
- Industry-academia collaborative product development from the perspective of SDGs: Plant-based product development for "Minna Together" Okumura Tomoko, Murata Nao... 67
- Reporting Current status and operation about Campus Infrastructure Update: Based on the Results of the Student Survey Haruya Sunada, Yoshiko Kirisaki, Miki Ogawa, Yoshihisa Yamazaki... 79
- Life is amazing Golden thread: Career Challenges Connecting the past, present, and future
..... Takuro Doi, Miki Ogawa... 89
- The Effect of Participating in a Recipe Contest on Students' Learning Ability: Participation in the Tanita Recipe Contest Yuki Yamaguchi, Kaori Watanabe, Etsuko Sukigara, Toshikazu Nakamura... 103